

(5) 学会など、外部団体による調査

・日本銃砲史学会 峯田元治氏

調査日：令和元年(2019年)11月15日

調査目的：天守閣に展示予定のレプリカ製作資料の選定のため、熊本博物館所蔵の火縄銃のうち「肥後筒」と特定できるものの調査を行なった。



調査風景

・刀剣審査会(刀剣資料の登録・保管)

旧細川刑部邸の収蔵資料(熊本城総合事務所所蔵・一部寄託)については平成19年の台帳作成以降、平成28年熊本地震による資料の移動・返却などがあったため、平成30年度に熊本城調査研究センター調査研究班と熊本城総合事務所管理班で旧来の台帳と現物の照合及び資料の状態確認を兼ねた整理作業を行なった(「年報5」にて報告)。その際、刀剣資料2点(脇差1点・薙刀1点)については刀剣登録証が付属していなかったため、熊本城総合事務所です算措置を行なった上で、令和元年11月・12月の刀剣審査会にて脇差の登録確認と登録証再発行及び薙刀の新規登録手続きを実施した。またサビの進行など保存環境などの問題を鑑みて熊本博物館へ保管を依頼し、令和2年3月25日以降は熊本博物館に保管している。

①「脇差」銃砲刀剣類登録 熊本県 第35474号 昭和49年8月17日登録(令和元年12月18日再交付)

②「薙刀」銃砲刀剣類登録 熊本県 第57162号 令和元年12月17日登録(今回は新規登録・交付)



① 脇差



① 脇差(銘部分拡大)



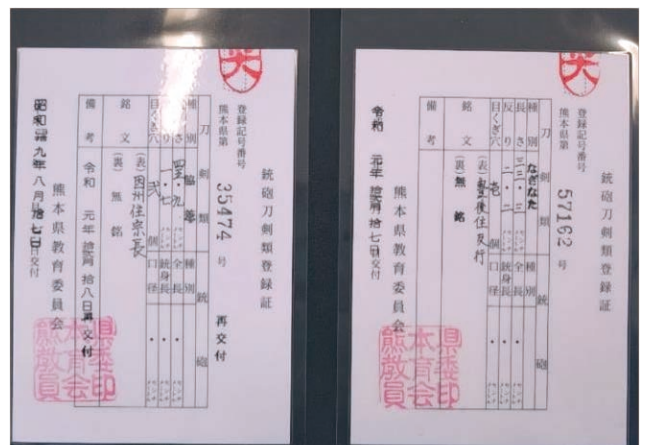
② 薙刀



② 薙刀(柄部分)



刀剣審査会風景(11月)

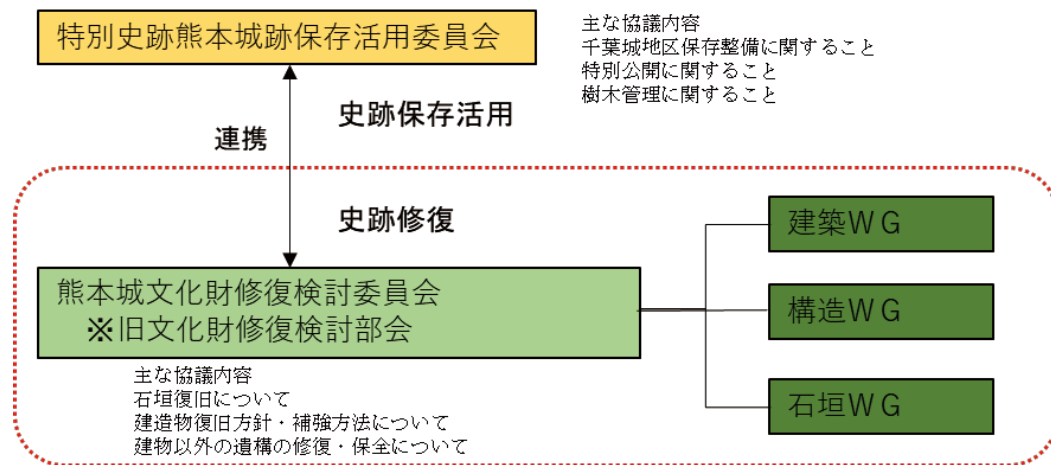


銃砲刀剣類登録証(2通)

2. 委員会運営

(1) 委員会の目的

熊本市は特別史跡熊本城跡の保存と活用の在り方について幅広く総合的に検討するために委員会を設置し、さらに専門部会を設けて専門的かつ詳細な検討を行なっている。文化財修復検討部会は令和元年度以降、委員会となった。



a. 特別史跡熊本城跡保存活用委員会委員名簿(令和元年度)

氏名	分野	役職等
伊東 龍一	建築学 (日本建築史)	熊本大学大学院先端科学研究部教授 熊本市文化財保護委員会委員
伊東 麗子	植物	樹木医 (株式会社 九州開発エンジニアリング)
今村 克彦	考古学 (史跡)	元熊本県文化財保護審議会委員 元熊本市文化財保護委員会委員 一般財団法人熊本城顕彰会理事
河島 一夫	地元地域	上通商栄会会長
坂本 浩	経済界 (地域活性化)	熊本商工会議所専務理事
永田 求	文化振興	熊本県文化協会常務理事 お城まつり運営委員会会長
西嶋 公一	経済界 (地域活性化)	熊本経済同友会常任幹事 熊本の価値創造委員会副委員長
服部 英雄	文化・歴史	熊本県文化財保護協会会長 阿蘇世界遺産学術委員会委員長
廣瀬 美樹	公募	
松田 秀一	観光	日本旅行業協会九州支部熊本県地区委員会委員長
毛利 秀士	地元地域	一新校区自治協議会会長
山尾 敏孝	土木工学 (歴史遺産)	熊本大学名誉教授 熊本市文化財保護委員会委員
山田 貴司	歴史学	熊本県立美術館学芸員

b. 熊本城文化財修復検討委員会委員名簿(令和元・2年度)

氏名	分野	役職等
伊東 龍一	建築学 (日本建築史)	熊本大学大学院先端科学研究部教授 熊本市文化財保護委員会委員
北野 博司	考古学 (石垣)	東北芸術工科大学教授
北原 昭男	建築学 (木質構造)	熊本県立大学環境共生学部居住環境学専攻教授
千田 嘉博	考古学 (城郭)	奈良大学文学部教授
田中 哲雄	歴史学 (石垣)	(姫路市)日本城郭研究センター名誉館長
西形 達明	土木工学 (石垣構造)	関西大学名誉教授 関西地盤環境研究センター顧問
長谷川 直司	建築学 (建築構工法)	国土交通省国土技術政策総合研究所シニアフェロー 文化庁文化審議会専門委員
平井 聖	建築学 (日本建築史)	東京工業大学名誉教授 昭和女子大学名誉学長
宮武 正登	歴史学 (城郭)	佐賀大学全学教育機構教授
山尾 敏孝	土木工学 (歴史遺産)	熊本大学名誉教授 熊本市文化財保護委員会委員
吉田 純一	建築学 (日本建築史)	FUT福井城郭研究所顧問 福井工業大学客員教授
和田 章	建築学 (耐震工学)	東京工業大学名誉教授 防災学術連携運営幹事 日本免震構造協会会長

(2) 審議内容

a. 特別史跡熊本城跡保存活用委員会

第1回 令和元年(2019年)5月31日(金) 教育センター3階 第1研修室

委嘱状交付、運営要綱説明、委員長選任など

議題・報告・熊本城復旧取組状況について

・「千葉城地区(JT跡地・NHK跡地)」について

・「特別公開」について

出席委員 伊東(龍)委員長・伊東(麗)委員・今村委員・河島委員・坂本委員・永田委員・

西嶋委員・廣瀬委員・松田委員・毛利委員・山尾委員・山田委員 (計12名)

第2回 令和元年(2019年)7月30日(火) 熊本市役所 14階大ホール

議題・報告 ・「千葉城地区（J T跡地・NHK跡地）」について

- ・「特別公開」について
- ・千葉城地区の追加指定(答申)について
- ・熊本城復旧取組状況について
- ・城内の希少動植物について

出席委員 伊東(龍)委員長・河島委員・坂本委員・永田委員・西嶋委員・服部委員・
廣瀬委員・松田委員・毛利委員・山尾委員・山田委員 (計11名)

第3回 令和元年(2019年)11月13日(水) 熊本市役所 14階大ホール

議題・報告 ・「千葉城地区（J T跡地・NHK跡地）」について

- ・特別史跡熊本城跡の追加指定について
- ・「高麗門・御成道跡」の暫定整備について
- ・「特別公開第1弾」について
- ・熊本城復旧取組状況について

出席委員 伊東(龍)委員長・今村委員・河島委員・坂本委員・西嶋委員・廣瀬委員・松田委員・
毛利委員・山尾委員・山田委員 (計10名)

b. 熊本城文化財修復検討委員会

第1回 令和元年(2019年)5月27日(月) 教育センター3階 第1研修室

委嘱状交付、運営要綱説明、委員長選任、本年度の委員会の日程、審議事項

報告事項 ・大天守附櫓階段手摺について

- ・飯田丸五階櫓石垣解体調査成果

出席委員 山尾委員長・伊東委員・北野委員・千田委員・田中委員・西形委員・長谷川委員・
平井委員・宮武委員・吉田委員・和田委員 (計11名)

第2回 令和2年(2020年)3月26日(木) 熊本市役所 14階大ホール

報告事項 ・ワーキンググループの開催

- ・今年度の主な審議事項
重要文化財建造物宇土櫓復旧について
飯田丸五階櫓台石垣復旧について
重要文化財建造物下石垣復旧について
本丸御殿周辺石垣復旧について

出席委員 山尾委員長・伊東委員・北野委員・千田委員・西形委員・長谷川委員・宮武委員・
吉田委員・和田委員 (計9名)

ワーキンググループ

平成31年・令和元年(2019年)

4月12日 出席者 山尾委員・長谷川委員・和田委員

4月15日 出席者 北野委員・千田委員・田中委員、熊本県

5月27日 出席者 山尾委員・伊東委員・北野委員・千田委員・田中委員・西形委員・長谷川委員・
平井委員・吉田委員・和田委員、熊本県

- 7月12日 出席者 山尾委員・北野委員・西形委員・長谷川委員・平井委員・宮武委員・和田委員、文化庁、熊本県
- 8月9日 出席者 山尾委員・北野委員・千田委員・田中委員・西形委員・長谷川委員・平井委員・和田委員、文化庁、熊本県
- 9月13日 出席者 山尾委員・北野委員・千田委員・西形委員・長谷川委員・和田委員、文化庁、熊本県
- 11月7日 出席者 山尾委員・北野委員・西形委員・長谷川委員・吉田委員・和田委員、文化庁、熊本県
- 12月25日 出席者 山尾委員・北野委員・千田委員・西形委員・長谷川委員・宮武委員・和田委員、文化庁、熊本県

令和2年(2010年)

- 1月31日 出席者 西形委員・長谷川委員・和田委員、文化庁
- 3月26日 出席者 山尾委員・北野委員・千田委員・西形委員・長谷川委員・宮武委員・吉田委員・和田委員

3. 啓発事業

(1) 刊行物

- ・パンフレット「熊本城 ～復興に向けて～ 令和元年春夏号」(令和元年5月)
- ・『熊本城調査研究センター年報5(平成30年度)』(令和元年7月)
- ・パンフレット「熊本城 ～復興に向けて～ 令和元年度秋冬号」(令和元年10月)
- ・『復興 熊本城 vol.3 天守復興編Ⅱ』熊本市／熊本日日新聞社(令和元年10月)
- ・『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編』(令和2年3月)

(2) ホームページ公開

熊本城調査研究センターの事業成果などを情報発信するために、熊本市のホームページを活用し、当センターの概要、委員会の議事など、刊行物、講演会・研修会報告などを公開している。

更新履歴

- 4月17日 第30回定期講座「熊本城学」の更新
- 4月24日 調査研究センター概要、刊行物の更新(報告書)
- 4月26日 調査研究センターニュースの更新
- 5月10日 刊行物の更新(パンフレット)
- 6月6日 第31回定期講座「熊本城学」の更新
- 6月12日 第1回特別史跡熊本城跡保存活用委員会議事録(要旨)の更新
- 6月17日 講演会・研修会などの更新
- 7月3日 第32回定期講座「熊本城学」の更新
- 7月22日 「熊本城で自由研究」の更新
- 7月25日 第33回定期講座「熊本城学」、刊行物、研究センターニュースの更新
- 8月13日 第2回特別史跡熊本城跡保存活用委員会議事録(要旨)、講演会・研修会などの更新
- 8月29日 第34回定期講座「熊本城学」の更新
- 9月19日 第1回熊本城文化財修復検討委員会議事録(要旨)の新設
- 9月30日 第35回定期講座「熊本城学」の更新
- 10月4日 刊行物の更新(パンフレット)
- 10月24日 第36回定期講座「熊本城学」の更新

- 11月19日 第37回定期講座「熊本城学」の更新
- 12月2日 第3回特別史跡熊本城跡保存活用委員会議事録(要旨)の更新
- 12月23日 第38回定期講座「熊本城学」の更新
- 1月21日 第39回定期講座「熊本城学」の更新
- 2月10日 第40回定期講座「熊本城学」の更新
- 2月20日 定期講座「熊本城学」次回予告の更新
- 2月25日 定期講座「熊本城学」次回予告の更新

(3) 論文・連載他

a. 論文

鶴嶋俊彦

- ・「熊本城と熊本鎮台」『存城・廃城(いわゆる廃城令)から明治中期における城郭』城郭談話会(令和元年6月)
- ・「総論 熊本城の普請史」『熊本城大天守外観復旧記念 熊本城と武の世界』熊本県立美術館(令和元年10月)
- ・「熊本城石垣の不思議を探る」『熊本城復興に向けて第2弾』放送大学熊本学習センター(令和元年11月)
- ・「熊本城に見る清正の築造力 - 熊本城の歴史と見どころ」『西日本文化 通巻494号』西日本文化協会(令和2年4月)

美濃口紀子

- ・「特別史跡熊本城跡「高麗門・御成道跡」の再検証-検出された「根固め遺構」とは本当に「高麗門」の跡なのか-」『史叢』第20号 熊本歴史学研究会(令和元年5月)
- ・「熊本城瓦編年の立案に向けて-瓦研究の到達点と課題の整理-」『織豊城郭』第19号 織豊期城郭研究会(令和元年9月)

嘉村哲也

- ・「3D計測データを活用した熊本城石垣の災害復旧」『地理空間情報活用推進に関する九州産学官セミナーin熊本』(令和2年2月)(平成30年9月)
- ・「デジタル技術の導入と課題2 特別史跡熊本城跡の事例」『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について3』(報告)文化庁(令和2年2月)

木下泰葉

- ・「熊本城模型の意義」島充『熊本城超絶再現記—巨大ジオラマでよみがえる本丸の全貌』新紀元社(令和元年10月)

河本愛輝

- ・「西南戦争以後の陸軍による熊本城の改変について-竹の丸を中心にして-」『存城・廃城(いわゆる廃城令)から明治中期における城郭』城郭談話会(令和元年6月)

b. 連載

『熊本城』熊本城顕彰会

渡辺勝彦

- ・巻頭言「熊本城天守の礎石」復刊116号(令和元年11月)

山下宗親

- ・「熊本城“復旧”報告(八) 飯田丸五階櫓石垣復旧工事について」復刊114号(令和元年5月)
- ・「熊本城“復旧”報告(九) 特別公開第一弾」復刊115号(令和元年8月)

- ・「熊本城“復旧”報告(十) 特別公開第二弾」復刊 117 号 (令和 2 年 2 月)

(4) 報道

本年度当センターが対応した報道機関の取材は合計 44 件、このうちテレビ 6 件・新聞(配信含む) 20 件・報道公開 18 件(内規制区域内の公開 8 件)である。

a. 報道公開(18 件) ※ ★…規制区域内での報道公開

- 4 月 15 日 ★天守閣復旧整備工事・小天守 4 階復旧工事について
- 4 月 17 日 ★天守閣復旧整備工事・小天守入口石垣の構造補強について
- 4 月 18 日 熊本城小天守出土「慶應(応)」銘瓦について
- 4 月 26 日 ★熊本城復旧工事(定期公開)小天守 4 階復旧工事・石垣補強、長堀破損材の繕い補修作業
- 5 月 27 日 第 1 回熊本城文化財修復検討委員会
- 5 月 31 日 第 1 回特別史跡熊本城跡保存活用委員会
- 6 月 27 日 ★熊本城復旧工事(定期公開)特別公開に伴う石垣安全対策、
小天守 4 階仮屋根設置・石垣工事状況、特別見学通路工事状況説明、長堀控柱修復作業
- 7 月 30 日 第 2 回特別史跡熊本城跡保存活用委員会
- 10 月 5 日 熊本城特別公開第 1 弾 セレモニー
- 10 月 20～22 日 ★文化財石垣保存技術協議会 令和元年度技能者養成研修(熊本研修)の開催について
- 11 月 9 日 小天守東側鯨設置について
- 11 月 13 日 第 3 回特別史跡熊本城跡保存活用委員会
- 11 月 17・23 日 小天守しゃちほこの展示及び設置について
- 11 月 23 日 小天守しゃちほこ設置セレモニー
- 12 月 20 日 ★熊本城復旧工事(定期公開)長堀の復旧状況、奉行丸南側石垣安全対策、
特別見学通路の工事状況、天守閣復旧整備状況
- 1 月 25 日 ★熊本城防災訓練について
- 2 月 18 日 ★熊本城復旧工事(定期公開)特別公開第 2 弾、特別見学通路工事状況
- 3 月 26 日 第 2 回熊本城文化財修復検討委員会

b. 新聞記事見出し(当センターで把握した記事のみ)

平成 31 年(2019)

- 4 月 3 日 「射程 景観変える特別見学通路」(熊本日日新聞)
- 4 月 3 日 「梅園 3 分の 1 伐採へ 熊本城 見学通路設置で」(熊本日日新聞)
- 4 月 3 日 「熊本城の石垣復旧見学通路 市、来春開始へ整備」(日本経済新聞)
- 4 月 5 日 「熊本城のいま 143 シートと金網 小天守石垣補強」(熊本日日新聞)
- 4 月 5 日 「熊本城ライトアップ 夜明けまで 14 日、15 日時間を延長」(熊本日日新聞)
- 4 月 12 日 「熊本地震 3 年 石垣修復 耐震化探る」(読売新聞)
- 4 月 13 日 「熊本地震 3 年 熊本城 見せる再建」(読売新聞)
- 4 月 13 日 「埋もれた文化財 次々」(読売新聞)
- 4 月 13 日 「熊本地震から 3 年 あの場所は今 熊本のシンボル『熊本城』」(熊本リビング新聞)
- 4 月 14 日 「名城の雄姿 一步ずつ」(熊本日日新聞)
- 4 月 14 日 「熊本地震きょう 3 年 211 世帯 再建めど立たず 仮住まい 1 万 6519 人」(西日本新聞)
- 4 月 14 日 「熊本城 被災地のともしび」(西日本新聞)

- 4月14日 「熊本城・天守閣、着々と修復」(朝日小学生新聞)
- 4月14日 「元に戻しつつ耐震化 過程見守ってより大切に」(朝日中高生新聞)
- 4月14日 「熊本城復活に仙台の力 市教委職員 崩れた石垣修復」(河北新報)
- 4月16日 「熊本地震 3年 小天守最上階 再建始まる」(熊本日日新聞)
- 4月16日 「復旧工事始まる 熊本城」(西日本新聞)
- 4月16日 「福島で出会った『熊本』『博多』 小峰城と熊本城 石垣修復で情報交換」(西日本新聞)
- 4月17日 「天守閣包む復興の光 熊本市・加藤神社でキャンドルイベント」(熊本日日新聞)
- 4月18日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 特別編 その1 これまでも、これからも。自然災害と戦う熊本城」(熊本日日新聞)
- 4月19日 「熊本城のいま 144 天守の瓦 投げ捨てた男」(熊本日日新聞)
- 4月20日 「小天守から『慶應』瓦 熊本城 幕末の修理裏付け」(熊本日日新聞)
- 4月24日 「熊本 復興に活用」(読売新聞)
- 4月26日 「フォトマップくまもと 振り返る昭和末⑫ 熊本城の城郭 緑多い『森の都』象徴」(熊本日日新聞)
- 4月26日 「熊本城長堀 家紋彩る きょうから画像投影」(熊本日日新聞)
- 4月27日 「小天守最上階 骨組できた 長堀も復旧作業続く 熊本城」(熊本日日新聞)
- 4月27日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の四 記録を読み解き、今に生かす」(熊本日日新聞)
- 4月27日 「窓」(日本経済新聞)
- 4月27日 「熊本城小天守 再建が本格化」(読売新聞)
- 4月27日 「最上階の骨組完成 熊本城小天守を公開」(西日本新聞)
- 4月28日 「熊本城で『新緑祭』 10連休はイベント続々」(熊本日日新聞)
- 4月28日 「街かどクリップ 熊本市 郡上八幡城が熊本城復元整備基金に寄付」(熊本日日新聞)
- 令和元年(2019)
- 5月 2日 「元和晴れ 熊本城にぎわう」(熊本日日新聞)
- 5月 3日 「熊本城のいま 145 “清正石垣” が守った江戸の石」(熊本日日新聞)
- 5月 3日 「熊本城で演舞や野だて 新緑祭」(読売新聞)
- 5月 9日 「地震から3年、最新技術駆使 備え強化」(西日本新聞)
- 5月 9日 「熊本城 威容よ再び 大天守修復にめど」(西日本新聞)
- 5月10日 「『清正の石垣』裏付け 松井家文書 御天守に『肥後守』」(熊本日日新聞)
- 5月17日 「熊本城のいま 146 石垣 外から押さえる『ハバキ』」(熊本日日新聞)
- 5月17日 「知事、初の熊本城視察 地震後 大天守など復旧確認」(読売新聞)
- 5月21日 「熊本城の現状変更報告 文化財保護委 熊本市、会合は非公開」(熊本日日新聞)
- 5月25日 「聖火リレー熊本城へ 東京五輪復興発信、世界遺産も」(熊本日日新聞)
- 5月28日 「熊本地震で熊本城飯田丸 『前倒れ』初めて確認」(熊本日日新聞)
- 5月31日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の伍 より強く、より魅力的に・貴重な機会生かし史実を解き明かす」(熊本日日新聞)
- 5月31日 「熊本城のいま 147 築城前 一帯は墓地や寺だった？」(熊本日日新聞)
- 6月 1日 「射程 歴史的建造物の価値」(熊本日日新聞)
- 6月 1日 「聖火リレー 県内13市町村」(熊本日日新聞)
- 6月 1日 「『建物ありき』に異論 熊本城跡保存活用委 NHK跡整備で指摘」(熊本日日新聞)

- 6月1日 「熊本城のいま 148 文化財の価値を再認識」(熊本日日新聞)
- 6月2日 「聖火1万人つなぐ 『復興五輪』アピール 県内は13市町村」(熊本日日新聞)
- 6月2日 「NPO熊本城で清掃ボランティア 高所の石垣 美しく」(熊本日日新聞)
- 6月4日 「熊本城取材の思い 教科書に 小6 道徳 本誌記者を紹介」(熊本日日新聞)
- 6月8日 「読者ひろば 坪井川に観光水上を」(熊本日日新聞)
- 6月8日 「清正の名古屋城普請に関する一次史料 唯一無二 石垣技術の到達点」(熊本日日新聞)
- 6月8日 「一般会計38億円追加 補正予算案 南町の施設整備など」(熊本日日新聞)
- 6月8日 「フォーカス EYE 坪井川 舟運復活へ再挑戦」(熊本日日新聞)
- 6月13日 「熊本城入園料にも導入 10月からの一部再開に合わせ」(西日本新聞)
- 6月13日 「読者ひろば 坪井川の観光船運航に期待」(熊本日日新聞)
- 6月14日 「熊本城のいま 149 国重文 部材の状態見極め補修」(熊本日日新聞)
- 6月15日 「天守閣の木組み 精巧に デザイナー・浜崎さん(北区) 一新小にポスター寄贈」(熊本日日新聞)
- 6月22日 「NHK、JT跡 特別史跡 文化審答申 熊本城跡に追加」(熊本日日新聞)
- 6月24日 「読者ひろば 復活させたい坪井川の舟運」(熊本日日新聞)
- 6月25日 「熊本城公開で入場規制 一度に2千人安全確保 10月から」(熊本日日新聞)
- 6月25日 「公共施設使用料 値上げへ 熊本市 増税分など最大1.5倍」(熊本日日新聞)
- 6月25日 「熊本城 小天守最上階に仮設屋根」(西日本新聞)
- 6月28日 「熊本城のいま 150 飯田丸五階櫓 江戸期の石垣修理 裏付け」(熊本日日新聞)
- 6月28日 「熊本地震 元の姿へ 一步步 小天守 石垣積み直し完了」(熊本日日新聞)
- 6月28日 「熊本城小天守の石垣修復 特別公開ルート、10月開放」(日本経済新聞)
- 6月28日 「石垣積み上げほぼ完了 熊本城の復旧作業順調」(読売新聞)
- 6月28日 「熊本城の長堀 修復工事公開」(西日本新聞)
- 6月28日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の六 熱意と英知で、歴史をつなぐ・石垣の復旧に最先端の技術を駆使」(熊本日日新聞)
- 6月28日 「熊本城報告書『歴史資料編』を刊行」(熊本日日新聞)
- 7月1日 「見て、触って、デザイン楽しむ 現代美術館『あ』展開幕」(熊本日日新聞)
- 7月4日 「熊本城にエレベーター 『理解いただける』 市長、首相発言受け」(西日本新聞)
- 7月6日 「街かどクリップ 熊本城復旧で支援金」(熊本日日新聞)
- 7月9日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 特別編 その2 熊本城のすべてが、日本を代表する宝物」(熊本日日新聞)
- 7月12日 「熊本城のいま 151 今も残る江戸期の排水路」(熊本日日新聞)
- 7月14日 「涼しげ『あさがお市』 中央区横手JR高架下」(熊本日日新聞)
- 7月19日 「夏の夕暮れ お出かけを 熊本城 武将隊が魅力伝える 夏休みの土日祝日」(熊本日日新聞)
- 7月19日 「『熊本城復興かるた』に助成金」(熊本日日新聞)
- 7月24日 「街かどクリップ バーテンダーらが熊本城復元整備基金に寄付」(熊本日日新聞)
- 7月24日 「街かどクリップ 清正公焼酎瑞鷹が発売」(熊本日日新聞)
- 7月26日 「熊本城のいま 152 石置き場確保 復旧の課題」(熊本日日新聞)
- 7月27日 「お城シャツで復興応援 福岡市の野崎さん 坂本善三作品をプリント」(熊本日日新聞)
- 7月30日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の七 伝統的の石積み 安心の最新技術」(熊本日日新聞)

- 7月31日 「NHK跡地に新施設 熊本市案へ疑問の声 熊本城跡保存活用委」(熊本日日新聞)
- 8月1日 「移築再建のジェーンズ邸 建物の一部 公開制限」(熊本日日新聞)
- 8月8日 「二の丸広場で飲食物販なし 市文化財保護委 来月のイベント」(熊本日日新聞)
- 8月8日 「街かどクリップ 日本マクドナルドが熊本城復旧へ支援金」(熊本日日新聞)
- 8月9日 「熊本城のいま 153 『惣構』伊達の城と共通」(熊本日日新聞)
- 8月14日 「『熊本城との調和目指した』桜町再開発ビル設計責任者 杉山俊一さんに聞く」(熊本日日新聞)
- 8月15日 「清正の逸話ドラマチックに 来月8日県立劇場 『語り座』10周年公演」(熊本日日新聞)
- 8月23日 「熊本城、アーケード活用策は 熊本市 中学生がアイデア発表」(熊本日日新聞)
- 8月23日 「熊本城のいま 154 『二様の石垣』築造の定説に一石」(熊本日日新聞)
- 8月28日 「熊本城の被災瓦アートに 陶芸家・尾崎さん 伝統工芸館で個展」(熊本日日新聞)
- 8月30日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の八 現場で伝えるお城の“今と未来”」
(熊本日日新聞)
- 9月2日 「街かどクリップ 熊本城復旧へ寄付」(熊本日日新聞)
- 9月6日 「熊本城のいま 155 奉行丸の石垣 角だけ崩落」(熊本日日新聞)
- 9月13日 「復旧の『今』伝える動画 県制作 支援に感謝、世界へ発信」(読売新聞)
- 9月14日 「秋待ちわび 雰囲気楽しむ 熊本市・城彩苑 きょうまで『名月のゆうべ』」(熊本日日新聞)
- 9月14日 「田中智之の解体新書展 熊本市現代美術館 建物、空間 平面の手描きで」(熊本日日新聞)
- 9月17日 「同志社の“源流”たどる 熊本市 ゆかりの地 学生ら感動」(熊本日日新聞)
- 9月20日 「熊本城のいま 156 大天守 外観が完成間近」(熊本日日新聞)
- 9月21日 「未来へ向かう姿を多くの人に 熊本城特別公開 10月5～14日連日実施 以降は原則日曜、祝日」
(西日本新聞)
- 9月21日 「創生への鼓動 前へ進む熊本の『今』」(読売新聞)
- 9月22日 「余論 創造的復興と街の個性」(熊本日日新聞)
- 9月23日 「熊本城の復旧 事務所長講演 来月特別公開」(熊本日日新聞)
- 9月25日 「日本舞踊、清和文楽 楽しんで 熊本城ミュージアムわくわく座 ラグビーW杯で特別公演」
(熊本日日新聞)
- 9月27日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の九 “失われた20年”にしないために」
(熊本日日新聞)
- 9月28日 「熊本城 10月5日から特別公開 復興の道筋 歩いて実感」(熊本日日新聞)
- 9月28日 「入園料 キヤッシュレスで 熊本城特別公開前に決済確認」(熊本日日新聞)
- 9月28日 「住友ゴム『制震ダンパー』 熊本城小天守に採用」(日本経済新聞)
- 9月30日 「街かどクリップ イベント収益金を熊本城復旧に寄付」(熊本日日新聞)
- 9月30日 「熊本城『開場』へ着々 特別公開 来月5日から」(熊本日日新聞)
- 9月30日 「熊本城大天守 地震越え雄姿 来月5日から特別公開」(西日本新聞)
- 9月30日 「熊本城大天守来月5日から特別公開 復興のシンボル強く輝く」(朝日新聞)
- 9月30日 「熊本城天守閣間近に 見学ルート来月5日公開」(読売新聞)
- 10月1日 「よみがえる天守閣間近に 10月5日から熊本城特別公開」(くまもと元氣ばい新聞)
- 10月1日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 特別編 その3 いよいよ3年半ぶりに天守閣外観
公開 熊本城復旧のいまを間近に体感」(熊本日日新聞)
- 10月1日 「文化財 復興の姿伝える 中央区で『熊本城・阿蘇神社』展 模型・桜門の部材など26点」
(熊本日日新聞)

- 10月1日 「読者の皆さんへ 復興の物差し経済に限らず」(熊本日日新聞)
- 10月4日 「熊本城のいま 157 復旧急いだ『シンボル』天守閣」(熊本日日新聞)
- 10月5日 「アラカルト 熊本城外観復旧記念の限定缶」(熊本日日新聞)
- 10月5日 「熊本城の被災瓦 時を刻む 北区の産廃業者 時計作り 熊本市に贈る」(熊本日日新聞)
- 10月5日 「待ちわびた 熊本城と再会」(熊本日日新聞)
- 10月5日 「『復興 熊本城』第3巻刊行 天守閣再建に焦点」(熊本日日新聞)
- 10月6日 「城彩苑で朝ごはんを 熊本城公開記念 県産食材PR」(熊本日日新聞)
- 10月6日 「天守閣 間近に 熊本城 特別公開始まる 地震後初めて」(熊本日日新聞)
- 10月6日 「社説 文化財との調和忘れずに」(熊本日日新聞)
- 10月6日 「『復興城主』に感謝状 熊本市 寄付の226団体・個人」(熊本日日新聞)
- 10月6日 「『熊本の誇り』復旧に全力 城のエキスパート 定年後の重責担う」(熊本日日新聞)
- 10月6日 「やっぱり 武者んよか 熊本城 3年半ぶり一般公開 やっと“再会” 来場者感激」
(熊本日日新聞)
- 10月6日 「復旧『地元モンの出番』 熊本城3年半ぶり公開 石垣修復の石工『誇り』」(読売新聞)
- 10月6日 「活気戻る」(読売新聞)
- 10月6日 「熊本城大天守 雄姿再び 復元終え特別公開」(読売新聞)
- 10月6日 「仰ぎ見る熊本城 震災後初、一般に公開」(西日本新聞)
- 10月6日 「大天守『間に合った』 内部修復『まだまだ、これから』」(西日本新聞)
- 10月6日 「『待ってた』熊本城 長蛇の列 特別公開始まる『姿とても美しい』『次は天守閣に上りたい』」
(西日本新聞)
- 10月6日 「熊本城大天守勇壮に 3年半ぶり公開」(毎日新聞)
- 10月6日 「勇壮な大天守間近に 熊本城、被災後初の一般開放」(産経新聞)
- 10月6日 「熊本城晴れ姿 復興また一步 大天守特別公開スタート」(朝日新聞)
- 10月6日 「熊本城大天守特別公開始まる 復興するお城励みに進む」(朝日新聞)
- 10月6日 「『負けんばい』2ヵ月で再開 「案内人の会」吉村徹夫会長」(朝日新聞)
- 10月10日 「名車ラリー 復興を応援 24日、25日 阿蘇や熊本城周辺 走る」(熊本日日新聞)
- 10月11日 「広告企画・熊本城復興キャンペーン 熊日 協賛90社に感謝状」(熊本日日新聞)
- 10月11日 「あの日から 熊本地震 故郷の復興 漫画で描く」(熊本日日新聞)
- 10月11日 「復興のシンボル 再生を紹介 ミニ熊本城・阿蘇神社展示」(西日本新聞)
- 10月12日 「時事 はなしの種 熊本城の特別公開始まる」(熊本日日新聞)
- 10月13日 「あでやか花魁道中 熊本城坪井川園遊会 外国人も拍手」(熊本日日新聞)
- 10月14日 「清正公さんの功績 狂言に 熊本城で愛知の子どもら熱演」(熊本日日新聞)
- 10月14日 「愛知の児童 小河童好演 熊本城 清正まつわる狂言」(読売新聞)
- 10月16日 「熊本城の特別公開 10日間で4万人」(熊本日日新聞)
- 10月16日 「街かどクリップ 熊本城復元整備基金へ寄付金」(熊本日日新聞)
- 10月16日 「『復興ねぶた』見に来て 19.20日 二の丸広場」(熊本日日新聞)
- 10月17日 「くまモンデビュー10周年 記念ロゴ発表 復興の顔 星キラリ」(熊本日日新聞)
- 10月18日 「熊本城のいま 158 大天守の『唐破風』木造に」(熊本日日新聞)
- 10月18日 「古地図で歩く 城下町くまもと7 『追憶の熊本』熊本博物館9より 町並みの変換 つぶさに」
(熊本日日新聞)
- 10月19日 「NHKとJT跡地 特別史跡追加指定 熊本城一帯」(熊本日日新聞)

- 10月19日 「特別史跡熊本城にJ T、NHK跡追加」(西日本新聞)
- 10月20日 「全国の被災地に元気を 二の丸広場 復興ねぶた 今年も参上」(熊本日日新聞)
- 10月20日 「春秋」(西日本新聞)
- 10月22日 「射程 真の『復興のシンボル』」(熊本日日新聞)
- 10月23日 「ほっとフォト イカ?いや、熊本城」(熊本日日新聞)
- 10月26日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の拾 感動!そして完全復活への想い新た」
(熊本日日新聞)
- 10月26日 「熊本城かるた絵コンテスト 入賞作44点決まる」(熊本日日新聞)
- 10月27日 「築城からの変遷 県美本館 『熊本城と武の世界』 開幕」(熊本日日新聞)
- 10月29日 「特別公開中 無料電動車いす好評 熊本城見学の『足』に」(熊本日日新聞)
- 11月1日 「熊本城のいま159 崩落石垣 研修で“復元”」(熊本日日新聞)
- 11月1日 「新生面」(熊本日日新聞)
- 11月2日 「スプリングラー 熊本城も未整備」(熊本日日新聞)
- 11月2日 「ハイ!こちら編集局 県内文化財 防火点検して」(熊本日日新聞)
- 11月3日 「信子さま 山鹿灯籠鑑賞」(熊本日日新聞)
- 11月5日 「若手石工を実践育成 被災・熊本城で18人研修」(読売新聞)
- 11月7日 「日航外国人社員が“観光地点検” 英語案内『不十分デス』 熊本市で報告」(熊本日日新聞)
- 11月8日 「きょうの歴史」(熊本日日新聞)
- 11月8日 「清正あて書簡 国重文に 本妙寺へ指定書伝達」(熊本日日新聞)
- 11月8日 「小天守の仮設屋根撤去 熊本城 瓦ふき替え ほぼ完了」(読売新聞)
- 11月8日 「熊本城の小天守 仮設屋根を撤去 瓦ふき終える」(西日本新聞)
- 11月9日 「しゃちほこ 小天守に」(熊本日日新聞)
- 11月9日 「被災文化財 貴重な資料展 熊本城と阿蘇神社の26点」(読売新聞)
- 11月10日 「十字街」(熊本日日新聞)
- 11月10日 「よみうり寸評」(読売新聞)
- 11月10日 「熊本地震 小天守に鯨を設置 熊本城」(読売新聞)
- 11月10日 「熊本城 小天守にしゃちほこ 23日も作業 大天守含め4体へ」(熊本日日新聞)
- 11月13日 「首里城火災に思う 喪失感、希望…熊本城と重なる」(熊本日日新聞)
- 11月14日 「『熊本城 景観守って』 高さ制限緩和で要望相次ぐ」(熊本日日新聞)
- 11月15日 「熊本城のいま160 明治の本丸 模型で『再現』」(熊本日日新聞)
- 11月16日 「熊本城復旧の寄付金贈呈」(熊本日日新聞)
- 11月16日 「熊本城の小天守にしゃちほこ設置」(熊本日日新聞)
- 11月16日 「七五三 健やかに成長を 県内神社にぎわう」(熊本日日新聞)
- 11月18日 「『熊本城と武の世界展』 23日に特別講演会」(熊本日日新聞)
- 11月20日 「地震復興 寄付続けたい 米在住の木崎さん 知事にイベント報告」(熊本日日新聞)
- 11月21日 「アラカルト 城彩苑で復興支援ビアガーデン」(熊本日日新聞)
- 11月22日 「紅葉輝く 庭園開放 旧細川刑部邸 期間限定あすから」(熊本日日新聞)
- 11月22日 「熊本市 一般会計 22億円増額 補正予算案 J T跡地購入費など」(熊本日日新聞)
- 11月22日 「NHK跡地活用案 見直す可能性示唆 大西市長」(熊本日日新聞)
- 11月22日 「ハイ!こちら編集局 城彩苑駐車場 満車の時は」(熊本日日新聞)
- 11月22日 「補正予算案 22億1800万円 熊本市」(読売新聞)

- 11月22日 「22億円を追加の補正予算案発表」(西日本新聞)
- 11月24日 「熊本城の天守 3年7ヵ月ぶり4体そろそろ おかえり しゃちほこ」(西日本新聞)
- 11月24日 「染まる木々 秋深し 旧細川刑部邸 ライトアップ」(熊本日日新聞)
- 11月25日 「熊本城の大イチョウ 色づく 見頃間近に」(熊本日日新聞)
- 11月26日 「ジェーンズ邸部材保管庫を追加工事 熊本市、手続き怠り」(熊本日日新聞)
- 11月27日 「熊本城と武の世界⑤ 防衛から政治の拠点へ」(熊本日日新聞)
- 11月28日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の拾巻 次世代への継承が私たちの責任」
(熊本日日新聞)
- 11月29日 「熊本城のいま 161 建物の高さ制限緩和 危惧」(熊本日日新聞)
- 11月29日 「熊本城『親のような存在』 野球殿堂入り・伊東勤さん熊本市に寄付」(熊本日日新聞)
- 11月29日 「熊本城 歴史たどる特別展 刀剣『加藤左文字』初公開」(読売新聞)
- 11月30日 「街かどクリップ 熊本城復旧に2千万円寄付」(熊本日日新聞)
- 12月 「震災をちから強く乗り越える熊本城 美しくよみがえった大天守」(こども新聞)
- 12月 1日 「復興見守る大銀杏」(読売新聞)
- 12月 1日 「黄金まとい輝く銀杏城 熊本」(西日本新聞)
- 12月 2日 「できた 熊本城かるた 『飯田丸 勇気をくれた 一本石垣』 『平成の 地震乗り越え 復興へ』
…絵札採用44人を表彰」(熊本日日新聞)
- 12月 2日 「熊本城と武の世界⑥ 清正の勇猛さ伝える武具」(熊本日日新聞)
- 12月 3日 「ひと輝く 心を映す塗り絵/ビジネスの柱に」(熊本日日新聞)
- 12月 6日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 特別編 その4 天守閣と、復旧を待つ熊本城のいま
を体感」(熊本日日新聞)
- 12月 7日 「街かどクリップ 『ヘルス&ビューティーフェスタ』」(熊本日日新聞)
- 12月11日 「十字街」(熊本日日新聞)
- 12月12日 「熊本城のいま 162 原城で使われた? 忠利の陣道具」(熊本日日新聞)
- 12月14日 「『熊本城と武の世界展』 県美本館 あす閉幕」(熊本日日新聞)
- 12月14日 「街かどクリップ 熊本市 J A女性部が熊本城復旧へ寄付」(熊本日日新聞)
- 12月14日 「熊本城支援 100万円寄付 熊日、協賛金の一部贈る」(熊本日日新聞)
- 12月15日 「街かどクリップ 熊本第一信金が熊本城復旧へ寄付」(熊本日日新聞)
- 12月15日 「熊本城特別公開10万人突破」(熊本日日新聞)
- 12月15日 「熊本城、入場者10万人に 見学再開から2ヵ月」(日本経済新聞)
- 12月15日 「熊本地震 熊本城特別公開10万人 公開24日目で達成」(読売新聞)
- 12月15日 「観光の核 復活着々 熊本城、特別公開10万人達成 あすから大天守の足場解体」(西日本新聞)
- 12月15日 「熊本城来場10万人突破 復興見学の特別公開」(西日本新聞)
- 12月16日 「街かどクリップ 熊本ホテルキャッスルが熊本城復旧へ寄付金」(熊本日日新聞)
- 12月17日 「熊本城復興に600万円寄付 宮里藍さん、ゴルフ大会の慈善収入」(西日本新聞)
- 12月18日 「東京五輪聖火リレー詳細ルート公表 日本の風景 世界に発信」(熊本日日新聞)
- 12月19日 「射程 文化財保護の独立性」(熊本日日新聞)
- 12月19日 「紙面プレーバック 昭和54年12月10日朝刊 黒沢監督 熊本城2日間ロケ」(熊本日日新聞)
- 12月20日 「古地図で歩く 城下町くまもと9内坪井 旧流路探し 発見の連続」(熊本日日新聞)
- 12月21日 「熊本地震 工事見学通路 建設進む 熊本城、来年4月公開目指す」(読売新聞)
- 12月21日 「熊本城 特別見学通路 着々と 年末年始は毎日公開」(西日本新聞)

- 12月22日 「文化財 防火策急ぐ 首里城燃失」(読売新聞)
- 12月23日 「回顧'19 文化一般 熊本城が特別公開 最古の石垣出土」(熊本日日新聞)
- 12月23日 「熊本城周辺 高さ制限緩和 景観価値高め 街強靱化」(熊本日日新聞)
- 12月23日 「山崎正史 立命館大名譽教授 政策 市民に説明し議論必要」(熊本日日新聞)
- 12月23日 「両角光男 熊本大顧問・名譽教授 公共空間と関連させて考えて」(熊本日日新聞)
- 12月23日 「旬の人 熊本城 案内して10年」(読売新聞)
- 12月27日 「年末年始も熊本城公開 地震後初」(熊本日日新聞)
- 12月27日 「また天守閣に会える 熊本城復活への軌跡 其の拾弐 次の世代へ育まれる熊本城と郷土への愛」
(熊本日日新聞)
- 12月28日 「熊本城特別公開や国際スポーツ大会 県政十大ニュース」(西日本新聞)
- 12月29日 「デスク日記 威風堂々」(熊本日日新聞)
- 12月30日 「新人王『応援のおかげ』」(熊本日日新聞)
- 12月31日 「宮里藍さん 県に支援金 ゴルフ大会収益金一部 『平穏な生活を』」(読売新聞)
- 令和2年(2020)
- 1月 「しゃちほこ4体天守閣にそろろう」(くまもと元気ばい新聞)
- 1月3日 「令和 初日の出 熊本城二の丸広場」(熊本日日新聞)
- 1月3日 「熊本城 無料開放に行列」(西日本新聞)
- 1月6日 「『波奈之丸』天井画再現 日本画家大塚さんら模写 熊本城復旧時に公開へ
『復興に花を』」(熊本日日新聞)
- 1月7日 「熊本城の特別見学通路 大型連休から利用可 全長350メートル 20年間使用へ」
(熊本日日新聞)
- 1月7日 「熊本城の特別見学通路 GWから毎日公開 『復旧過程 間近に見て』」(西日本新聞)
- 1月8日 「熊本城の石垣モチーフ 熊本市がロゴ作成 13日にキックオフイベント」(熊本日日新聞)
- 1月8日 「熊本市、SDGs推進でロゴ作成 各所PR、宇治市がゲーム開発へ」(日本経済新聞)
- 1月10日 「熊本城のいま163 大天守 3回塗りで黒々と」(熊本日日新聞)
- 1月10日 「2020被災者日記 復興願い大鏡餅贈る」(熊本日日新聞)
- 1月10日 「展望2020 熊本5 『生きづらさ』に寄り添う」(熊本日日新聞)
- 1月10日 「活写道 七色の“橋桁”」(熊本日日新聞)
- 1月10日 「主張提言 城周辺高さ制限 緩和には疑問」(熊本日日新聞)
- 1月15日 「熊本城復旧 見学新ルート 4月末に」(読売新聞)
- 1月16日 「劉福君九州二胡教室 熊本城復興へ願い 来月 熊響、チェンミンらと共演」(熊本日日新聞)
- 1月16日 「米の臨時代理大使熊本市長表敬訪問 復興状況を視察」(熊本日日新聞)
- 1月16日 「益城町など被災地視察 北村地方相」(熊本日日新聞)
- 1月17日 「2020被災者日記 美容業界で『女性を元気に』」(熊本日日新聞)
- 1月24日 「熊本城のいま164 天守閣は『ろう城用施設』」(熊本日日新聞)
- 1月26日 「熊本城 火事から守れ 地震後初の消防訓練」(熊本日日新聞)
- 1月27日 「くまもと探 ジェーンズ邸 移築着工」(西日本新聞)
- 1月28日 「県内強風で女性がけが」(読売新聞)
- 1月28日 「深層断面 SPECIAL EDITION “かきいれ時” 大きな痛手」(日刊工業新聞)
- 1月28日 「県内 強風 けが人や農業被害 1月観測史上最大の地点も」(熊本日日新聞)
- 1月29日 「ジェーンズ邸 再建工事開始 江津湖公園 22年度中の公開目指す」(熊本日日新聞)

- 1月29日 「街かどクリップ 熊本城の災害復旧に歯科病院が支援金」(熊本日日新聞)
- 1月29日 「『やっぱり誇り』熊本城 大天守と小天守、宇土櫓 特別公開中」(大分合同新聞)
- 1月30日 「街かどクリップ 菓子メーカーが熊本城の災害復旧に支援金」(熊本日日新聞)
- 1月31日 「ともに支える“令和の築城” 熊本城復活への軌跡 熊本城復興支援キャンペーン 第二弾 其の壱
平成28年熊本地震・見える部分も、見えない部分も 着実に進んだ復旧・4月に特別公開第2弾
全体としては工事の継続と調査・準備の年」(熊本日日新聞)
- 2月2日 「150分の1熊本城 お目見え わくわく座 明治初期 忠実に」(熊本日日新聞)
- 2月2日 「熊本城復興へ明治の姿再現模型 柳川の作家が模型」(西日本新聞)
- 2月12日 「熊本城のいま 165 特別見学通路 遺構に配慮」(熊本日日新聞)
- 2月15日 「特派員経験者らに熊本市の魅力PR 東京でイベント」(熊本日日新聞)
- 2月16日 「キリン 売り上げ金寄付 熊本城災害復旧支援で」(熊本日日新聞)
- 2月16日 「小中学生新聞くま TOMO おさらい! ニュース 150分の1 熊本城模型 県内」(熊本日日新聞)
- 2月17日 「熊本城 ランナーに無料公開」(熊本日日新聞)
- 2月19日 「熊本城に“空中回廊” 特別見学通路 4月29日利用開始」(熊本日日新聞)
- 2月19日 「アラカルト ポッカサッポロ 280万円寄付へ」(熊本日日新聞)
- 2月20日 「ハイ!こちら編集局 “空中回廊” 必要か疑問」(熊本日日新聞)
- 2月21日 「ハイ!こちら編集局 空中回廊、安全に見学するため」(熊本日日新聞)
- 2月21日 「熊本地震 熊本城『特別見学通路』公開 4月向け仕上げ作業」(読売新聞)
- 2月24日 「新型肺炎 観光客マスク姿 熊本城 もてなす側も着用」(読売新聞)
- 2月28日 「熊本城のいま 166 石垣や重文櫓修理 正念場へ」(熊本日日新聞)
- 2月28日 「ともに支える“令和の築城” 熊本城復活への軌跡 熊本城復興支援キャンペーン第二弾 其の弐
先人が守り続けた長堀 強さ増す令和の復旧」(熊本日日新聞)
- 2月29日 「小中学生新聞くま TOMO おさらい! ニュース 熊本城に特別見学通路 県内」(熊本日日新聞)
- 3月1日 「街かどクリップ 丸美屋が熊本城支援」(熊本日日新聞)
- 3月2日 「街かどクリップ サッポロビール『熊本城復興応援缶』の発売発表会」(熊本日日新聞)
- 3月8日 「熊本市 コロナ対策へ初の寄付 加藤神社 熊本城復旧へ500万円も」(熊本日日新聞)
- 3月8日 「街かどクリップ 熊本市 二胡奏者らが熊本城復旧へ寄付」(熊本日日新聞)
- 3月17日 「時をかけた! ?長岡監物」(熊本日日新聞)
- 3月17日 「古地図で歩く 城下町くまもと 12 七曲り 外敵から城守る迷路」(熊本日日新聞)
- 3月19日 「熊本市 経済回復へ5億7000万円 コロナ終息見据え対策」(熊本日日新聞)
- 3月19日 「熊本市屋外施設あすにも再開『屋外感染リスク低い』」(熊本日日新聞)
- 3月19日 「熊本市が10施設再開検討 新型コロナ動物園など20日にも」(読売新聞)
- 3月20日 「アラカルト アサヒビール熊本支社 文化財復興に寄付」(熊本日日新聞)
- 3月20日 「熊本城特別公開再開見送り」(熊本日日新聞)
- 3月22日 「コロナ禍花見自粛?解放? 桜の名所対応割れる」(熊本日日新聞)
- 3月24日 「ともに支える“令和の築城” 熊本城復活への軌跡 熊本城復興支援キャンペーン第二弾 其の参
市外・県外からの応援職員復旧への大きな力に」(熊本日日新聞)
- 3月26日 「新型コロナ 『感染押さえられている』 熊本市専門家会議が見解」(読売新聞)
- 3月27日 「宇土櫓 解体・復旧へ 熊本市『部分的修理 困難』」(熊本日日新聞)
- 3月28日 「街かどクリップ 熊本城被害復旧支援金贈呈」(熊本日日新聞)
- 3月30日 「外出自粛も桜恋し コロナ県内人出減」(熊本日日新聞)

- 3月30日 「桜一色 行幸坂」(読売新聞)
- 3月31日 「新型コロナ警戒区分設定を提案 4月末特別公開断念」(熊本日日新聞)
- 3月31日 「異動 熊本市 文化と地域づくり連携」(熊本日日新聞)

(5) 視察

本年度は、合計15件のべ179名に対応した。

(6) 講演・案内など

熊本城調査研究センター主催、または市民、団体などからの講師派遣依頼に対応したもの。

a. 定期講座「熊本城学」

熊本城調査研究センター主催。毎月第3土曜日に実施。時間は午前10時から11時半(30回のみ午後1時半から3時)。本年度は年11回開催。

なお3月開催予定の熊本城学は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止。

回	講師	講座名	場所	実施日	聴講者数
30	城戸秀一 山下宗親	被災後3年の熊本城復旧状況	城彩苑多目的交流室	4月20日	87名
31	木下泰葉	明治22年熊本地震と熊本城	城彩苑多目的交流室	5月18日	62名
32	金田一精	清正の土木	城彩苑多目的交流室	6月15日	78名
33	須貝慎吾	伊達の城と熊本城	城彩苑多目的交流室	7月20日	71名
34	林田和人	熊本城以前の地政学	城彩苑多目的交流室	8月17日	76名
35	亀島慎吾	琉球の風 - 琉球のグスクと熊本城 -	城彩苑多目的交流室	9月21日	65名
36	美濃口紀子	「シヤチホコ」から城を語る	城彩苑多目的交流室	10月19日	65名
37	嘉村哲也	天守閣の石垣復旧でわかったこと	城彩苑多目的交流室	11月16日	64名
38	下高大輔	「クマモト城」と豊臣政権	城彩苑多目的交流室	12月21日	67名
39	城戸秀一 岩橋隆浩	長堀の保存修理工事 ～これまでとこれから～	城彩苑多目的交流室	1月18日	68名
40	鶴嶋俊彦	中世の隈本城から近世の隈本(熊本)城へ	城彩苑多目的交流室	2月8日	85名
合 計					788名

b. 講演・講座

本年度は合計18件行ない、のべ835名が参加した。

c. 出前講座

本年度は合計18件行ない、のべ1,156名が参加した。

d. 説明会

本年度は合計12件行ない、のべ6,008名が参加した。

(7) その他の啓発事業

熊本城調査研究センター主催、または団体などからの依頼に対応したもの。

本年度は合計 15 件を行なった。

a. 展示・借出(遺物・パネル・データなど)

件数	展覧会・企画・番組名	期間	内容	主催	会場・(機関)
1	特別企画展 値・千・金 -お金が語る西南戦争-	2019年4月1日 ～ 2020年3月31日	飯田丸・本丸御殿 出土品 計788点	熊本市田原坂 西南戦争資料館	同館
2	「慶應(応)」銘 滴水瓦展示	2019年4月19日 ～5月16日	小天守出土 滴水瓦1点 パネル展示	熊本城ミュージアム わくわく座	同館
3	新元号記念 「熊本城の過去・現在・未来」	2019年4月27日 ～5月6日	パネル展示	お城まつり 運営委員会	熊本城 二の丸広場
4	「1889年明治熊本地震 -130年前に始まった 地震被害調査-」	2019年7月23日 ～9月1日	パネル展示	独立行政法人 国立科学博物館	同館
5	企画展「復興のシンボル 熊本城・阿蘇神社」	2019年9月30日 ～11月16日	パネル展示	肥後の 里山ギャラリー	同館
6	熊本城発掘調査速報展 『飯田丸五階櫓台 石垣解体調査成果』	2019年10月2日 ～ 2020年3月	熊本城出土品瓦 ほか22点 パネル展示	熊本城ミュージアム わくわく座	同館
7	よみがえれ！ 熊本城プロジェクト第1弾 「石垣」	2019年10月5日 ～11月30日	パネル展示	熊本城ミュージアム わくわく座・ 熊本城調査研究 センター	熊本城ミュージアム わくわく座
8	文化財石垣保存技術協議会 令和元年度技能者養成研修 (熊本研修)	2019年10月20日 ～22日	石積み復元 石材制作 石工道具復元作 パネル展示	文化財石垣保存 技術協議会・ 熊本市	二の丸催し 広場・ 三の丸
9	小天守鯨瓦屋外展示	2019年11月17日	小天守鯨瓦	熊本市	本丸
10	「ひごあかり」 熊本城特別公開 プロモーション	2019年11月23日 ～12月1日	熊本城天守閣 被災した鯨瓦・ パネル展示	文京区肥後 細川庭園松聲閣 肥後細川庭園パーク アップ共同体	文京区 肥後細川 庭園松聲閣
11	よみがえれ！ 熊本城プロジェクト第2弾 「瓦」	2019年12月7日 ～ 2020年1月26日	パネル展示	熊本城ミュージアム わくわく座・ 熊本城調査研究 センター	熊本城ミュージアム わくわく座

件数	展覧会・企画・番組名	期間	内容	主催	会場・(機関)
12	お城EXPO2019	2020年12月21日 ～22日	パネル展示	お城EXPO 実行委員会	パシフィコ 横浜会議 センター
13	よみがえれ！ 熊本城プロジェクト第3弾 「櫓・天守」	2020年2月1日 ～2月29日	パネル展示	熊本城ミュージアム わくわく座・ 熊本城調査研究 センター	熊本城ミュー ージアム わくわく座
14	FCCJ熊本ナイト ～甦りつつある熊本城と 熊本市の魅力をご紹介～	2020年2月13日	パネル展示	公益財団法人 日本外国 特派員協会	公益財団法人日本外国 特派員協会 ダイニング ルーム
15	くまもとの風 「熊本城地震を超えて ～浮かび上がる歴史ロマン～」	2020年3月31日	滴水瓦 11点 観音菩薩像板碑 1点	NHK熊本放送局	NHK番組

4. 寄贈資料

(1) 図書

青森県弘前市教育委員会 文化財課

- ・『弘前市内遺跡発掘調査報告 23 大浦城跡 寺沢(1)遺跡 中野(2)遺跡 堂ヶ沢遺跡 詳細分布調査』2019
- ・『史跡津軽氏城跡堀越城跡発掘調査総括報告書 史跡整備等に伴う発掘調査成果総括報告書』2019
- ・『坂本館発掘調査報告書 一市道国吉館後線道路改築事業に伴う発掘調査一』2019
- ・『大石武学流庭園群名勝調査報告書』2019

愛媛県松野町教育委員会

- ・『松野町文化財調査報告 第24集 予土境界地域における中世遺跡群の調査』2019

大分県杵築市教育委員会

- ・『大分県杵築市埋蔵文化財発掘調査報告書 第25集 杵築城跡1 一平成29～令和元年度 杵築城跡(台山部分) 確認調査、および杵築城藩主御殿調査概要報告書一』2019

大分県中津市歴史博物館内社会教育課文化財室

- ・『中津市文化財調査報告 91集 中津城下町遺跡12・13次調査 定留遺跡7次調査 市営京町住宅建設 市道鷹匠町おかこい山線新設、市道定留・諸田線新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2019
- ・『市内遺跡試掘確認調査中近世城館確認調査(6) 長者屋敷官衛遺跡 市内遺跡発掘調査概報 12 中津市文化財調査報告 第92集』2019
- ・『中津市の中近世城館 資料編 中津市中近世城館確認調査報告書 I 中津市文化財調査報告 第93集』2019
- ・『中津市文化財調査報告 第97集 市内遺跡試掘確認調査中近世城館確認調査(7) 市内遺跡発掘調査概報 13』2020

神奈川県小田原市経済部小田原城総合管理事務所

- ・『小田原城天守閣特別企画展「原画展 センゴク権兵衛」に描かれた小田原～展示ガイドブック～』
小田原城天守閣 2019

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-19 史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-4 長岡京左京三条四坊六町跡』2018
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-5 大藪遺跡・下久世構跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-6 周山廃寺』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-7 史跡・名勝 高台寺庭園』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-8 北野廃寺・北野遺跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-9 平安京右京六条一坊十一・十四町跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-11 植物園北遺跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-12 平安京右京七条一坊十二町跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-1 平安京右京一条二坊十六町跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-2 平安京右京二条二坊十二町跡・西ノ京遺跡』2019
- ・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-3 平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡』2019
- ・『洛史 研究紀要 第12号』2019

熊本県教育委員会

- ・『熊本県文化財調査報告第333集 清正公道 一般国道57号北側復旧ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』2019
- ・『熊本県文化財調査報告第334集 弓削前畑遺跡 竹ノ後・芭蕉遺跡群―白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(7)―』2019
- ・『熊本県文化財調査報告第335集 立石遺跡群―九州縦貫自動車道北熊本スマート IC建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』2019
- ・『熊本県文化財調査報告第336集 幅・津留遺跡(第1分冊)・(第2分冊)・(第3分冊) 熊本県道28号熊本高森線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』2019

熊本県天草市観光文化部文化課

- ・『崎津資料館みなと屋 令和元年度春季特別展 天草陶磁の旗手 高浜焼～波濤を超えた挑戦～展示図録』2020
- ・『天草市文化財調査報告 8集 国指定史跡棚底城跡Ⅳ 平成27・28年度発掘調査(第3・4次発掘調査)』2020

熊本県宇土市教育委員会

- ・『再検証 小西行長 第四集 謎の武将が今よみがえる』2020

熊本県熊本市教育委員会

- ・『熊本市の文化財 第84集 熊本市埋蔵文化財調査年報 第21号―平成29年度―』2019
- ・『熊本市の文化財 第85集 上代町遺跡群Ⅱ―上代町遺跡群第5次調査区発掘調査報告書―坪井川第3排水区 浸水対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』 2019
- ・『熊本市の文化財 第86集 松山遺跡Ⅱ―植木体力・健康づくり拠点整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』2019
- ・『熊本市の文化財 第87集 松山遺跡Ⅲ―第18次調査―市道植木―古閑線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』2019
- ・『熊本市の文化財 第88集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成30年度―第1分冊』2019
- ・『熊本市の文化財 第89集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成30年度―第2分冊』2019

熊本県玉名市教育委員会

- ・『玉名市文化財調査報告 第44集 大原遺跡 一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』2020

- ・『玉名市文化財調査報告 第45集 木船西遺跡Ⅱ 一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』2020
- ・『玉名市文化財調査報告 第46集 玉名市内遺跡調査報告書12—平成30年度の調査—』2020

滋賀県教育委員会事務局 文化財保護課

- ・『特別史跡安土城跡歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業 特別史跡安土城跡復元遺構復旧事業概要報告書』2020

静岡県埋蔵文化財センター

- ・『静岡県埋蔵文化財センター 研究紀要 第7号』2020

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

- ・『川原宮Ⅲ遺跡 国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』2019
- ・『尾ノ上遺跡 桜田遺跡 一般国道9号(太田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』国土交通省松江国道事務所 2019
- ・『一般国道9号(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 蔵廻り遺跡 榎坂窯跡』国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所 2019
- ・『一般国道9号(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 嶧口古墳 上古市遺跡』国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所 2019
- ・『一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6 京田遺跡2区・中上Ⅱ遺跡』2020

島根県松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室

- ・『松江市文化財調査報告書 第186集 史跡松江城石垣総合調査報告書』2018

島根県松江市歴史まちづくり部 史料編纂課 松江城調査研究室

- ・『松江城関係資料集2 松江城天守古材調査記録』2019
- ・『松江城関係資料集3 松江城天守昭和修理工事図面集』2020
- ・『松江城調査研究集録6』2019
- ・『松江城調査研究集録7』2020

公益財団法人 千葉県教育振興財団

- ・『千葉県教育振興財団文化財センター年報・紀要 No. 44—平成30年度—』2019
- ・『研究連絡誌 第80号』2019

奈良県大和郡山市 都市計画課 文化財保存活用係

- ・『大和郡山市文化財調査概要43 平城京南方遺跡範囲確認調査概要Ⅲ』2018
- ・『大和郡山市文化財調査概要44 平城京南方遺跡範囲確認調査概要Ⅳ』2019
- ・『第21回 こおりやま歴史フォーラム 大和の雅陶—赤膚焼の歴史と魅力—』2018

兵庫県赤穂市教育委員会 生涯学習課

- ・『赤穂市文化財調査報告書91 赤穂市立有年考古館報告書 第7冊 有年考古 第7号—赤穂市立有年考古館年報(平成30年度)—』2020
- ・『赤穂市文化財調査報告書92 発掘された赤穂城下町5—旧赤穂藩校「博文館」跡発掘調査報告書—』2020
- ・『赤穂市文化財調査報告書93 赤穂城攻略本』2020

福井県坂井市教育委員会

- ・『丸岡城～ここまでわかった！お天守の新しい知見と謎～』2019
- ・『ここまでわかった！お天守の新しい知見と謎 丸岡城シンポジウム資料集』2019

福井県福井市教育委員会

- ・『福井城跡 XXⅢ 中央1丁目10番地地区優良建築物等整備事業に伴う福井城跡発掘調査報告書』2020

宮城県仙台市教育委員会 文化財課 仙台城史跡調査室

- ・『仙台市文化財調査報告書 479 集 仙台城跡 14－平成 30 年度 調査報告書－』2019

宮崎県延岡市教育委員会 文化課

- ・『延岡市文化財調査報告書 第 60 集 市内遺跡 平成 30 年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2019
- ・『市内遺跡 平成 31 年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 延岡市文化財調査報告書第 62 集』2020
- ・『延岡城石御門跡(延岡城跡第 32 次調査)延岡市文化財調査報告書 第 63 集』2020

和歌山県和歌山市産業交流局観光国際部和歌山城整備企画課

- ・『第 16 回 全国城跡等石垣整備調査研究会 記録集』2019
- ・『史跡和歌山城第 31～38 次発掘調査報告書－二の丸西部保存整備事業に伴う発掘調査－』2019

大阪城天守閣

- ・『徳川時代大坂城関係史料集 第十九号 大坂城鉄炮方外会所文書』2019
- ・『大阪城天守閣紀要 第四十三号』2019
- ・『テーマ展 戦国の世の祈り』2019

金沢城調査研究所

- ・『金沢城シンポジウム 金沢城の庭園－その歴史と特徴－』2019
- ・『金沢城調査研究パンフレット No. 157 金沢城を探る 古文書から史実を解き明かす』2019
- ・『金沢城調査研究所年報 12(平成 30 年度)』2019
- ・『研究紀要 金沢城研究 第 17 号』2019
- ・『金沢城史料叢書 34 金沢城編年史料 近世一』2019
- ・『金沢城史料叢書 35 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 12 金沢城跡－本丸附段・北ノ丸－』2019

姫路市立城郭研究室

- ・『特別史跡姫路城跡 石垣修理工事報告書(1)－車門跡・内京口門跡－』2019
- ・『城郭研究室年報 Vol. 29』2020

F U T 福井城郭研究所

- ・『F U T 福井城郭研究所年報・研究紀要 2018 No.6』2019
- ・『F U T 福井城郭研究所年報・研究紀要 2019 No.7』2020

九州国立博物館

- ・『令和元年度文化財防災ネットワーク推進事業－九州国立博物館の取り組み－』2020

熊本県立美術館

- ・『熊本城大天守外観復旧記念 熊本城と武の世界』熊本城と武の世界展実行委員会 2019

熊本市現代美術館

- ・『熊本市現代美術館 2017 年度 年鑑 Art Gamadas Vol. 17』2019

熊本博物館

- ・『熊本城特別公開記念 特別展 追憶の熊本－画家・甲斐青萍が描いた熊本城下の記憶－』2019

島根県立古代出雲歴史博物館

- ・『日本書紀成立 1300 年特別展 出雲と大和』島根県 奈良県 2020

熊本大学永青文庫研究センター

- ・『永青文庫叢書 第二期 細川家文書 熊本藩役職編』吉川弘文館 2019
- ・『永青文庫叢書 第二期 細川家文書 島原・天草一揆編』吉川弘文館 2020
- ・『熊本大学永青文庫研究センター年報 第10号』2019
- ・『永青文庫研究 第2号』2019

熊本大学埋蔵文化財調査センター

- ・『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 24 -2017年度-』2019
- ・『熊本大学埋蔵文化財調査報告書 第14集 熊本大学構内遺跡発掘調査報告 14(2013・2014年度：黒髪南地区 1310 調査地点)』2019

東海大学文学部

- ・『文明 Civilizations』東海大学文明研究所 2019

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター

- ・『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信 第1号～第88号』1998年～2020年

別府大学

- ・『文部科学省 平成28年度採択 私立大学研究ブランディング事業 「九州における文化遺産保護研究の拠点形成のための基盤整備事業」 成果報告書』別府大学文学部研究ブランディング事業 2019

早稲田大学系属 早稲田実業学校

- ・『2018 高2 九州教室』早稲田大学系属 早稲田実業学校高等部 2019

北園遺跡発掘調査団

- ・『北園遺跡 熊本県水俣市所在板石積石棺墓発掘調査報告書』2019

若越建築文化研究所

- ・『若越建築文化研究所調査報告 第3集 越前丸岡城の門遺構調査報告書』2019

一般財団法人 災害科学研究所

- ・『一般財団法人 災害科学研究所 熊本地震災害報告書 熊本地震に学ぶー知見と提言ー』2019

織豊期城郭研究会

- ・『織豊城郭ー第18号ー』2018
- ・『織豊城郭ー第19号ー』2019
- ・『織豊期城郭資料集成V 戦国・織豊期城郭の石垣(戦国・織豊期城郭等石垣基準資料作成)』2019

公益財団法人永青文庫

- ・『季刊永青文庫 No.106』2019
- ・『季刊永青文庫 No.107』2019
- ・『季刊永青文庫 No.108』2019
- ・『季刊永青文庫 No.109』2020

公益社団法人 日本文化財保護協会

- ・『埋蔵文化財調査要覧 令和元年度』株式会社 ニューサイエンス社 2019

株式会社 ウェッジ

- ・『ひととき 2019-6』2019

株式会社 学研プラス

- ・『ワイド&パノラマ 日本の城 天守・櫓・門と御殿ー鳥瞰・断面イラスト、CG、精密模型でよみがえる近世城郭ー』2020

株式会社 碧水社

・『週刊 日本の城 改訂版 124』株式会社 デアゴスティーニ・ジャパン 2019

株式会社 吉川弘文館

・『文化遺産と〈復元学〉 遺跡・建築・庭園復元の理論と実践』2019

雄山閣出版株式会社

・『中近世陶磁器の考古学 第十一巻』雄山閣 2019

Ⅲ. 研究ノート

1. 熊本城の近代修復石垣の様相 — 明治22年被災石垣の修復内容を中心に —

嘉村哲也・木下泰葉・佐伯孝央・下高大輔
(熊本城調査研究センター)

はじめに

特別史跡熊本城跡は973面・約79,000㎡の石垣を有しており、直近の熊本城石垣研究では7期に分類され^{註1}、さらにこれらに対する文化財としての修復石垣が把握されている^{註2}。これらは、①構築当初石垣・②江戸期修復石垣（城郭機能時）・③近代修復石垣（城跡利用時）・④近代以降増築石垣・⑤文化財としての修復石垣、という性格で大別することができる。これらの中で①構築当初石垣・②江戸期修復石垣については最近の詳細な検討があるので^{註3}、本稿ではこれらの成果を踏襲する形で③近代修復石垣について検討したい。この石垣は直近の研究において、特別史跡熊本城跡の石垣の中では「熊本城石垣7期：明治4年～昭和25年（1871～1950）」とされている石垣であり、熊本城主細川家による修復石垣に該当する「熊本城石垣6期」と、昭和25年（1950）以降の文化財保護法下における7期までの石垣を「元に復す」ことを基本とした文化財修復石垣が施工され始める間の石垣に該当する。熊本城跡の7期にわたる石垣の中で、最も不明な点が多い石垣となる^{註4}。

本稿は、当該期の石垣の様相を解明するための基礎的作業として、明治22年（1889）の熊本地震で被災した石垣に注目し、その修復内容を把握して「熊本城石垣7期」の定点資料の構築を試みる。加えて、ほぼ同時期・同背景で修復された尾張名古屋城跡（愛知県名古屋市の石垣にも注目して熊本城跡と同様の手法で修復内容を把握し、当該期の熊本城の石垣が独自のなものか否かの確認も併せて行いたい。

なお、本稿は執筆者が中心となって検討し^{註5}、1（1）・（2）、2（1）・（2）を木下、1（3）を嘉村、その他を下高が分担執筆した。また、図1～7の作成は嘉村と協議しながら佐伯が、その他の挿図表は各執筆担当がそれぞれの本文に併せて用意・作成し、下高が全体の編集を行った。

1. 熊本城の明治22年被災箇所石垣

（1）熊本城と明治熊本地震の概要

明治4年（1871）、全国に4鎮台のうちの一つである鎮西鎮台が熊本に置かれ、旧花畑屋敷に本営を置いた。明治6年（1873）には名古屋・広島を加えた6鎮台となり、あわせて鎮西鎮台は熊本鎮台に改称し、翌年、旧花畑屋敷から熊本城本丸へ鎮台本営が移った。この頃、熊本鎮台の管理下に置かれていた熊本城では、櫓の解体や石垣の一部撤去等の改変が行われた。明治10年（1877）の西南戦争開戦直前の2月19日、原因不明の火災により天守・本丸御殿一帯を焼失した。この火災で、天守台や闇り通路等の石垣表面は被熱により脆くなり、剥離や欠落が生じている。その後、天守台前には新たに鎮台司令部が建築され、本丸は鎮台の中核として機能した。

明治21年（1888）、師団司令部条例が制定され、熊本鎮台は第六師団に改編された。第六師団は熊本の第十一旅団と小倉の第十二旅団で構成され、第十一旅団は歩兵第十三連隊、歩兵第二十三連隊、騎兵第六大隊、砲兵第六大隊、工兵第六大隊、輜重兵第六大隊からなる。このうち、歩兵第十三連隊と歩兵第二十三連隊が二の丸に、砲兵第六大隊が桜馬場に、輜重第六大隊が古京町に兵営を置いていた。

明治22年（1889）7月28日午後11時40分頃、熊本地方で地震が発生した^{註6}。熊本市西方の金峰山付

近を震源とするこの地震は「金峰山地震」とも別称され、地震の規模はマグニチュード6.3と推定されている^{註7}。当時の新聞記事には、10月31日までに劇震2回、稍強（中震）49回、軽微震205回、鳴動218回の計474回の地震が記録されている。

（2）文献資料による被災石垣の検出

本項では、第六師団によって作成された地震被害報告書である「震災ニ関スル諸報告」（宮内公文書館蔵）^{註8}に基づき、被災石垣の検出を行なう。

「震災ニ関スル諸報告」は明治熊本地震の発生直後に、熊本に視察のため派遣された明治天皇の侍従富小

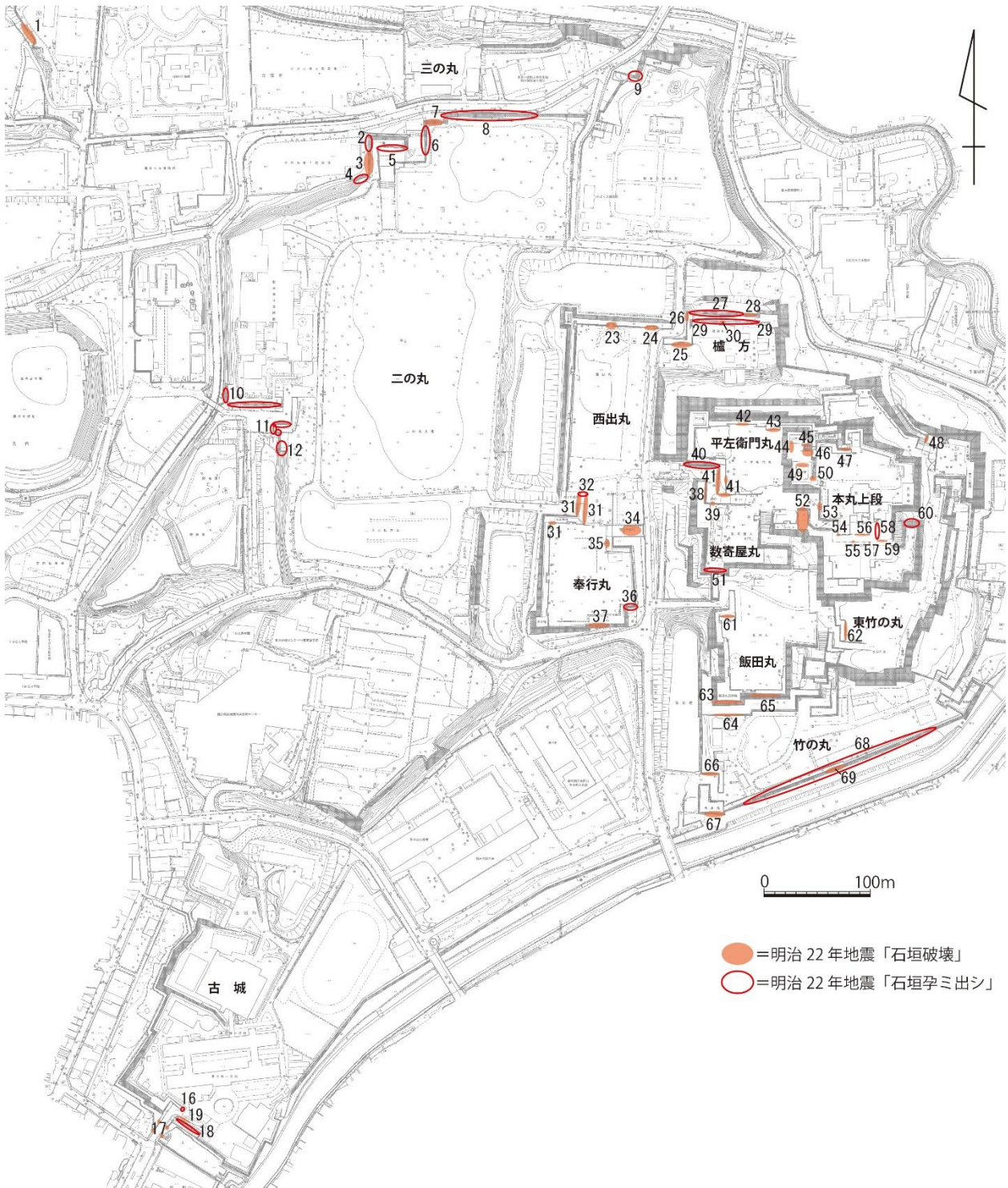


図1 熊本城跡「震災ニ関スル諸報告」による石垣毀損箇所（註1文献掲載図に加筆、図中番号は表1に対応）

表1 「震災ニ関スル諸報告」による毀損内容・修復分類一覧

図1 番号	被害内容	被害規模				石垣番号	明治22年 修復分類	文化財 修理
		長さ	高さ	坪	m ² ※			
1	石垣破壊	20間	5間	100	330	S13	2-a	
2	石垣孕ミ出シ	7間	5間	35	115.5	N34		平成8
3	石垣破壊	15間	5間	75	247.5	N34		平成8
4	石垣孕ミ出シ	8間	4間	32	105.6	N33	修復無し?	
5	石垣孕ミ出シ	14間	2間半	35	115.5	N37		平成19
6	石垣孕ミ出シ	19間	5間半	104.5	344.85	N49	2-a	
7	石垣破壊	10間	3間半	35	115.5	N50	1-①-a	
8	石垣孕ミ出シ	50間	6間半	325	1072.5	N52		平成18
9	石垣孕ミ出シ	6間	2間	12	39.6	N74	1-①-a	
						N79	1-①-a	
10	石垣孕ミ出シ	33間	3間	99	326.7	N8		平成14
						N10		昭和60
						N16		平成17
						N17		平成17
						N18		平成17
						N19		平成17
						N20		平成17
13	崖破壊	20間	8間	160	528		不明	
14	崖破壊	6間	4間	24	79.2		不明	
15	崖破壊	12間	6間	72	237.6		不明	
16	石垣孕ミ出シ	1間5分	1間8分	2.7	8.91	K53	1-②-b	
17	石垣破壊	8間	2間	16	52.8	K50	2-a	
						K67	2-a	
18	石垣孕ミ出シ	16間	2間半	40	132	K72	1-②-b	
19	石垣破壊	6間	1間半	9	29.7			
20	崖破壊	5間	5間	25	82.5		不明	
21	崖破壊	5間	6間	30	99		不明	
22	崖破壊	6間	4間	24	79.2		不明	
23	石垣破壊	3間	3間	6	19.8	H71	1-①-a	
24	石垣破壊	4間	2間	8	26.4	H75	1-②-a	
25	石垣破壊	12間半	3間	37.5	123.75	H95	1-②-a	
26	石垣破壊	5間	2間半	11.5	37.95	H92	1-①-a	
27	石垣孕ミ出シ	26間	2間3分	59.8	197.34	H118	1-②-a	
28	石垣破壊	17間	4間半	76.5	252.45	H118	1-②-a	
29	石垣孕ミ出シ	33間	2間半	80	264	H105	2-a	
30	石垣破壊	4間	2間5分	10	33	H105	2-a	
						H34		平成6
						H38		平成6
31	石垣破壊	29間	2間半	72.5	239.25	H39		平成6
						H41		平成5
32	石垣孕ミ出シ	4間	1間半	6	19.8	H40		平成13
33	崖破壊	8間	6間	48	158.4		不明	
						H43		平成9
						H44		平成9
						H46		平成9
34	石垣破壊	37間	2間半	59.4	196.02	H47		平成9
						H48		平成9
						H50		平成9
						H51		平成9
35	石垣破壊	4間	2間	8	26.4	H15		平成1
36	石垣孕ミ出シ	16間	3間	48	158.4	H10	2-a	
						H11	2-a	
37	石垣破壊	14間	6間	74	244.2	H8		平成8
38	石垣破壊	15間	3間	45	148.5	H311	1-②-a	
						H312	1-②-a	
39	石垣破壊	5間	1間6分	8	26.4	H313	1-①-a	
40	石垣孕ミ出シ	16間	6間4分	102.4	337.92	H446	1-②-a	
41	石垣破壊	30間	3間8分	114	376.2	H447		昭和41
						H448		昭和41
42	石垣破壊	6間	1間3分	7.8	25.74	H599		平成24
43	石垣破壊	6間4分	1間5分	9.6	31.68	H603		平成24
44	石垣破壊	2間	3間	6	19.8	H505		平成30
45	石垣破壊	3間	3間	9	29.7	H508		平成30
						H509		平成30
46	石垣破壊	8間	3間	24	79.2	H500		平成30
						H524		平成30
47	石垣破壊	6間	8間	4.8	15.84	H494	1-②-a	
48	石垣破壊	4間	3間	12	39.6	H149	1-①-a	
49	石垣破壊	9間	1間半	10.5	34.65	H618-1		平成30
50	石垣破壊	3間	1間半	4.5	14.85	H617		平成30
						H522		平成30
51	石垣孕ミ出シ	14間	5間	70	231	H307	1-②-a	
						H372	1-②-a	
52	石垣破壊	28間	2間	56	184.8	H373	2-b	
						H593	2-a	
53	石垣破壊	16間	2間	32	105.6	H374	1-②-a	
						H378	1-①-a	
54	石垣破壊	1間	2間	2	6.6	H379	1-①-a	
55	石垣破壊	2間	1間	2	6.6	H368	1-①-a	
56	石垣破壊	10間	2間2分	22	72.6	H379	1-①-a	
57	石垣破壊	1間半	2間	3	9.9	H367	1-①-a	
						H368	1-①-a	
58	石垣孕ミ出シ	10間	1間7分	17	56.1	H406		平成14
59	石垣破壊	6間	2間5分	13.8	45.54	H407		平成14
60	石垣孕ミ出シ	6間	4間	24	79.2	H352	修復無し?	
61	石垣破壊	8間	2間	16	52.8	H297		平成12
62	石垣破壊	4間	1間	4	13.2	H211	1-①-a	
						H267	2-a	平成12・13
63	石垣破壊	14間	4間半	64	211.2	H268	1-①-a・1-2-a	平成12・13
						H269	2-a	
64	石垣破壊	15間	3間半	52.5	173.25	H255	2-a	平成16
65	石垣破壊	15間	3間	45	148.5	H270	1-②-a	平成12・13
66	石垣破壊	6間	3間3分	19.8	65.34	H565	2-a	
67	石垣破壊	9間	4間半	40.5	133.65	H569		平成22
68	石垣孕ミ出シ	90間	3間	270	891	H545	1-①-a	
69	石垣破壊	10間	3間半	35	115.5	H545	1-①-a	

『震災ニ関スル諸報告』（宮内公文書館蔵、識別番号50272）より作成。網掛け（トーン）は文化財としての修復石垣と現段階では明治震災直後とは限定できない石垣であるため、本稿では検討を除外。
※1坪を3.3m²で計算。

路敬直と非職侍従荻昌吉へ第六師団が提出したもので、第六師団の各部隊の被災状況を記した17点の史料が合綴されている。このうち、熊本城の石垣の被害を詳細に記しているのは「明治二十二年七月二十八日午後十一時三十五分震災破損所概調書」と、これに付随する「震災破損所概調書付録」である。特に「震災破損所概調書付録」は石垣や崖の被害について1から69までの番号を付し、「石垣破壊」・「石垣孕ミ出シ」・「崖破壊」の区別と破損規模を詳細に記している。末尾に綴じ込まれた「熊本城 千式百分一」は熊本城本丸・二の丸・古京町・桜馬場・古城一带を描き、「石垣並崖崩壊」を黄色、「石垣孕出」を赤色で塗り分け、69までの番号を付しており、本稿では「崖破壊」を除いて図1で示す。上記の「震災破損所概調書」と「付録」は7月28日に発生した地震の被害だけでなく、8月3日早朝に発生した強い余震による被害箇所も含んでいる。おそらく、侍従派遣が決定して以降、被害報告の作成に着手した第六師団は、8月3日の余震後も被害調査を継続して、侍従が帰京のため長崎港を発する8月12日までにとりまとめて提出したと考えられる。以上から、「震災ニ関スル諸報告」が明治22年に発生した一連の地震による熊本城の被害を包括的に記録したものと評価し、明治熊本地震による石垣の被害規模を確認する。

まず、「震災ニ関スル諸報告」から熊本城の石垣・崖被害を一覧にしたものが表1である。このうち、「石垣破壊」は42カ所1261坪2合（4161.96m²）、「石垣孕ミ出シ」が20カ所1418坪4合（4680.72m²）である。なお、「震災破損所概調書付録」には備考として「此調書中石垣孕ミ出シ其最モ著シキモノヲ揚ク、其他些少ノケ所ハ此ヲ略ス」とあるように、小規模の石垣の膨らみについては記載されていない。

その後、第六師団では8月半ば以降から修復予算獲得のため陸軍本省との協議を重ね、明治22年度中に兵営等の修繕費として3万4030円

85 銭の臨時予算を獲得した^{註9}。明治 22 年 10 月 2 日の熊本新聞は、師団で石垣修理が未だ着手されない理由として、「工事を請け負わせる石工は旧石を小分けにするならともかく、旧石をそのまま用いて修理させるならば、大石なので到底請け負える人はいない」という噂があることを述べている。この噂について第六師団は、工事請負の申し込みはあるが指名をしていない程度だと棄却しているが、当時の石工の技術として江戸期より小さい石材を用いることが多かったことが窺える。第六師団による石垣修理の実態を示す史料は現時点で見出せないが、富重写真所（熊本市）には明治 27～28 年頃撮影とみられる、石垣修理後の写真原板が 7、8 枚所蔵されていることから、少なくともこの頃までに主要部の修理が完了したと考えられる。

（3）被災箇所への修復石垣の把握

前項で把握した明治 22 年の被災箇所への修復石垣は、それ以降から同 28 年頃までの修復石垣と捉えることができ、ここではその特徴と分布を把握する（表 1・図 7）。その際、文化財としての修復石垣^{註10}や「震災ニ関スル諸報告」の「崖破壊」箇所^{註11}に該当する石垣で、明治震災直後の修復石垣と断定するにはさらなる検討が必要となる石垣は今回の検討から除外した（表 1 網掛け）。また、明治 22 年被災箇所は、石垣面ごとに記載していない箇所もあるため、熊本城の石垣台帳^{註11}に基づいて石垣面ごとに分類した。

まずは、明治 22 年被災箇所に対する修復石垣の共通した特徴を確認しておく。江戸期（構築当初）の築石よりも加工度の高い方形を呈した石材の使用頻度が高く、江戸期石垣に使用されている築石よりも少し小さい石材が使用される傾向が共通する。さらに、築石以外の石材（間詰石など）が江戸期石垣と比べると極端に少ないため、江戸期石垣の中から明治 22 年震災後の修復石垣として抽出しやすい^{註12}。

図 2～6 は、主に築石の積み方と新補石材^{註13}の有無による築石部を特徴ごとに分類し、石垣面の様相について平成 28 年熊本地震被災前写真（被災前の正面写真がなかった石垣については被災後オルソ写真）で把握しやすいものを抽出したものである。横目地が通らない谷積みあるいは谷積み状の石垣【1 類】と横目地が通る整層積みの石垣【2 類】に大別できる。1 類は谷積みの完成度によって、明らかに谷積みとなっている石垣を【1-①類】、谷積みの完成度が低い石垣を【1-②類】と細分した。また、新補石材を用いた石垣を a、新補石材を用いない（旧材を使用した）石垣を b とした。これらの組み合わせにより、明治 22 年被災箇所への修復石垣を以下の通り 5 種類に分類した。

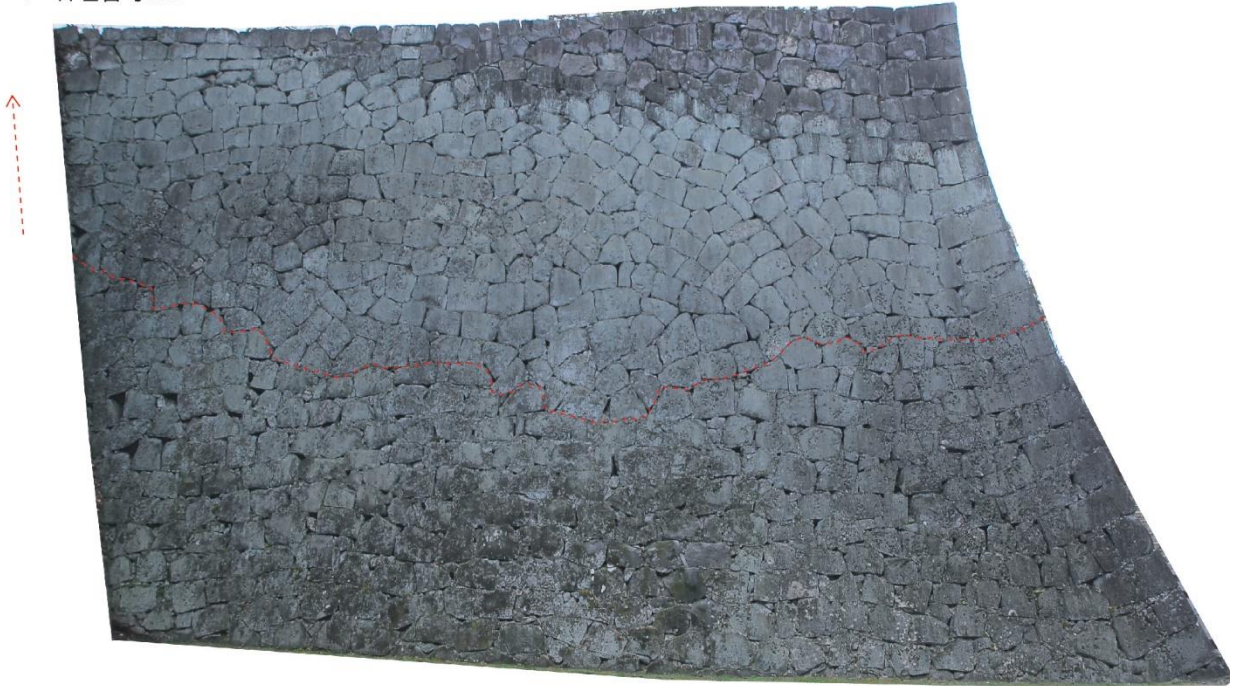
- 【1-①-a 類】 横目地が通らない谷積みで新補石材を用いた石垣（図 2）
- 【1-②-a 類】 横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いた石垣（図 3）
- 【1-②-b 類】 横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いない石垣（図 4）
- 【2-a 類】 横目地が通る整層積みで新補石材を用いた石垣（図 5）
- 【2-b 類】 横目地が通る整層積みで新補石材を用いない石垣（図 6）

現状で確認できる明治 22 年被災箇所への修復石垣は 45 面を数え、そのうちの 31 面が【1 類】にあたる。修復石垣の 7 割弱が谷積みあるいは谷積み状の石垣である。また、【1 類】・【2 類】に関係なくほとんどに新補石材が用いられており、積み方と石材交換が関連しているとは言えない。

「震災ニ関スル諸報告」で「石垣破壊」と記した箇所をみると、ほぼ全ての箇所^{註14}で新補石材が用いられている。また、旧材を用いて修理された箇所は基本的に「石垣孕ミ出シ」と記した箇所^{註15}に限定される（表 1・図 7）。このことから、石垣が崩落した箇所では石材を新補石材に交換して積み直し、石垣が崩落せずに変

※7は被災後オルソ写真、他は背景処理した被災前写真。縮尺不同。

7 石垣番号N50



39 石垣番号H313



48 石垣番号H149
※上部に2-a類含む



ほぼ全面修復

図2 熊本城明治22年被災箇所修復石垣【1-①-a類】横目地が通らない谷積みで新補石材を用いた石垣（赤点線より上部）

※すべて背景処理した被災前写真。縮尺不同。

38 石垣番号H312



40 石垣番号H446



52 石垣番号H372



図3 熊本城明治22年被災箇所修復石垣

【1-②-a類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いた石垣（赤点線より上部）

状のみの箇所では旧材を再利用する傾向があることが確認できた。

また、これらの分布傾向をみると、曲輪単位など特定のエリアで特徴が共通する傾向はみられない（図7）。近接する石垣面においてもその特徴が共通しない事例もあり、図7中の6・7の石垣面のように、出隅部を介して隣り合う石垣面で積み直しの際に同時施工と考えられる箇所でも、それぞれの面で【1類】と【2類】が確認できた（図2・5）。

このように、熊本城跡の明治22年被災石垣に対する修復石垣は5種類に分類でき、その分布はエリアごとにグルーピングなどができない状況である。この要因については、被災後6年間程度の期間の中での時期差なのか石工など施工者の違いを表しているのか言及するには資料が乏しいのが現状である。

2. 名古屋城の明治24年被災箇所の石垣

（1）名古屋城と濃尾地震の概要

名古屋城は慶長15年（1610）、徳川家康の命によって公儀普請による築城が開始され、慶長17年には天守、同20年には本丸御殿が完成した。

明治4年（1871）、名古屋城は兵部省（のち陸軍省）の所管となり、翌5年には本丸御殿に東京鎮台第三分営が置かれることとなった。明治6年に4鎮台に名古屋・広島を加えた6鎮台となり、明治21年（1888）の師団司令部条例の制定により、名古屋鎮台は第三師団となった。明治24年（1891）7月に名古屋城は陸軍省から宮内省への移管が決定したが、間もなく濃尾地震が発生し、名古屋城は大きな被害を受ける。

濃尾地震は明治24年10月28日に、岐阜県南部に位置する濃尾断層帯で発生した地震である。陸域の浅い場所で発生した地震としては大きなもので、マグニチュード8.0、岐阜県・愛知県・滋賀県東部で震度6、震源域の近くでは震度7相当の揺れがあったと推定されている^{註14}。

宮内省は名古屋城の移管について、地震被害を修復して移管するように主張し、陸軍省も了承したが、障壁面の修理などの美術的価値のある修理は一般の工事の競争入札になじまず、陸軍省には相当な技術者もいないため、障壁面の修復工事は陸軍省が費用を負担し、宮内省が工事を取り仕切ることになった^{註15}。

※すべて背景処理した被災前写真。縮尺不同。

16 石垣番号K53



18 石垣番号K72

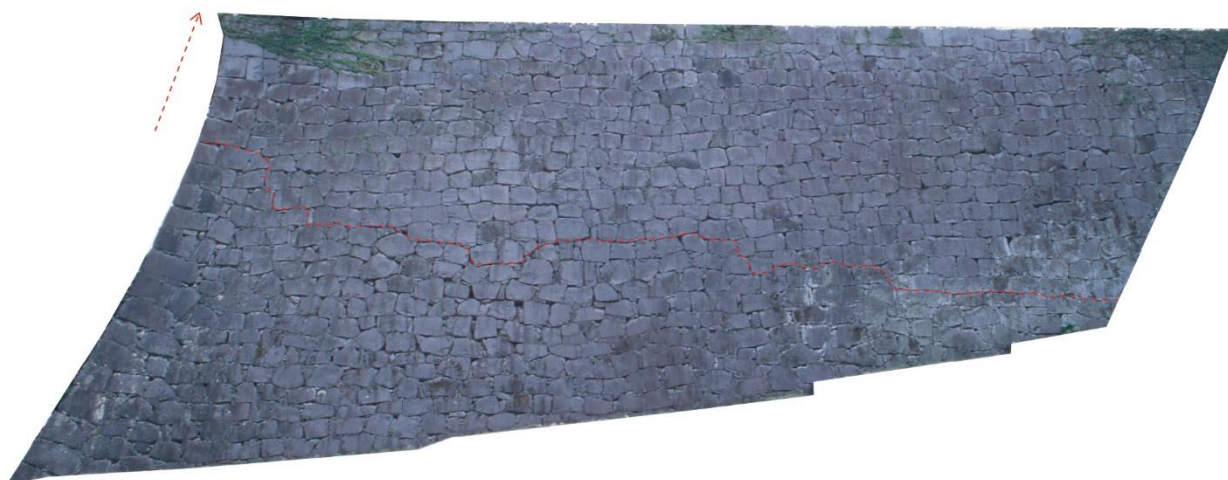


図4 熊本城明治22年被災箇所修復石垣

【1-②-b類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いない石垣（赤点線より上部）

※36は被災後オルソ写真、他は背景処理した被災前写真。縮尺不同。

6 石垣番号N49



36 石垣番号H10



66 石垣番号H565



図5 熊本城明治22年被災箇所修復石垣

【2-a類】横目地が通る整層積みで新補石材を用いた石垣（赤点線より上部）

52 石垣番号H373

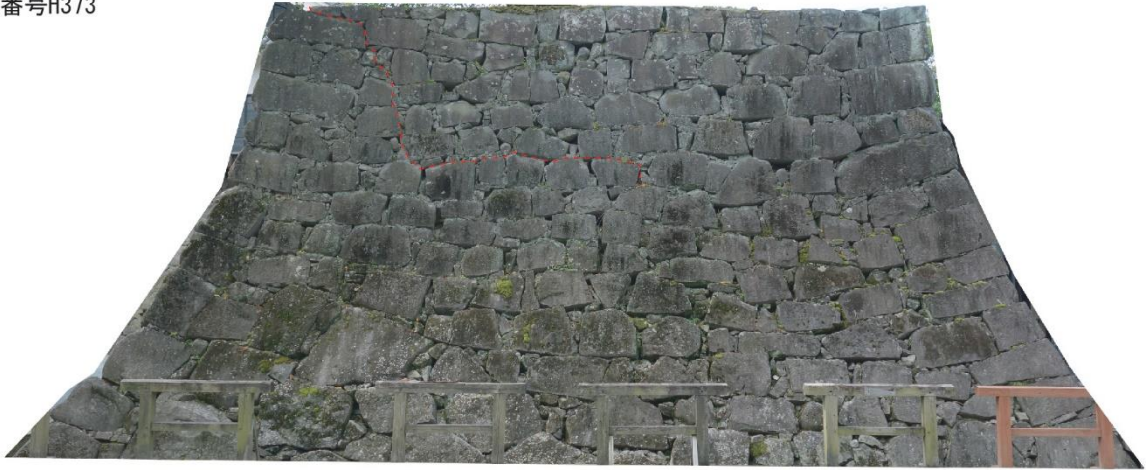


図6 熊本城明治22年被災箇所修復石垣

【2-b類】横目地が通る整層積みで新補石材を用いない石垣（赤点線より上部）

（2）文献資料による被災石垣の検出

本項では、陸軍省と宮内省の関係史料に基づき、被災石垣の検出を行なう。

「本丸・深井丸・西之丸地図（震災石垣破損箇所調査）」は東京都立中央図書館の所蔵する木子文庫に含まれる^{註16}。木子文庫は内裏の大工であった木子家に伝来した、江戸中期から昭和初期までの建築関係資料群である。明治維新後に宮内省に入り明治23年に内匠寮技師となった木子清敬は、本丸御殿等の建物の修理を担当したとみられ、本丸御殿の屋根葺替工事設計図や見積書等が木子文庫のうち離宮の部に納められている。本史料もそのうちのひとつで、本丸・深井丸・西の丸の石垣被害の詳細を記している。描写は熊本城の地震被害を描いた「震災ニ関スル諸報告 熊本城 壹式百分一」に類似しているが、凡例によると灰色が「旧形之俣」、赤色が「崩落」、黄色が「孕ミ」、赤点線が「地裂ヶ」を示している。本稿では赤色の「崩落」と黄色の「孕ミ」のみを、図8で示す。石垣の被害箇所に番号を付す点も熊本城のものと類似するが、榎多門周辺は着色のみで番号を付していない（図8中ではa-mのアルファベットで表記。nについては表2下部註参照）。また、被害規模（面積等）は「震災ニ関スル諸報告」のように別冊を設けず、図中に被害坪数を書き込んでいる。「本丸・深井丸・西之丸地図（震災石垣破損箇所調査）」から名古屋城の石垣被害を一覧にしたものが表2である。

前述の通り、陸軍省と宮内省の協議によって修復費用を陸軍省が負担することが決したのは明治25年3月で^{註17}、それを受けて同年9月に木子清敬が名古屋城の震災被害調査を行った。この時点で石垣及び建物の修復には着手されていなかったとみられる。8月には被災した本丸の多聞櫓の解体が決定し^{註18}、10月からは本丸御殿の障壁画の修理が着手された。その後、名古屋城の「本丸内天守閣、旧殿、其他建物石垣等震災修繕工事」が落成した旨の報告が、明治26年3月7日付で第三師団監督部長井出正章から陸軍大臣大山巖宛に提出された^{註19}。

さて、本丸御殿の障壁画の修復については、陸軍省予算にて宮内省が修理を担当したが、石垣の修復については陸軍省で管轄した可能性が高い。例えば榎多門西方石垣の修復は、陸軍省から石垣修理を委託された日本土木会社が行っており、明治25年11月1日に着手し翌年3月17日に竣工している^{註20}。なお、この石垣は修復後、大雨によって明治26年5月3日に再び崩落した。第三師団はこの崩落原因について断定し得ないとしながらも、冬季に数回積雪を取り除きながら積み直しており、最も注意すべき裏込の土石

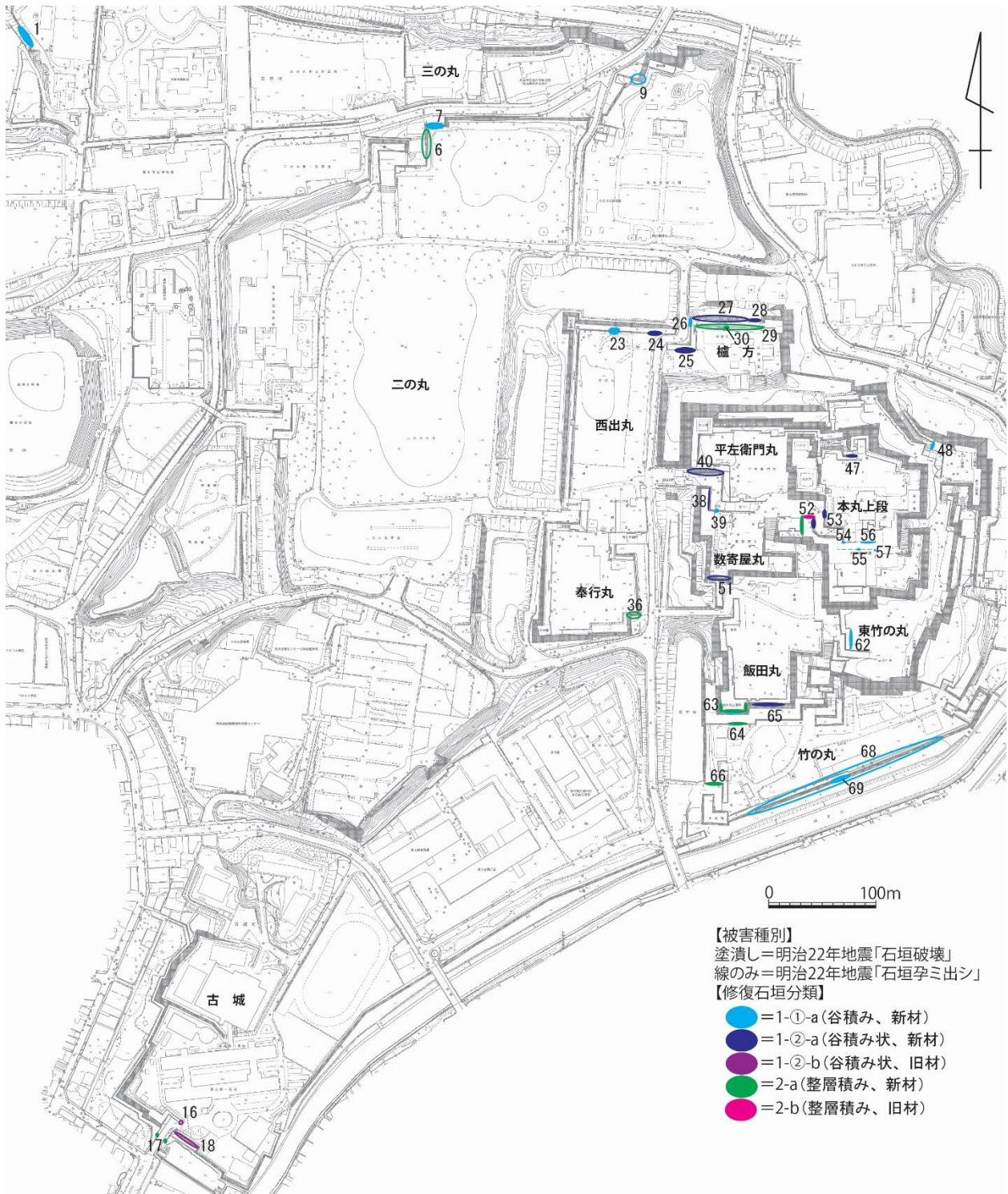


図7 熊本城跡 明治22年震災による毀損箇所の修復石垣特徴別分布図

が凍結したものが春になって自然と緩んだ上に降雨で軟弱となり、旧断面と積み直し部分の接合部が密着していなかったためと推測している。なお、この崩落について第三師団は、工事を請け負った日本土木会社に弁償の義務があるとし再修復を命じたとみられるが、現在当該の石垣は下から数段程度で、上部は土羽となっている。

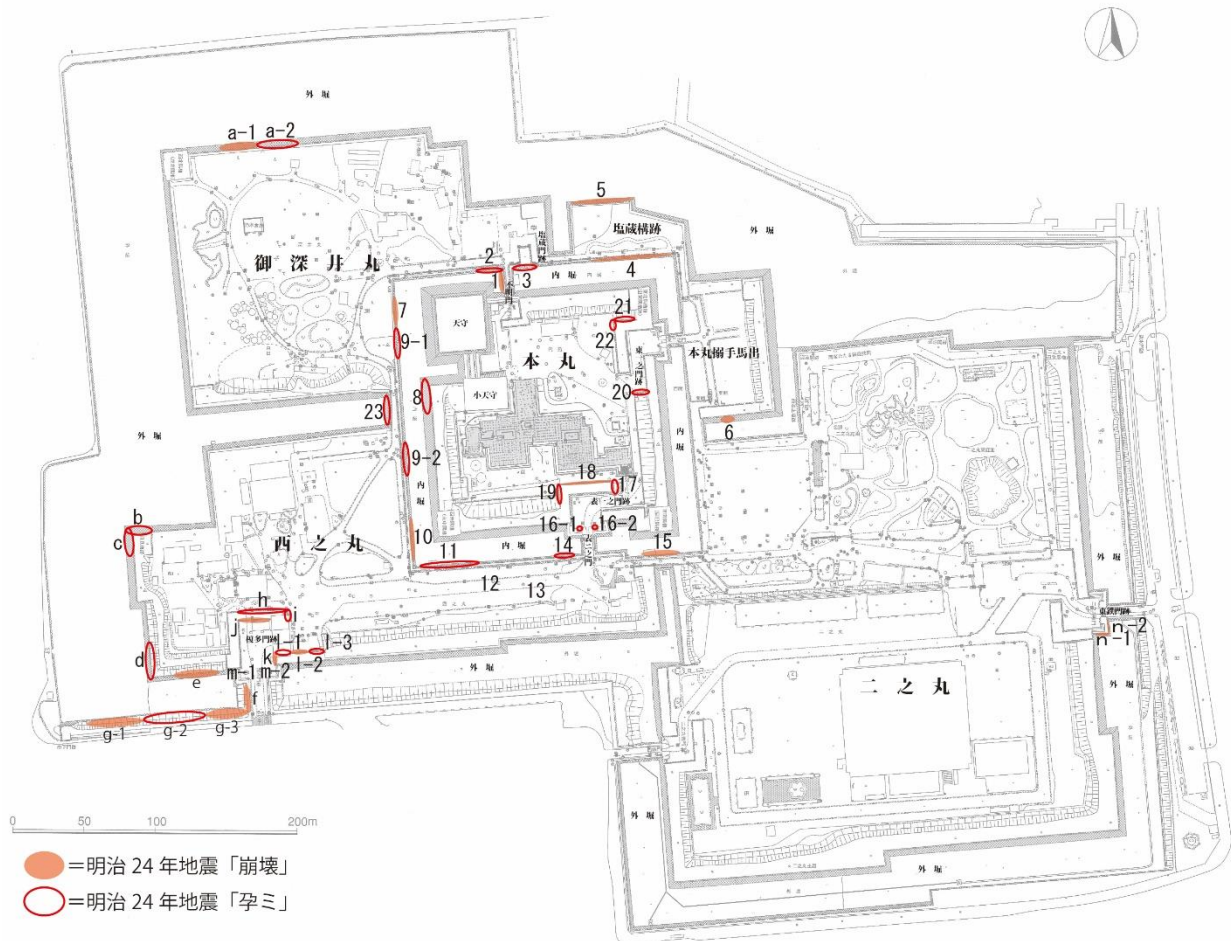


図8 名古屋城跡「本丸・深井丸・西之丸地図（震災石垣破損箇所調査）」による毀損箇所（図中番号は表2に対応）

（3）被災箇所の修復石垣の把握

前項で把握した明治24年の被災箇所の石垣は、基本的に明治25年9月から同26年3月の極めて短期間のうちに修復されたこととなる。ここではその特徴と分布を把握したい（表2・図12）。その際、文化財としての修復石垣^{註21}、現状で地上部分撤去・埋没石垣となっている箇所、先述の榎多門西方石垣、建物復元に伴い修復された可能性が疑われる石垣（＝正門・旧榎多門周辺石垣）については、今回の検討から除外した（表2 網掛け）。

名古屋城跡の明治24年被災箇所に対する修復石垣の共通的特徴は、熊本城跡と全く同じである。つまり、江戸期（構築当初）の築石よりも加工度の高い方形を呈した石材の使用頻度が高く、江戸期石垣に使用されている築石よりも少し小さい石材が使用される。築石以外の石材（間詰石など）が江戸期石垣と比べると極端に少ないために、明治24年震災後の修復石垣として抽出しやすい^{註22}。

図9～11は、熊本城跡と同じく表2中の検討対象石垣を主に築石の積み方と新補石材の有無による築石部を特徴ごとに分類し、石垣面の様相を現況写真で把握しやすいものを抽出したものである。

熊本城跡と全く同じ視点で、明治24年被災箇所の修復石垣を以下の通り4種類に分類できた。

- 【1-①-a類】横目地が通らない谷積みで新補石材を用いた石垣（図9）
- 【1-②-a類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いた石垣^{註23}
- 【1-②-b類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いない石垣（図10）
- 【2-a類】横目地が通る整層積みで新補石材を用いた石垣（図11）

名古屋城跡の明治24年被災箇所は、【1-②-a類】・【1-②-b類】がそれぞれ1カ所、【2-a類】が2カ所で、それ以外の20カ所、全体の8割以上を【1-①-a類】が占める(表2・図12)。また、修復時の旧材のみの使用は1カ所に留まり、ほかはすべて新補石材が含まれる修理と判断した^{註24}。

こうした状況を鑑みると、熊本城跡では「石垣破壊(=崩壊)」箇所がほぼ新補石材、「石垣孕ミ出シ」箇所のみ旧材を用いた修理内容となる法則が見出されるのとは異なり、名古屋城跡では地震被害の種別(「崩壊」・「孕ミ」と修復石垣の積み方(谷積み・整層積み)も含めて石材(旧材・新材)の在り方に法則や関連を見出すことはできない。名古屋城跡での震災後の修復では、ほぼすべての箇所で新材が使用され、基本的には谷積みが採用されたものと捉えられる。

なお、名古屋城跡では、榎多門西方の石垣修復について陸軍から民間委託により施工された事例があるものの、修復後に再び崩落した上、さらなる修復の際には下部のみとなり、ほとんどが土羽施工で対応されたため、陸軍直営施工や民間委託施工の有無やその違いなどについても明確に言及できる資料が乏しいのが現状である。

3. 熊本城と名古屋城からみた明治20年代の石垣

これまで熊本城跡と名古屋城跡の明治20年代前半の地震被害箇所の修復石垣の特徴を抽出してきた。両城跡ともに当該被害の修復時期は文献資料から明治20年代中でおさまること、これらの石垣の諸特徴に共通性が確認でき、少なくとも熊本城跡独自の様相ではないことがわかった。繰り返しとなるが、以下に明治20年代の石垣の特徴をまとめておく。

共通した特徴としては、江戸期(当初・修理ともに含む)の築石よりも加工度の高い方形を呈した石材の使用頻度が高く、江戸期石垣に使用されている築石よりも少し小さい石材が使用される。築石以外の石材(間詰石など)が江戸期石垣と比べると極端に少ない。

また、築石の積み方と石材の交換有無の組み合わせで、以下の通り最大5種類の石垣を見出せる。

- 【1-①-a類】横目地が通らない谷積みで新補石材を用いた石垣(図2・9)
- 【1-②-a類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いた石垣(図3^{註25})
- 【1-②-b類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いない石垣(図4・10)
- 【2-a類】横目地が通る整層積みで新補石材を用いた石垣(図5・11)
- 【2-b類】横目地が通る整層積みで新補石材を用いない石垣(図6)

表2 「本丸・深井丸・西之丸地図(震災石垣破損箇所調査)」による毀損内容・修復分類一覧

図8 番号	被害内容	被害規模		明治24年 修復分類	文化財 修理
		坪	m ² ※		
1	崩壊	31.5	103.95	1-①-a	
2	孕ミ	17.5	57.75	1-①-a	
3	孕ミ	36	118.8		昭和61-63 平成6・9
4	崩壊	136.5	450.45		
5	崩壊	114	376.2	1-①-a	
6	崩壊	12	39.6	1-②-b	
7	崩壊	31.5	103.95	1-①-a	
8	孕ミ	105	346.5	2-a	
9-1	孕ミ	70	231	1-①-a	
9-2	孕ミ			1-①-a	
10	崩壊	56	184.8	1-①-a	
11	孕ミ	48	158.4	1-①-a	
12	孕ミ	4.5	14.85	不明	
13	孕ミ	30	99	不明	
14	孕ミ	17.5	57.75	1-①-a	
15	崩壊	72	237.6	1-①-a	
16-1	孕ミ	6	19.8	2-a	
16-2					
17	孕ミ	8.75	28.875		昭和57・58
18	崩壊	66.5	219.45	1-①-a	
19	孕ミ	10.5	34.65	1-①-a	
20	孕ミ	12.5	41.25	1-①-a	
21	孕ミ	28	92.4	1-①-a	
22	孕ミ	12	39.6	1-①-a	
23	孕ミ	78	257.4	1-①-a	
a-1	崩壊	-	-		昭和45・46
a-2	孕ミ	-	-		
b	孕ミ	-	-	1-①-a	
c	孕ミ	-	-	1-①-a	
d	孕ミ	-	-	1-①-a	
e	崩壊	-	-	1-①-a	
f	崩壊	-	-	1-②-a	
g-1	崩壊	-	-		地震後に積 み直し、再 び崩落
g-2	孕ミ	-	-		
g-3	崩壊	-	-		
h	孕ミ	-	-		昭和34年 正門(榎多 門)復興 【今回保 留】
i	孕ミ	-	-		
j	崩壊	-	-		
k	崩壊	-	-		
l-1	孕ミ	-	-		
l-2	崩壊	-	-		
l-3	孕ミ	-	-		
m-1	孕ミ	-	-	不明	
m-2	孕ミ	-	-	不明	
n-1	崩壊	-	-		平成11
n-2	崩壊	-	-		

「名古屋城(名古屋離宮)本丸・深井丸・西之丸地図(震災破損箇所調査)」(東京都立図書館蔵、請求記号:木54-2-14/木054-2-14)より作成。網掛け(トーン)は文化財としての修復石垣と現段階で撤去などされて地上では確認できない石垣であるため、本稿では検討を除外。文化財修理の把握は、名古屋市2017『名古屋城 伝統の技にふれる2017』(石垣修復現場見学会資料)による。1~23までは図中の番号による。図に着色があり番号が付されていないものについては、作成者がアルファベットで新たに付した。また、東鉄門の被害については図の描写範囲外であるが、被害状況を古写真で確認できるため、「n」とし表に含めた。

※1坪を3.3m²で計算。

なお、熊本城跡では上記の通り 5 種類、名古屋城跡では【2-b 類】を除く 4 種類となる。

以上が近代修復石垣の中で明治 20 年代に絞れる石垣の様相であり、「熊本城石垣 7 期」^{註26}の定点資料と言っても差し障りはないだろう。

ところで、この 10 年未満のうちに 5 種類の石垣がほぼ同時に構築される要因は何であろうか。これについては時期差や施工者（石工）の違いなどが容易に思い付く。しかし、先述の通りこれらに言及できる資料に乏しい状況であること、また、被害内容ともリンクしづらく法則を見出すことが難しい。よって、ここでは石垣被害箇所が帰属する構築当初石垣との関係性に触れて、5 種類の石垣が構築された要因を予察的に提示しておきたい。

熊本城跡の場合、構築当初石垣である「築石に非方形石材が用いられ横目地が通らない石垣」【熊本城石垣 1～3 期】と、「築石に方形石材が用いられ横目地が通りやすい石垣」【熊本城石垣 4 期】の部分で^{註27}、明治 22 年の地震被害に対する修復が施されている。ただし、すべての当初石垣が直接地震被害にあったのではなく、江戸期の修復が存在し、それらが地震被害にあった可能性も考慮する必要がある^{註28}。当初石垣と明治 22 年地震被害箇所修復石垣をリンクさせた場合、【熊本城石垣 1～3 期】に対しては横目地が通らない谷積み・谷積み状の石垣【熊本城石垣 7 期 1 類】で修復され、【熊本城石垣 4 期】に対しては横目地が通る整層積みの石垣【熊本城石垣 7 期 2 類】で修復されているという大枠の傾向が指摘できるのではない

※すべて背景処理した現況写真。縮尺不同。



18 本丸御殿南側石基北面石垣



20 本丸東一之門虎口北面石垣



22 本丸東一之門虎口西側石基西面石垣

図9 名古屋城明治 24 年被災箇所修復石垣【1-①-a 類】横目地が通らない谷積みで新補石材を用いた石垣

※すべて背景処理した現況写真。縮尺不同。



6 本丸搦手馬出南面石垣

図10 名古屋城明治24年被災箇所修復石垣【1-②-b類】横目地が通らない谷積み状で新補石材を用いない石垣



8 本丸西面石垣



16-1 本丸表二之門西側北面石垣

図11 名古屋城明治24年被災箇所修復石垣【2-a類】横目地が通る整層積みで新補石材を用いた石垣

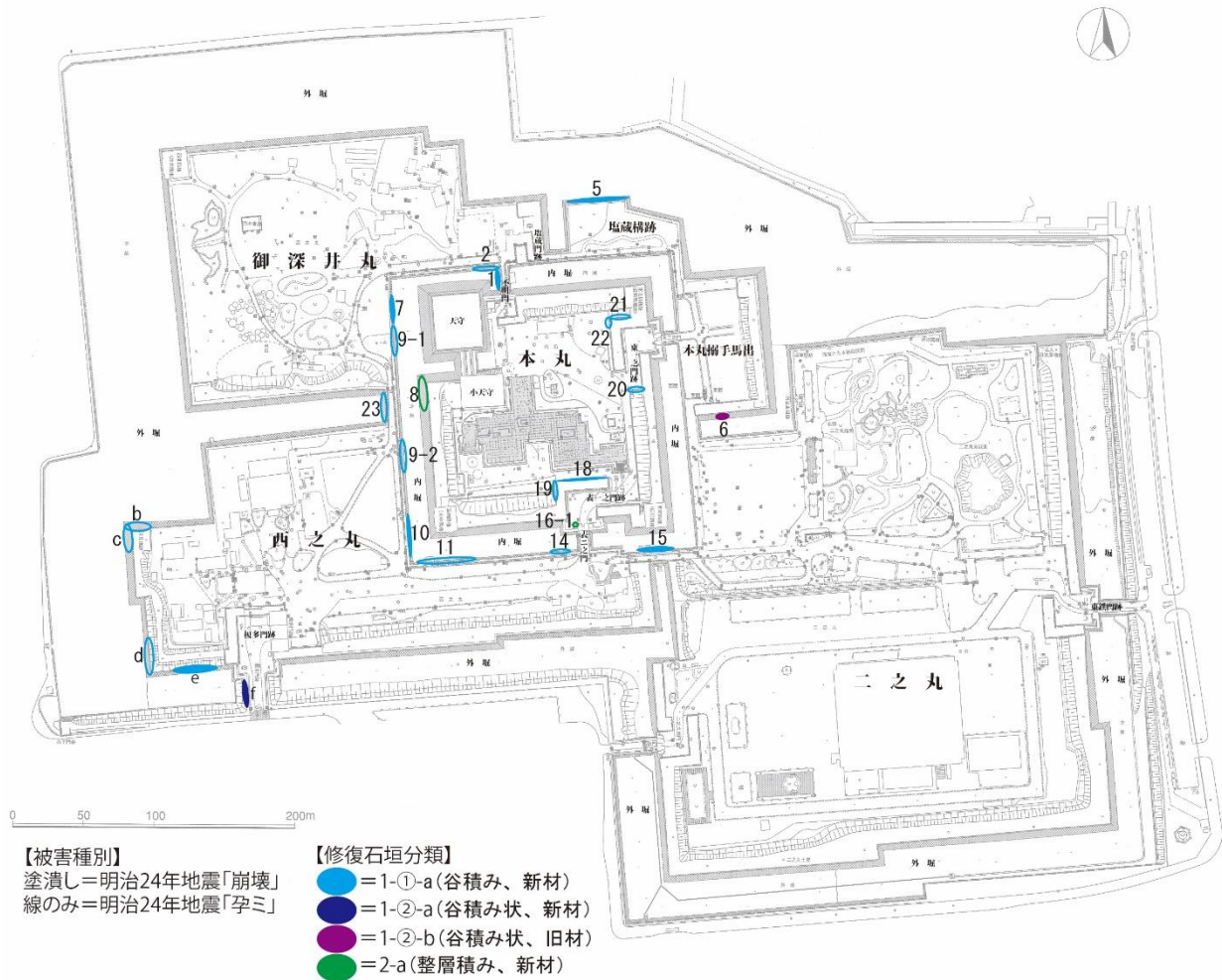


図 12 名古屋城跡明治 24 年震災による毀損箇所の修復石垣特徴別分布図

か。ただし、図 2 中の 7 のような例外があることは課題となる。

名古屋城跡の場合、熊本城跡同様に江戸期の修復が存在する可能性は想定しつつも、「築石に非方形石材が用いられ横目地が通らない石垣」【熊本城石垣 3 期相当】^{註 29}の部分に対して、明治 24 年の地震被害に伴う修復が施されていると考えられる。そして、名古屋城跡の場合、今回検討対象の外堀より内側の石垣の大半が【熊本城石垣 3 期相当】であり、明治 24 年被災箇所全体の 9 割が【熊本城石垣 7 期相当 1 類】となっていることから、熊本城跡の大枠の傾向と合致する。ただし、熊本城跡と同様に名古屋城跡にも例外がある。名古屋城跡には横目地が通る整層積みの石垣【2 類】が少なくとも 2 ヶ所確認できるが、両者ともに石垣基礎付近から全面で積み直しが行われている（図 11：8・16-1）。一方で、その他修復全体の 9 割を占める谷積みおよび谷積み状の積み直しは、石垣基礎付近からの全面積み直しの石垣（図 9）もあれば、今回図示できなかった石垣面上部の部分的な積み直しが含まれる。こうしたことから、石垣基礎付近から石垣面全体で大規模に修理された石垣の場合、規格品の可能性が極めて高い新補石材に交換することで、構築当初石垣の影響を受けなかったと考えることができるのではないかと。

以上のことから、この 10 年未満のうちに 5 種類の石垣がほぼ同時に構築される要因は、大きく 2 つ考えられるのではないかと。第 1 としては、地震という自然現象によって城跡全体に散在的かつ満遍なく被害が発生した結果に対する同時発生的修理であること、第 2 としては、石垣被害箇所が帰属する構築当初石垣の様相と、被害内容（「石垣破壊（＝崩壊）」・「石垣孕ミ出シ」）の影響により、積み方と石材交換の選択が

発生し、最大5種類もの石垣が出現したと予察する。

おわりに—課題と展望—

本稿では特別史跡熊本城跡の石垣の中で最も不明な点が多い近代修復石垣の様相を考えるために、定点資料の構築を試みた。その結果、明治20年代の石垣の様相を抽出することができたと考えられる。

今後は、この定点資料をもとに、記録が残っていない同様の石垣を抽出し、その分布状況の把握に努める必要がある。この作業は記録に残らない近代そのものの城跡の在り方(陸軍施設としての利用状況など)や、近代以前の石垣修理を見出すきっかけになる可能性があり、特別史跡熊本城跡の本質的価値を高めることに繋がると考えている。また、近代修復石垣(「熊本城石垣7期」とそれ以前の石垣である熊本城主細川家による最末期の修復石垣(「熊本城石垣6-③期」)^{註30}の特徴の連続性・非連続性についても検討・考察が必要と考える。そして、近代修復石垣の背面状況の詳細把握も課題である。先述の名古屋城跡の事例で民間委託により施工された石垣で、「最も注意すべき裏込の土石が凍結した」という内容があり大変興味深い。裏込め背面には、栗石だけでなく「土」も混在していたことを示唆する表現と言える。このことは、現在進行中の平成28年熊本地震被害に伴う復旧事業による石垣調査成果^{註31}と一致する内容であり、今後の精査の必要性を感じている。引き続き、特別史跡熊本城跡の石垣の検討に努めたい。

註

- 1 熊本市「第7章 付論 第1節 熊本城の石垣変遷」『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編 第2分冊』、2020年。
- 2 熊本市「第5章 総括 第4節 熊本城の石垣」『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編 第2分冊』、2020年。
- 3 嘉村哲也・木下泰葉・下高大輔・関根章義「熊本城の江戸期修復石垣の様相—彦根城と仙台城との比較から修復石垣の変遷を考える—」『熊本城調査研究センター年報5 平成30年度』、2019年。その後さらに検討した内容が、熊本市「第7章 付論 第1節 熊本城の石垣変遷」『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編 第2分冊』、2020年。
- 4 前掲註1に同じ。
- 5 特別史跡熊本城跡の石垣については金田一精(熊本城調査研究センター復旧事業班)とも日頃より議論を重ねているところであり、その内容も本稿は含んでいる。また、特別史跡熊本城跡と特別史跡名古屋城跡での現地調査は、亀島慎吾(平成31・令和元年度沖縄県派遣)も参加している。
- 6 山中進「明治二十二年熊本大地震の記録」『市史研究くまもと』熊本市、1996年。
- 7 地震調査研究推進本部地震調査委員会『日本の地震活動—被害地震から見た地域別の特徴—』第2版、2009年。
- 8 宮内公文書館蔵「震災ニ関スル諸報告」(識別番号50272)。なお、本史料は、熊本市『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史史料編』、2018年に全文翻刻され、図版が掲載されている。
- 9 修復費用獲得の具体的経過は、木下泰葉「明治熊本地震における熊本城の被害」『歴史地震』35号 歴史地震研究会、2020年。
- 10 前掲註2に同じ。なお、表1・図1・7中の63-65石垣は、一部が文化財としての修復石垣ではあるが、平成28年熊本地震に伴う飯丸五階櫓台石垣復旧事業における石垣調査によって、概ね明治期の修復の様相に正確に復されていることを詳細に把握しているため、本稿の分類に耐えうる資料である。よって、表1・図7中に明治22年石垣修復分類を記入している。
- 11 平成24年度に実施した特別史跡熊本城跡石垣現況調査及び測量業務委託の成果(未報告)による。なお、その後、この台帳をもとに石垣面ごとのカルテ化(構築時期・修復履歴や毀損度・危険度などの把握)を実施しようとした矢先に、平成28年熊本地震で被災したため、未だ石垣台帳は完成には至っていない。現在、復旧事業と並行して順次作業を進めているところである。
- 12 前掲註1に同じ。
- 13 本稿でいう新補石材とは、石垣修復の際に新規で調達されたものを指す。既存の築石石材の加工使用は含まない。
- 14 前掲註7に同じ。
- 15 朝日美砂子「永遠なれ 本丸御殿」『名古屋城特別展 失われた国宝 名古屋城本丸御殿—創建・戦火・そして復元—』名古屋城特別展開催委員会、2008年。
- 16 東京都立図書館所蔵木子文庫(木54-2-14/木054-2-14)。
<http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/detail?tilcod=0000000016-00045910>
- 17 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:C03030706600、明治25年3月「老大日記」(防衛省防衛研究所)
- 18 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:C07050424600、明治25年8月「伍大日記」(防衛省防衛研究所)
- 19 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:C10060358300、「明治26年分 編冊 各監督部 製絨所」(防衛省防衛研究所)
- 20 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref:C10060358500、「明治26年分 編冊 各監督部 製絨所」(防衛省防衛研究所)

- 21 名古屋市「名古屋城 伝統の技にふれる 2017」(石垣修復現場見学会資料)、2017年。
- 22 なお、名古屋城の築城当初石垣は慶長15年(1610)頃のものであり、その石垣の特徴は熊本城石垣3期(慶長11～12年(1606～1607)頃)と合致し、その後の熊本城石垣4期(慶長16年(1611)～)とは異なるため、構築実年代と石垣の特徴について熊本城と齟齬はない(前掲註1文献参照)。こうした石垣に対して、江戸期の修復石垣が存在した上で、明治24年被災後修復石垣が存在することも熊本城と全く同じ状況となる。
- 23 名古屋城跡では現状で一例しかない【1-②-a類】谷積み状で新補石材を用いた石垣については、石垣正面から写真撮影ができない位置に立地するため、本稿では提示できなかった。
- 24 特別史跡名古屋城跡における石垣調査は、現状で一般公開されているエリアからのみの石垣観察であるため、すべての石垣面を近くで観察できたわけではない。また、名古屋城跡の石垣を形成している石材質は、熊本城跡のそれと比べると、普段から見慣れたものではないために誤認がある可能性は捨てきれない。よって、新補石材の使用有無については、今後訂正の余地があることをお断りしておく。
- 25 名古屋城跡についても事例はあるが、本稿では図がないのは前掲註22に同じ。
- 26 前掲註1に同じ。
- 27 前掲註1に同じ。
- 28 前掲註10に同じく、飯田丸五階櫓台石垣復旧事業における石垣調査で、明治22年熊本地震被害箇所はそれ以前の正徳5年(1715)に石垣修理がなされていたことがわかっている(熊本城総合事務所・熊本城調査研究センター2019『復興熊本城 Vol. 3』熊本市・熊本日日新聞社)。また、平成28年熊本地震により崩壊した箇所の多くが明治22年地震被害箇所と重複する傾向がある。こうしたことから、一度修理された箇所が地震に弱いと言及できる可能性が高く、明治22年熊本地震の被害箇所もそれ以前の修理が施されていたことを想定しておいたほうが良いと考えている。
- 29 前掲註21に同じ。
- 30 前掲註3に同じ。
- 31 大小天守台・飯田丸五階櫓台石垣の明治期修理部分の調査や、特別史跡内の崩落石材回収に伴う調査で明らかになりつつある。

2. 古写真による熊本城研究の概要

富田 紘一

1. 熊本城を写す

熊本城は熊本平野に張り出した台地端から分離した「茶臼山」と呼ばれる小丘陵に築城している。その標高は、天守の東側の本丸広場で約 50 メートルである。城郭の足元ともいえる位置にある現熊本市役所が 11.5 メートルであるので、その高低差は約 40 メートルとなる。城域の総面積は 98 ヘクタールにおよぶ。その視覚的な記録としては、堂々たる櫓群の本丸の勇姿を描いた本丸図や城郭全体の配置に主眼を置いた城図など、鳥瞰図で表現されている。その本歌は江戸時代後期まで遡ると見られるが、流布しているのは明治維新以後の作品である。特に明治 10 年 (1877) の西南戦争で大小天守をはじめ本丸御殿など主要建物が焼失すると、名城に対するノスタルジアと築城者の加藤清正に対する思慕の念が相まって数多く作られている。

幕末になり、横浜や長崎が開港されると、蘭学者を中心に化学反応を元にして、記録対象の画像を写し取る写真術が研究された。長崎や横浜で写真館を開業した上野彦馬や下岡蓮杖はその嚆矢とされるが、その前にも研究し撮影に成功した者もいた。また、外国人カメラマンも活躍した。その中の一人、フェリックス・ベアトは江戸や横浜を中心に各地を撮影している。大パノラマで表現した江戸の大名屋敷や町並は壯観である。文久 3 年 (1864) 5 月、欧米の四国連合艦隊に占領された長州藩の下関砲台の現場写真など貴重な歴史の一齣をも記録に残している。

熊本での初期写真の撮影者として、富重利平がよく知られている。彼は天保 8 年 (1837) に福岡県山門郡柳川に生まれた。17 歳で長崎にでて、幾つかの仕事に就いたのち、上野彦馬のもとで写真術を学んだ。慶応 2 年 (1866)、故郷柳川に帰り写真館を開業したが、まだ地方の町では客も来なかった。明治 3 年 (1870) 春、上野のもとで同門であった内田九一が東京で成功していると聞き、上京を決意してまず熊本へ向い途中で高瀬によった。そこは熊本の支藩である高瀬藩領であった。この藩は細川家の分家で、江戸に住まい粟米から 3 万 5 千石を受けていた。明治維新により藩庁を高瀬に置き、高瀬藩と称した。藩主細川利永はじめ家臣たちも江戸から移住したもので、田舎武士とは違い写真も順調に受け入れられ、利平も経済的に潤ったらしい。高瀬からさらに、東京に行くため熊本に移り、しばらく写真の営業をおこなっていた。

いよいよ出発の手筈も整った頃、盛装に身を包んだ一団がやってきた。以下、後に富重が語った新聞記事を引用する。

◆突然井田讓と云ふ少將が長屋少佐外數名を連れ盛装で乗込んで來たが何しろ鶯帽錦衣も珍らしいので宿屋の前には人集りがする騒ぎ「是非共一度寫して呉れ」との懇望であつた。そこで土蔵の横で一枚映して上げると「實は熊本に鎮臺が出来る、そこで城地其他を寫眞に寫して東京に送りたいからお前が寫して呉れ」との懇望、處が既に荷物を仕舞つたからと断るとぜひ共居れと堅く言葉を添へて歸つた間もなく當時の縣令、白川縣大属の内藤貞八と云ふ人から呼出され翁が行つて見ると井田少將からの内命無理でも此地に止まるやう若立去るといふ事なら當縣から月給を出しても引止めて呉れとの事 (中略) 當分此地に居ると致しませう」と約束して了つた。是れでトウヽヽ東京行の望みを絶つて了はうとは夢にも思わぬ處であつたと翁は語つた

大正時代になってからの回想で、4 回連続の長文であり、記事全部が正確かどうか問題もあるが、熊本に住み続けた事情であるこの部分は信じられよう。また、熊本城や城下町の要地を撮影した写真の目的など示唆するものがある。

もう一人、西南戦争以前から、熊本で写真館を開いている。それは、上野のもとで富重と同門であった越前三國の出身で中島寛道という。掲載の書名は不明だが、手元の評伝のコピーから要点を引用する。

初め蘭法を學んで醫師たらんと欲し長崎に出で、シーボルト氏に従ひ醫學を修め傍ら上野彦馬氏の門に入りて化學を究む、其間師の寫眞術に練熟せるを見て食指大に動き請ふて具さに之れを修得す。明治三年肥後の大守細川侯の聘を受け、其造營に係はる寫場を經營して始めて寫眞を熊本の人士に紹介す。明治十年西南戦役の勃發するに及び兵火熊本市を焼き先生の寫場家財擧げて灰燼に歸す。

先生風光明媚なる肥前島原の地を愛すること久し、罹災後五年遂に意を決して其地に移り、寫眞を業として終始斯術に盡瘁し名聲西肥に高し。

この文によると、中島は細川家の招聘により明治3年に熊本に來たという。それはまだ廢藩置縣の前で、後にも触れるが、革新的な藩主護久を頂いた実学党政權が誕生し、改革を推し進めようとしていた時代であった。藩や県など行政が行った事業の写真に携わった可能性も考えられる。また彼は西南戦争の時、薩軍の依頼（強制？）により、籠城を攻撃する側から熊本城攻防戦の様子を撮影している。当然それは銃砲の危険がない遠景であるが、戦闘中の実景を目にすることができる。薩軍は熊本から撤退するにあたり、カメラや機材を持ち去ったが、馬見原で放棄していたのを征討軍が回収し、中島に返還した文書が残る。

熊本在住であった二人の写真師のほかにも、熊本城や城下町を写した人がいる。明治初期の事であるから、アマチュアカメラマンは考えられないので当然職業としての撮影である。確実に人と目的まで知られるのに、明治天皇の西国巡幸にともなう写真がある。この行幸には、写真師の内田九一が随行し巡覽の場所を撮影している。その一部はアルバムにまとめられ、印刷物として刊行されたりインターネットで公開されている。東京都写真美術館や霞会館など複数の施設で所蔵されているらしく、アルバムによって収納された写真が異なっていたり、数が違っているらしい。熊本関係では大小天守・熊本城域・花畑邸・水前寺成趣園が含まれている。この写真では何れも行幸の一行が登場するものはなく、前撮りまたは後撮りらしい。どちらにしても、撮影者と期間は限定される一括資料である。

熊本における明治初期の景観の写真には、これまで推定したような各種の事由により撮影されたものと考えられるものである。その開始は、年月を明らかにできないが、明治3-4年の事らしい。そしてこの景色は明治10年の西南戦争で灰燼に歸した。今回は熊本城域を中心として、古写真に残された画像から、往時の姿を保つ状況から、維新後の新風を受けて次第に変化した様子について述べたいと思う。今回は熊本城のみで、他はほとんど触れないが、また機会があれば城下町や西南戦争戦跡の古写真についても紹介したい。

なお、本論ではそれらの写真資料を用いた熊本城研究の概要を述べてゆく。だが関連する写真資料や補足の絵図地図資料を全て掲載すると膨大なページを費やすことになる。このため論考の中心となる資料だけを選んで図版とした。熊本市では2019年に『特別史跡熊本城跡総括報告書』歴史資料編、2020年に調査研究編を刊行し、古写真や絵図地図資料も多数解説を附して収録している。そこで掲載できなかったものについては、歴史資料編「写真編」収録写真の番号を（s-・・・）、調査研究編収録写真を（ch-・・・）としている。本年報より昭和の印刷も鮮明であり、併せてご覧いただきたい。

2、城下から遠望で城内を見上げる

熊本城は阿蘇火山の巨大な火砕流噴火により形成された台地の突端に位置する。阿蘇の火砕流噴火で大きく地形に影響をあたえた火砕流噴火が4回知られている。この中で熊本城の基盤を成しているのは、約

9万年前の第4回目のAso-4とよばれる噴火であった。この噴出物は温度が低く、火砕流が高温で一度溶解し再び凝固したものと違い、岩盤にならず軽石と火山灰が一気に堆積したものである。そこで東西南の3方は坪井川・白川・井芹川の流れに台地の裾がえぐられて、急崖を成している。築城前の「茶臼山」という呼称も、この地形によるものである。このため、城下から城郭の写真を撮影するとなると、ごく遠景のなかに七重八重の高い石垣とその上に立ち並んだ多数の櫓を認める事になる。しかし相当に精密な焼付け写真でもない限り、個々の被写体を満足できるように観察することはできないので、この目的に用いられる資料は少ない（s-35. 36. 37. 38）。

城下町も城郭に近寄ると、ほぼどのアングルでも熊本城の特徴である急崖に面した地形に遭遇する。西側を除く南北東面では、この崖面をより要害化するため石垣で幾重にも築き固めている（写真1、s-24. 25. 27. 28. 29）。この石垣で取り巻いたような景観は、清正が茶臼山の旧来の起伏を生かして縄張りしたと伝えるが、それを証明するような旧地形や記録類が存在するわけではない。しかし、火砕流の噴火から9万年、厚さ50メートルの重さで固まった堆積は、岩盤に準じる硬さになっている。ただ一度掘削すると、元にもどすことはできない。そこで築城にあたっては切土工法が主で、その土を盛ることは限られたとみられる。



写真1 坪井堀端から本丸を望む（長崎大学附属図書館蔵）・(s-35)

これに対して熊本城の正面にあたる西側では、徐々に低くなる斜面には土居が多く見られる。二ノ丸上段の北面にあたる百間石垣を除くと、石垣の壮観さはないが何段もの堀切で分断されており、要害の堅固さはそれほど劣ったものではない。ただ天守から遠く、目立った施設もないため、明治初期の一連の写真で被写体となることはほとんどなかった。ただ、江戸時代からの景観を大きく変えた西南戦争では、その

近郊が激戦の場となったため、戦跡写真には多く登場する。

3、本丸周縁からその中心部を写す

本丸における高石垣の上に立地する櫓群とその中心となる天守については、特に好まれるアングルがみられる。それは、背景の天守なり、手前の撮影主体なりが樹木の蔭にならないように、また被写体同士が被らないようにすると、どうしてもアングルは限られてきたのであろう。幾つかのよく撮影されたポイントを紹介しよう。

南方下段の備前堀端から本丸中心の大天守方向を撮影したもの（s-24. 25）、および花畑邸前から本丸を望んだもの（s-36. 37. 38）には、飯田丸や数寄屋丸の五階櫓が姿を留めたものや、既に姿を消しているなど、その変遷を見ることができる。このアングルに対して、一步本丸に入り込んだ現在ビューポイントの一つとされる、竹ノ丸中央から大天守方向を撮影したものは知られていない。

千葉城から不開門下坂道越しに天守方向を撮影したものもある（s-27）。この写真では屏風を立て並べたように東竹ノ丸北端の高石垣がつづき、東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓・六間櫓・不開門（画面には見えない）、背後には大天守と裏五階櫓が顔を出す。この撮影位置を北西に移して棒庵坂下にとると、天守を真北から見る風景となる（s-28. 29）。この天守北面の部分は下の路面から天守台までの間は、熊本城内で最も短距離・急落差の部分である。

同じ方向で、城域から離れ、内坪井から撮影した一群がある。この撮影にあたっては、意識して同方向から其々間隔を置いてカメラ位置を選んでいる可能性がある。熊本城が軍用地化される時期であり、そのアングル選択が興味深い（写真1）。

周辺から本丸を見た写真で数も多く、よく知られているのが現在芝生広場となっている二ノ丸上段から撮影した資料である（s-18. 19. 20. 22. 23）。その撮影のためのカメラ位置を現場で方向と角度で確認してみると、（s-18. 19. 20）は江戸時代の重臣屋敷の屋敷内になると想定される。明治4年3月に同所の時習館や武家屋敷を解崩した後のことと考えられる。このアングルでは、宇土櫓・小天守・大天守がほぼ横一直線に並ぶ。この光景だけでなく、（s-22. 23. 26）を加えると、城郭の正面通路にあたる旧頼当御門や大手門三基で固めた西出丸など、熊本城の明治維新前後の変化をビジュアルで理解することができる。

4、天守を中心とした撮影に本丸の変遷を見る

熊本城では城域の東側を広く本丸とよぶ。その中の上段の部分を狭い意味での本丸と称している。周りを高石垣で囲まれ、天守をはじめ本丸御殿などびっしりと建物が建てこみ、文字どおり本丸の中の本丸といえる地点である。それ以外は曲輪ごとに次のように分轄している。平左衛門丸・数寄屋丸・飯田丸（西竹ノ丸）・東竹ノ丸・竹ノ丸・西出丸。この広義の本丸を含め往時は櫓・倉庫や台所、それに狭義の本丸を中心に巨大な御殿の建物が薨を競っていた。

これらの建物は明治維新を経ると前時代の遺物となった。明治3年（1870）9月には知事細川護久が熊本城廃毀を願い出ている。また、10月4日には熊本城郭を墮廢すべき旨を藩内に諭告している。それは「熊本城ヲ廢毀シ、以テ臣民一心ノ徴ヲ致シ、且以テ無用ヲ省キ、実備ヲ尽サン」「一、二ノ丸、並、宮内御殿、取崩之事。一、御城御天守取崩、外廻り之門屏丈を残し可申事。」ということであった。この計画には天守を中心とする内部から取り崩し、外側の門や塀はそのまま使用する予定であったらしい。



写真2 数寄屋丸から大小天守を望む (1) (長崎大学附属図書館蔵)・(s-1)



写真3 数寄屋丸から大小天守を望む (2) (富重写真所蔵)・(s-3)



写真4 数寄屋丸から大小天守を望む(3)(富重写真所蔵)・(s-4)



写真5 数寄屋丸から大小天守を望む(4)(熊本博物館蔵)・(s-5)



写真6 宇土櫓望楼から大小天守を望む（富重写真所蔵）・（s-6）

その後、明治4年には数寄屋丸の外縁の数寄屋丸櫓門・長櫓・長櫓上三階櫓・数寄屋丸五階櫓・二階広間まで、連続した櫓が姿を消している。また、平左衛門丸でも台所と腰掛蔵が解き崩されている。この解体は、翌年7月に本妙寺境内に祀っていた加藤神社が遷宮してくるのでその境内とするためと考えられる。このような施設の追加・減少を知るためにも写真の比較による研究は有意義である。

このような場所であり、カメラと被写体との間の引きがなく、狭義の本丸内にカメラを置いて撮影した資料は知られていない。

その施設の比較として中心となるのが、南北に並んでそびえる大小天守の推移である。多くの資料は数寄屋丸長櫓上三階櫓の跡にカメラを据えて撮影している。この場所は曲輪の周縁の櫓台として一段高くなっているため、被写体の仰角を少なく出来る場所として選ばれたのであろうか。現在知られている同じ位置からのアングルでは写真2～5に示したものを含め6点存在する（s-1.2.3.4.5）。また写真の画像をスケッチした絵画資料（『従征日記』など）もあり、今後の増加も期待される。これらの資料には微細ではあるが相違点も指摘できる。『古写真に探る熊本城と城下町』ではその比較により、詳細な編年を組み立てている。

大小天守の写真では、下段の数寄屋丸から見上げたアングルのほかに宇土櫓の望楼から撮影した写真6が存在する（s-6）。その撮影位置は、標高60メートル程度で、大天守の丁度中程にあたる。連立する二天守は南北に位置するが、完全に直線ではなく、小天守の方がやや西にずれている。それでも側面のバランスをよく示してくれる。昭和35年（1960）に大小天守が外観復元されたが、その折この写真が大きな論拠とされた。外観復元で再建された城郭は各地に少なくないが、恐らくこのように正確な資料を用いた例はないだろう。この例などは、古写真が現在の城郭復元・整備に寄与する最大の利点と云えよう。

熊本城の本丸への入り口は西出丸で西面する石垣の中央部に西大手門があり、そこから東に直進すると空堀を陸橋で渡り、本丸に入った。陸橋を入ってすぐに枳形があり、頬当門と数寄屋丸櫓門で固めていた。本丸中心部の一角の平左衛門丸は、明治5年に加藤清正を祀る錦山神社の境内となる(写真2)。多くの参詣人で賑わった(写真7)。その後明治7年には神社ほかを城外に移し、軍用地となり九州を管轄する鎮台の本営が置かれたりしている(写真3・4)。旧頬当門そのものを撮影した資料は知られていないが、重要な地点であることには変わりなく、諸変化にともない装いを変えた姿を写真が記録している。西出丸から見た近景としては写真7・8、(s-7.8.9.46)があり、二ノ丸から本丸を望む写真に遠景として写り込んだものとして(s-22.23)がある。

写真の中に鳥居が写るものは平左衛門丸に錦山神社が鎮座していた時期のもので、鎮台の衛門があるのはそれ以降になるが、いま一つ細分と考察もできる。明治元年(1868)7月、藩主の弟である長岡護美の建議により肥後藩で加藤清正を祀ることになり、本妙寺の浄池廟を神式に改めた。しかし、廃仏毀釈の風潮の中で、寺院の中での祭祀が不都合に感じられ、熊本城内平左衛門丸に社殿を建立し、明治4年7月に遷座した。その時ついで茶店などが門前町を形成しているのが写真7で、5年頃の様子と推定している。熊本城が軍用地になり、熊本鎮台本営が本丸に置かれると、風紀上も多くの参詣人が不都合になった。そこで明治7年6月周辺の民家を城外に退去させ、月2回のみ参拝を許したが、同年9月には神社も京町の新堀に社地を求めて遷っている。それが写真2・3で明治8年の前半といえる。

(s-22.23)では、旧頬当門の位置よりやや奥と見られる場所に白ペンキ塗りの洋風の門と柵それに衛兵の哨舎が見える。(s-23)も(s-22)とよく似た風景であるが、次の点で異なる。



写真7 旧頬当門跡の錦山神社一の鳥居と門前町(長崎大学附属図書館提供)・(s-7)



写真8 門前町を退去させた後の錦山神社鳥居 (長崎大学附属図書館蔵)・(s-8)

1、(s-22)では、大天守の屋上に旗が掲揚されており、写真3・4・6(s-3.4.6)と共通する。(s-23)では旗が無く、写真5(s-5)と共通する。

2、(s-22)では2階以上の突上げ戸の損傷したものは撤去され写真5(s-5)と通じるが、1階だけには存在し写真4(s-4)に見られた特徴も若干だが残っている。(s-23)では全く写真5(s-5)と共通する。

3、(s-22.23)では、(s-19)には往時のまま残っていた西出丸西側の塀と石垣が、無残にも撤去されている。この工事は明治5年の実施と見られる。石垣撤去の跡は崖状をなして、断面に裏込めの礫があり、運び損ねたのか転々と築石材の大石が転がっている。通路以外の地表面には裏込めを含む排土を積んでいる。これに対し(s-23)では、旧石垣の背後まで削られている。画面中段には堡籃を並べ・シガラミを築いた防塁を構築して空堀岸掘削の土砂はこれに用いたものであろう。西南戦争の実質的な勝敗を決めたのは、熊本城の籠城戦であった。熊本鎮台が何時から籠城にかかったか確証に乏しいが、2月中旬から準備の記録が多出する。開戦(2月22日)以前に、最前線から離れた本丸の喉元にまで、これだけの防塁を施していたことが分かる貴重な一枚である。ちなみに、この写真から一週間以内の19日、天守や本丸御殿をはじめ本丸域の建物は灰燼に帰している。

5、大天守から記録した、江戸時代の景観

熊本城を対象とした写真の撮影が何時から開始されたのか、はっきりとした記録はないらしい。そこで城内の建物の推移などから編成した年表を基準をとすると、明治4年春頃らしい。それより若干遅れた初

夏の頃、熊本城では変わった方法で写真が撮影されている（s-10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17）。

それは大天守の最上階の望楼から、360度を連続撮影したものである。熊本城の大天守最上階（地上6階）から、東西南北の4方向を更に3分割して、全12枚の写真としている。連続写真として仕上げるのが目的であるためか、カメラを水平で回転させるため。各アングルのなかの足元の本丸中心部を含む状況が画角からそれている。ここでは各方向の主な資料のみ紹介する。

北方向（s-10. 11）では、手前に小天守の屋根があり両端に取り付けた鯨がよく観察出来る。この屋根の左下に大身の屋敷がそっくり写り込んでいる。ここは現在の監物台樹木園の敷地で、元は藩主の一門（分知二万五千石）である長岡刑部家の屋敷であった。屋敷の北には新堀門、埋門、新堀櫓2棟、新堀西櫓があり、京町から城内に通じる新堀口を固めていた。

西側は、現在の二ノ丸広場で、往時は家老や藩主一門など重臣の屋敷であった。西正面には広い更地があるが、そのうち手前が一門の沼田家（知行5千石）、その奥が筆頭家老松井家（八代城代・知行3万石）で、屋敷跡は痕跡もとどめていない。西北側（s-12）で敷地境の塀の大部分が撤去され、まばらに建物が位置するのが、解体中の藩校「時習館」である。「時習館」は明治3年7月に廃止され、10月から解体にかかっている。

南側の写真（s-14）では手前に西竹ノ丸五階櫓一帯の櫓群の北面が部分的に写る。城下から見上げた櫓とは印象が異なる。この櫓群の先には、藩主の邸宅である花畑邸の御殿の大きな屋根とその先に泉水を中心とした庭造りが広がっている。

城下の外郭に一带は樹木の蔭で生活のようすは明瞭でないが、切米取・扶持米取の下級武士の屋敷であった。場所によって鉄砲足軽・長柄者や相撲取など職能別に住み分けていて町名ともなっていた。流通の中心となった町人町は、北側の京町・坪井と南側の新町・古町にあったが、写真では明瞭に区分できない。どちらかと言えば、樹木が少ない部分が町屋にあたるようである。

6、最初の明治の息吹が芽生えた「古城」

二ノ丸の内に位置する古城地区は、熊本城の成立を述べるのには重要な地点になる。今回の紹介は城郭の成立を述べるものではないが、軽く触れておきたい。熊本は肥後国のほぼ中心に位置し、肥沃な生産力を持ち、東西―南北の交通の結節点でもある。そこで古くより政治・経済・軍事の要衝となっていた。このため騒乱の時代には争奪の地ともなった。その地に城塞が構えられ、「隈本城」とよばれた。その初出は南北朝時代の永和3年（南朝天授3年、西暦1377年）のことで、場所は不明である。次に室町時代の文明年間（1469-87）には肥後国守護菊池氏の代官として一族の出田氏が茶臼山の東端に千葉城を築いている。替わって大永・享禄の頃（1521～32）、鹿子木親員（寂心）が丘陵の南に張り出した尾根に城を移した。これが鹿子木氏・城氏・佐々氏から加藤家に引き継がれた隈本城で、加藤清正による新たな城郭の縄張りに取り込まれ「古城」と呼ばれた。天正15年（1587）、豊臣秀吉の九州平定のおりには、この城に3泊している。平定した肥後国を佐々成政に与えたが、間もなく国侍の反乱勃発し没落した。その後、天正16年（1588）、肥後国は加藤清正と小西行長に二分して与えられ、いよいよ熊本城と城下町の基礎を築いた清正の入国である。居城としたのが隈本城で、戦国豪族の城に増築整備が加えられ、19万石の大名の城となった。慶長5年（1600）関ヶ原の戦いの後、肥後一国領主となった清正は、茶臼山全体に縄張りした広大な城郭を築く。同12年に出来、「熊本」の文字を用い「熊本城」と称したと伝える。「隈本城」も新城に取り込まれ「古城」とよばれる。ちなみに時代によって呼称が異なるが、それは新たな城と区別するためで、機能している時には何れも「隈本城」である。

城下町に向けて大きく張り出し、高さの差も低い古城の一带は、明治維新後の新しい施設や組織が置か

れ、城内では最初に大きく変化した。それにとまなう記録写真（写真 9・10 など）も多い。地方にあつて文明開化の受容とその変遷を目の当たりにすることができる場所である。ここでは写真に記録された明治初期の古城の状況を述べてみたい。

明治 3 年（1870）7 月、熊本藩は二ノ丸の藩校時習館と二本木にあつた医学校の再春館を廃止した。これに替り、10 月には藩立の洋式病院「治療所」が古城南部に開院する（s-30. 31. 33）。図書や備品は全て再春館から引き継いだものであつた。これは医学校と病院を備えた施設で、12 月にはオランダ人のマンスフェルトを教師兼医師として招く契約を交わしている。明治 4 年 4 月、彼は長崎から船便で百貫港に上陸、100 名ほどの生徒に迎えられて治療所（後に古城医学校兼病院と改称）教師として着任、月給 500 円であつたという。以降ここで治療と若い医学生を指導にあたつた。この年の秋には熊本で最初の死体解剖も行つている。着任時、マンスフェルト邸（s-58）は既に完成してつたといひ、熊本初の洋館が古城地区に誕生した。この学校からは後の日本の医学会を支える北里柴三郎などの人物を輩出している。明治 7 年 5 月、マンスフェルトは任期を終え離熊し、同 8 年には廃止になつた。

医学校につづき、明治 4 年 8 月には同じく古城で、その北部に熊本洋学校が開校し（s-31. 42）、教師としてアメリカ人のジェーンズが迎えられた。彼はアメリカ陸軍の退役将校で、各教科を一人で教えた。それも全て英語だつた。彼にも洋風の邸宅が建てられ、それが県指定重要文化財となつている洋学校教師館ジェーンズ邸（2020 年現在、熊本地震で倒壊し復旧準備中）である。ジェーンズは明治 9 年 10 月、熊本を去り、学校も閉鎖された。



写真 9 古城医学校・治療所（病院）と古城入口（長崎大学附属図書館提供）・（s-30）

明治4年(1871)7月の廃藩置県で熊本県が生れ、花畑邸に置かれていた藩庁が熊本県庁となった。10月になると旧邸敷地が鎮西鎮台の屯営になり、県庁は二ノ丸の元家老有吉宅に移る。翌年6月、さらに飽田郡二本木村に移転し、白川県と改称した。

この県庁は町から離れ洪水の危険もあって不都合だったらしく、明治8年11月には古城の病院跡に引っ越し、同9年2月には県名も再び熊本県に復した。写真10は、門札に墨痕鮮やかな「熊本縣廳」の文字が見え、一帯もきれいに整備され県庁移転後の竣功写真かと推測される。さすれば、9年春の撮影であろう。

それでは4・5年夏の撮影と思われる写真9と比較し、施設の違いを探してみたい。そこには次のようなものが指摘できる。旧城内への入り口は堀に橋があり、奥の櫓形には門が存在した。両写真の間に、橋は架け替えられている。橋床が、写真9では中央に少し丸みがあるが、写真10では平になる。車輪を使った運搬具の出入りのためであろう。ちなみにこの橋は、西南戦争で鎮台が籠城にあたって撤去しており、戦跡写真には道板を渡した仮橋が写るものもある。

橋を渡った所に江戸期には「古城口須戸口」があった。写真9では屋根付門で、学校の出入口として武家屋敷から移築したと聞いたことがある。写真10はガラッと変わった白ペンキ塗りの洋風の柵と門になっている。これは鎮台本営だった旧花畑邸入口の門、およびそれが本丸に移転した後の大天守南下の門(写真3・4)と同形式である。加えて橋口の左右と門の貫の中央には、洒落たガス灯があり、城下の民にとっては文明開化の象徴のように見えたことだろう。両写真ともに門の右側に洋風の建造物が1棟存在する。これは病院に附属した調剤所(薬局)で、西南戦争前には解体されている。医学校・洋学校を囲む石垣には全く違いはない。しかし写真9では、門より左側の旧藪家(禄高3千石)の石垣上には、総体が白漆喰塗りで鉄砲狭間を備えた塀が廻る。右側では門と石垣との間を塞ぐように短く、上漆喰・下腰板の塀がある外には、治療所となった武家屋敷の石垣上にも塀はない。写真10になると藪家の旧態の塀は無くなり画角の中に見られる石垣上には全て白塗りの木柵がめぐっている。



写真10 熊本県庁正面(富重写真所蔵)・(ch-4-3-4-2 図)

7、1枚の古写真から情報を読む — 花岡山から熊本城を望む —

熊本城の中心部は茶臼山に築かれ、天守前における標高は約 50 メートルである。このため城郭の写真撮影するとなると、近景では仰角が大きくなり対象の曲輪の平面の部分は見えず、囲んだ石垣や土居と縁の櫓や塀だけが被写体となるのみである。そこで内部の状況を把握するようなアングルを求めるのは難しい。もしアングルの中に全体を収めるとなるとごく遠景の花岡山から撮影することとなる（写真 11）。この丘陵は金峰山を中心とする西山山彙から断層活動で切りはなされた標高 133 メートルの独立丘陵である。

花岡山の山頂に立つと、熊本城の内外を眼下にすることができる。そこで名城の唯一の欠点だと云う事もある。しかし、彼我の距離は約 2.5 キロメートルあり、城郭の機密事項を認めるのは少し無理であろう。ただ江戸時代から城の評価の中で、この山の存在を気にした記述もある。江戸中期の天明 3 年(1783)3 月に熊本を訪れた地理学者の古河古松軒は旅行記「西遊雑記」の中に次のように記している。

西のかたに小高き山有り、此山の頂より遠目がねなどを以て見る時は城内見すかす事もあらんか。予此山へ不行、遠見の推量なり。此二つの事なくば、城におひては海内におゐて雙ぶべき城有まじ。第一要害堅固にして大城なり。

この記述を読むと、古松軒自身は花岡山に登ったわけではないが、わざわざこのように書き留めていることは、熊本城の名城という評価とともに、日本中に知られていたのであろう。ちなみに明治 10 年(1877)の西南戦争では熊本城を攻める薩軍が、この山に四斤山砲を引きあげて、激しく城内を攻撃している。しかし、砲弾の 7~8 割は城域に達せず、途中で落ちたという。明治になって西欧式の大砲や砲術を用いてもこのような状態である。築城の頃は見透かされるリスクは皆無ではないが、それは精神的なものであったろう。

先ずその城郭を画像の中心に捉え、花岡山から撮影した資料の紹介から始めたい。西南戦争以前の熊本城と城下町を画角に収めた古写真は 2 枚知られている。それに西南戦争で籠城戦展開中を収めた同アングルの写真もある。これらと明治維新後の変遷とからめて述べるのも面白いが、長文になるので最も古く、あまり世に知られていない写真 11 を紹介する。それはマンスフェルトのアルバムに収録されている古写真である。横手の妙解寺と安国寺との間の道を登った、山の中腹から撮影している。その位置は大天守から見ると、ほぼ西南西の方向にあたる。

写っている景観は、カメラを水平に据えているため、上部は広い空となっている。下部の上段三分の一が城郭部分、中段が城下町、下段が城下町外の横手村になる。

上段の城郭になる範囲は、南が花畑邸の北面まで、北は方向としては城郭全体にあたり、古京町までを含むと考えられるが、二ノ丸西部の樹木に遮られ見ることはできない。画面の左端は、大天守から見てほぼ真西にあたる藤崎台まで見え、段山は写角外になる。以下、城郭内で認められる場所や施設の概略を紹介したい。

上段ほぼ中央の最高部に位置するのが大天守で、背景の立田山の山肌と重なって分りにくいが、その左に小天守がある。一段低い位置が平左衛門丸で、その左隅が宇土櫓であるが、樹木の陰なのか曲輪内の他の施設を含めて認識できない。天守の位置から一段下が西出丸で、未申三階櫓とそれから北に延びた塀が見える。以下、大天守から右側へ順に述べる。大天守の右下の曲輪が数寄屋丸で、数寄屋丸五階櫓があり右に二階広間の大屋敷が延びる。その右端の上の黒い塊が見えるのが大イチョウである。その右横に分りにくいが本丸御殿の大屋根がある。二階広間や本丸御殿の右下の曲輪が飯田丸で、右半分の近くに今も健在な大樟が茂る。その枝葉を背にして高石垣の上に聳えるのは飯田丸五階櫓、その右下奥で樹木の中に西竹ノ丸五階櫓があるが、櫓台石垣と下層の屋根が木に隠れているらしく、小さく見える。その右下は東竹ノ丸になり、独立した一棟の平櫓は元硫黄櫓と思われる。この櫓の背後は本丸上段月見櫓の石垣下辺りで



写真 11 花岡山から熊本城を望む（長崎大学附属図書館提供）

あるが、相当に木が茂っているようだ。現在重要文化財に指定されている田子櫓から源之進櫓まで東竹ノ丸南部の5基の櫓が存在しているはずであるが見えない。飯田丸と東竹ノ丸の南辺の右下部には竹ノ丸から桜馬場まで、広範囲に黒い樹影が蔽っている。その右側の白漆喰壁は花畑邸の北境になり、間の坪井川は認められない。

次に写真左の天守より北側を見てみたい。大小天守の下は平左衛門丸にあたる。その一段下が西出丸の南部の旧奉行所である。元太鼓櫓や西大手門は木の陰で見えない。

未申三階櫓から北に延びる奉行所の塀の西で、空堀の対面から北に広がるのが広義の二ノ丸の中心である二ノ丸と云える上段の部分で、現在は二ノ丸広場となっている。往時は藩主の一門や重臣の屋敷地で、宝暦5年（1755）にはその一角に藩校「時習館」も設立されている。画面では、残念ながらその大部分は南縁の樹木に隠れて見ることができない。しかし、樹列の右端で微かに、西大手門の前辺りが見えている。そこに写っているのは屋敷ではなく、ただの平らな広場である。この景色は、二ノ丸から西出丸越しに三天守が並ぶ本丸方向を写した3枚の連続写真（s-18.19.20）と同じである。これは明治4年7月に、錦山神社が城内の平左衛門丸に遷座する直前の撮影と考えられている。これは本写真の推定年代とも矛盾しない。

熊本城が築城された旧茶臼山の地形は、東西に長く、そのうち東部が幅広くて高くなり、西部が狭くて低くなる卵形をなしている。その内、崖に囲まれていた東部では高石垣を築き上げ、深い空堀で区画して本丸城を形成している。これに対して西部では南北両側の天然の崖と斜面を生かして要害としていた。築城後270年余、明治初期の写真を見ると、本丸の曲輪内でも樹木が結構大きくなったのがある。石垣が少

ない二ノ丸域ではなおさらに、斜面に多数の樹木があり、それが経年により大木となっていて、城外から内部は見えにくい。中でも藤崎宮境内の周りの大樟群は、城域の西端を覆っていた。今回紹介している本写真も、二ノ丸上段の南斜面から左端の藤崎台まで内部の状況はほとんど望めない。そんな中で背後に大きな樹木群があって、一朵の建造物群が存在する。その場所は、先程の樹列が切れた部分から上段の広場が見えた部分の左下で、現在の国立病院敷地にあたる。じつは横長の一群に見えたこの建物は、写真の縦方向に二ノ丸を東西に通貫する道路があり、右側が二ノ丸の一部で、左側は古城に属していた。

二ノ丸の右側の屋敷は、藩の世襲三家老の一家である有吉家の屋敷であった。この有吉家は禄1万5千石、代々、頼母・大蔵・将監などと称した。明治4年(1871)12月には県庁を置いた旧花畑邸を鎮西鎮台の本営とするため二ノ丸の権大参事有吉立愛宅に移したのがここである。屋敷地の南東隅(写真では建物の右側)には二階櫓があり、有吉南二階櫓と呼ばれた。写真ではそれらしいものもあるが、褪色斑と被っていて判然としない。『新熊本市史絵図・地図編』所収の「二ノ丸絵図」では、No.24の天明年前後(1781前後)とされるものまで、南西隅に「有吉坤隅櫓」が見えるが、それ以降解体されたらしい。当然写真にも存在しない。

道路の西側は古城の内で、藩の筆頭家老で八代城代も務めた松井家の下屋敷であった。本邸はこの上段、現在の二ノ丸駐車場一帯である。上段とは空堀で隔てられてはいるが、南西に張り出した高地であった。そこで西山の金峰山山麓から南方熊本平野部にかけての眺望にすぐれ、「一日亭」と呼ばれる瀟洒な別邸が建てられていた。八代の松井文庫には、「一日亭春秋真景屏風」という、庭と建物を描いた屏風が伝えられている。病院付属の看護学校の建て替えにともない平成14-15年に発掘調査が行われ、中世から近世・近代まで各種の遺構を検出している(熊本県教育委員会 2012)。遺構の発見によりその面の上に盛土して遺跡を保護し、現在の建物が造ってある。この一日亭は明治になり京町に移築され料亭となった。建物群のうち、左上の口を開けたように見える大きな二階屋がそれで、周りにはよく刈り込んだ松が植えてあった。

写真中央からその右手にかけての部分が、二ノ丸から南に派生した尾根を堀切で分離して城郭とした中世城の「隈本城」の位置である。天正16年(1588)、肥後半国領主として加藤清正が入城、19万5千石の大名の城に相応しく増築・改造された。それは清正が一国領主として築いた「熊本城」の中に取り込まれ「古城」と呼ばれた。天守や御殿など主要な建造物は新城に移築されたらしくその場所さえ不明である。しかし、野面石を多用した勾配が緩く反りのない石垣や幅広の水堀などは、隈本城時代の面影を留めている。現況は、ほぼ全域が熊本県立第一高校の敷地となっている。

曲輪内は旧尾根線の傾斜により三段に分かれ、南から北へ高くなる。中・下段では中央に南北の通路があり東西に二分される。江戸時代末期の屋敷の住人は、北の高台が禄1千800石の続家、中段西側は禄5千石の三淵家、同東側は禄1千石中根家、下段西側は禄1千石の藪家、同東側は禄4千石の松井家であった。以下、写真の中の場所の呼称はこの屋敷名による。画像のほぼ中央から右端にかけての部分が、古城地区にあたる。

北部の続家は、画面では西出丸の申末三階櫓の手前に位置する高台にあたる。しかし、上部には樹木が茂っており、屋敷内の家屋と見られるものは認め得ない。ここは第一高校の施設建設などにもない、熊本県教育委員会により数回にわたり発掘調査されている。その結果は、17世紀後半から18世紀前半に建造されたとされる幅8メートル・長さ27メートルもある掘立柱建物遺構が検出されている。写真撮影前170年程度の建物で、残っていれば見えると思われる位置であるが認められない。

中段と下段は、城外との高低差は少ないが、東西方向の三本と西側に幅の広い水堀を「E」字状に配し、東を坪井川が流れて防備を固めていた。中段の三淵屋敷には、北西隅と南西隅の二ヶ所に平櫓が存在した。『総括報告書』歴史資料編所収の史料には「三淵永次郎預櫓二軒」とある。写真で見ると南側の石垣の上に白漆喰の塀が長く延びているのがわかる。その左端が南西隅で、平櫓があり塀はこれから北にも続く。

途中で樹木の陰になり、北西隅の櫓は見えない。堀内側の屋敷の様子は、無いのか見えないのかも分らない。ここは後に熊本洋学校敷地となり、南西隅櫓の位置には教室が建てられる。この画面には旧状のまま櫓が位置する。

中段東側が中根家の屋敷であった。写真を見ると、寺院の本堂かと思われるような大きい屋根をもつ平屋建物がある。その左側で、同じ敷地と見られる場所には切妻や入母屋の建物もあり、配置がどうなっているのか分かりにくい。大規模な建物は、その位置からして古城医学校教師マンスフェルトの官舎と分るが、完成しているのか工事中なのかは定かでない。マンスフェルト邸は彼が赴任した明治4年4月には既に完成していた。山崎正董著『肥後醫育史』には「四年四月二十日寺倉に案内せられ、マンスフェルトのために特に雇ひたる俗事通辯西直方随従して、長崎より海路百貫石に來り、關係當事者に迎へられ、高橋街に出迎へたる百名内外の生徒と共に熊本に着任した」とある。同じ旧屋敷の北側には熊本洋学校教師ジェーンズの二階建ての官舎が造られるが、この写真にはまだない。その完成はジェーンズ赴任の2ヵ月後の10月であった。

画面に見る下段は、三淵邸の南側堀の中程の下から右端まで、撮影地に近付いた分だけ広く見える。西側の藪邸内には3基の櫓があり、史料では「藪弥次右衛門預櫓三軒」とある。その場所は南西隅・北西隅および北側の堀に面した3ヵ所であった。以下、直接写真に写った情報とは関係ないが、細川氏入国後の寛永11年(1634)の絵図では北西隅に平櫓が、南西隅に二階櫓に描いてある(s-絵図・地図編4「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」)。建築は加藤時代であろう。その後、長い間この2基の櫓が見られるが、江戸後期になると二階櫓が平櫓になり、さらに北側の堀際に平櫓が追加されるという変化がある。写真では、北西隅櫓が樹木の陰になり、南西隅櫓は白い斑点と重なり、明瞭ではない。北西隅櫓は西側の堀越しに古城を撮影した資料に洋学校の教室とともに見られるが、その後明治5-6年頃には解体されたらしく、跡には白壁の土蔵が建っている。南側の藪邸の石垣上には、白の堀が続く。これは南部の堀越しに撮影した写真9(s-30)に近景として見える。全体が白漆喰の堀に鉄砲狭間が並ぶ変わった形式である。屋敷地内には棟が、背後の石垣上に建つマンスフェルト邸の軒先近くにもなる、大きな建物のほか数軒が認められる。その配置などまでは確認できない。この部分は医学校となる場所で、その施設との関係も分らない。後に附属病院(治療所)となる、通路越しの松井邸と見られる部分には、数棟の家屋が存在するが、詳しくは不明である。

遠景ではあるが、熊本城の全体を一眸にする花岡山中腹から撮影した一葉の写真について、城内の被写体の同定を中心に紹介してきた。全体に褪色があり、左下四半分は黒く変色しており、点々と白色斑もあり、観察しづらい部分もあった。しかし、数ある熊本城の古写真の中で最も状況が揃った写真であり、甚だ貴重な資料といえる。

8、古写真による歴史の考証

この古写真から読むことができる歴史を少し考えてみたい。ただ古写真の通例として、付帯情報はごく少ない。展示会図録(『マンスフェルトが見た長崎・熊本—古写真で見る近代医学校の成立—』)に付録として収められた目録「マンスフェルトアルバム全収録写真」に次の内容が記されている。写真画像、通番号(アルバム原本での掲載順)、英文タイトル(原本オランダ語タイトルの英語訳)、日本語訳(英語タイトルの日本語訳)、撮影年代(撮影された時期の推定)、撮影者(推定)、写真サイズ、掲載ページ(本書での掲載ページ)。

花岡山から撮影した本写真では次のように記載されている。025 Different views of the castle at Kumamoto 熊本城の景色(5) 1871年頃 マンスフェルトか 150mm×130mm中(本文掲載なし)。

同じタイトルの写真が12枚あり、張り込み順に番号が付けられている。

資料写真のタイトルについては、目録に収録してある「アルバムのページ例」の画面に微かに窺える。ルーペで見ると、添付した写真の下にペン書きにしてある。目録凡例からすると、これがオランダ語で、図録では英訳して掲載しているのであろう。和訳「熊本城の景色」とした写真は、撮影地点が城内、城下、城下外を問わず天守や本丸を望んだアングルの写真に付けられている。撮影年は「1871年頃」、撮影者は「マンスフェルトか」とある。それではこの写真の熊本の歴史上の位置づけるために、誰が・何を・何処で・如何したかを探ってみよう。

まず特別に事件や事変に関するものでは無さそうなので、何時は撮影した時になろう。特に写真の附帯情報として文字での記録が無く、画像の中から見出さなければならない。一番に目に入るのは熊本城に天守が望めることで、これは明治10年2月19日には焼失しており、それより降ることはない。次は状況証拠であるが、収集者マンスフェルトの熊本在任期間である。彼は明治4年4月20日に着任し、7年6月17日に熊本を出立している（『肥後醫育史』）、収集物であるから着任前の資料を入手の可能性もあり、若干含みを持たせたい。本丸域で最初に曲輪周縁の櫓が撤去される数寄屋丸にはまだ櫓が揃っている。同じく櫓が存在するものに、(s-24.36)などがあるが数は少ない。本丸古写真I期（『古写真に探る熊本城と城下町』所収の編年表）にあたりと見られる。花岡山からの写真で最も注目されるのが、古城にマンスフェルト邸は存在するが、まだジェーンズ邸を見ない事である。マンスフェルトが着任した時、既に邸は竣工していた（『肥後醫育史』）という。ジェーンズが着いた8月15日、邸は未完成で、仮邸で2ヶ月余を過ごしたという（『日本ニ於ケル大尉ヂェンス氏』）。そこで撮影の時期は、明治4年4月下旬から10月の間と想像できる。ただ大きい家であるから建て前以降なら姿が見える位置であり、下限は7-8月頃となろう。そこでマンスフェルトアルバムの花岡山から熊本城と城下町を望んだ写真の撮影年代が推定できた。同アルバムには数寄屋丸五階櫓がなく明らかに新しいもの(s-32.33)も含んでおり、全体の詳しい考証も必要である。

次にこれらの写真を誰が撮影したのであろうか。附録のリストでは、熊本関係53カットの内52を「マンスフェルトか」とし、医学校生徒と名前不詳家族の記念写真だけが記入が無い。長崎関係も多くの風景は「マンスフェルトか」とし、幾つかの家族写真に上野彦馬とある。

展示会図録の巻末に収められた姫野順一氏の「写真から判明する長崎のマンスフェルト」の中で、撮影の事情について解説されている。一部を引用する。

マンスフェルトは1866年7月長崎に着任し、1871年6月15日に熊本に転任するまでの約5年間出島に住み、小島の医学校で医学教育に従事した。長崎時代にカメラを入手したようであり、残されたアルバムには長崎、熊本および大阪、京都の写真が残されている。多くは自分で撮影したものであるが、なかには上野彦馬はじめ、京都や横浜の資料行写真家から購入した写真も含まれている。

中略

長崎の風景を撮影したものうちNo. 007, 009, 011, 024の鶏卵紙は小版（概ね80×30mm）である。マンスフェルトが市内散策中に自分のカメラで撮影したものと考えておきたい。（以下略）

幕末から明治初期にかけて写真術を受容した日本では文化芸術の世界ではなく、科学技術・化学応用の分野に属した。写真術の開祖の一人とされる上野彦馬も医学伝習所で舎密学（化学）を学んだことから写真の世界に入っている。当時は薬品を調合し感光液も作った。また湿板写真の時代であり、撮影直前に感光液をガラス板に塗布した。撮影後は原板が湿ったうちに現像・定着を行なった。写真館のポートレートならともかく、屋外写真の撮影には携帯暗室が必要で、散歩の途中で気軽に写せるものではなかった。上野が西南戦争の戦跡を撮影した時には、助手2人・作業員8人を従えて廻っている。こんな時代であるから、マンスフェルトのアルバムだから、彼の撮影だとするのは疑問である。地元の写真師である富重利平が開

業しており、彼の可能性もある。しかし、現在まで続きガラス原板やオリジナルプリントを数多く遺す写真館にマンスフェルトやそれに類するアルバムに収める写真は現存しない。そこで現段階では撮影者については不詳としておきたい。

それでは、これらの写真が何のために撮影されたかを考えてみたい。このマンスフェルトアルバムには、地域的に見ても長崎・熊本および京都・東京を含んでいる。熊本だけを時期的に見ても、明らかに一時の撮影では無いものがある。そこでマンスフェルトが故郷に記念として持ち帰ったということでは一括の意味をもつ。また熊本に限定して考えると、全て彼の赴任中のもので、非常に貴重な資料と云える。中でも花岡山からのものと一連と見られる、郊外から城郭と屋敷地を広く写した資料5点はこれまでは知られていなかったもので一括の可能性もある。これらの写真が撮影されたのは、城内に錦山神社が鎮座する以前の本丸撮影編年のI期に属する（『古写真に探る熊本城と城下町』所収の編年表）。その頃の熊本城と城下町について、写真に関連しそうな出来事を年表にしてみた。

明治3年（西暦1870年）

- 07.09 熊本藩は時習館・郷学校・洋学所・再春館を廃止
- 07.18 藩庁を二の丸より花畑邸内に移す
- 08. 古城の松井邸を病院とする事に決定
- 08.19 藩立病院設立の為、寺倉秋堤・内藤泰吉に用懸の辞令を出す
- 09.05 熊本城廃棄案がでる
- 10.04 藩庁は、熊本城廃棄の旨を藩内に諭告
- 10.06 藩立の洋式病院「治療所」が開院する
- 10. 熊本城内を一般に開放する（御城拝見）
- 閏10.09 薬園内に舎密所を創設して、化学製薬等を研究させる

明治4年（1871）

- 03.10 時習館を解き崩して兵式操練場とする旨の伝達
- 04.20 マンスフェルトが治療所教師として赴任
- 07.04 古城治療所が官立の古城医学校兼病院と改称する
- 07.07 加藤清正の神霊是日牧崎発、城内の錦山神社に遷る
- 07.14 廃藩置県の詔、肥後藩は熊本県、花畑邸の藩庁が熊本県庁になる
廃藩置県により医学校及び病院は一躍国立となり医学校兼病院となる
- 07. 東京・大阪・鎮西・東北に鎮台、鎮西鎮台は熊本に置き、兵部大丞井田讓台務を処理する
- 08.15 ジェーンズが熊本に赴任する
- 09.01 熊本洋学校が授業を開始する
- 10.22 熊本県庁を鎮西鎮台の屯営とし 県庁を二の丸の有吉立愛宅に移す
- 11.14 県の編成替え、熊本県と八代県が置かれる
- 12.14. 細川家は花畑邸を献上し、一時二の丸を御内家とする
- 12.24 鎮西鎮台19個小隊編成完結、鎮台本営11小隊、第一分営（広島）4小隊、第二分営（鹿児島）4小隊
- 12. 鎮西鎮台病院が設置される

明治5年（1872）

- 01.20 熊本城を鎮台に引き渡すにより、藩の書類を細川家に交付
- 03.10 鎮台兵隊屯所にて、出寝・正午・入寝、三次の号炮を發

- 03. 24 鎮西鎮台・井田讓が秘史局長に転じ、桐野利秋が鎮台司令長官
- 04. 鎮西鎮台より本省へ送達文書中に「当城并鎮台兵営写真、八枚」
- 06. 13 県庁を飽田郡二本樹に移す
- 06. 14 熊本県を白川県と改称する
- 06. 17～20 明治天皇西国巡幸で熊本行幸
- 06. 19 天皇は医学校・洋学校で試業を御覧、旧熊本城内を御巡覧、天守上に小憩

以上、明治3年後半から5年前半までを拾った。

肥後の維新は明治3年に來たと徳富蘆花は書いている。同年5月、藩知事に就任した細川護久は改革派の実学党を登用し藩政改革に舵をきった。それは各分野に及び、新国家による廢藩置縣なども相まって、大きく価値観を変革する政策を実施した。それは大幅な減税から地方の行政・教育にまでおよび、明治4年になると次々と実施された。旧来の高等教育機関である藩校の時習館と医学校の再春館は廢校になり、新たに外国人教師を招いて古城医学校と熊本洋学校が、熊本城の一角の古城に開校している。そこには両教師の公館として熊本初の洋風建物が建てられ、突然文明開化が具現した感があったろう。また4年7月には、本妙寺の淨池廟を神式にして祭祀していたものを、廢仏毀釈の風潮のなかで、城内平左衛門丸に遷した。その写真を見ると立派な神殿で、附近には参詣人を相手にする割烹の類が門前町をなしている。また同年には、西日本を統括する鎮西鎮台（後熊本鎮台と改称）が置かれ、旧藩主の花畑邸を屯營とした。後に続く軍都熊本の始まりである。当時の軍隊は日本で最も新しい考え方と装備を有する集団であった。彼らの中には、洋式の軍服を身にまとい、晴れやかに写真におさまったものも多かったろう。撮影には公的な需要もあったであろうが、経済的に明治初期の熊本における写真を支えたのは彼らだったろうと思われる。

そのような歴史の一齣を切り取った1枚の写真を読み解いてみた。画像の中に写し込まれた世界には、まだまだ興味が尽きないものがある。

「参考・引用文献」（出版年代順）

古河古松軒『西遊雜記』天明3年3月

『日本庶民生活史料集成』三一書房刊、1969

徳富蘆花『竹崎順子』福永書店、1923

山崎正董『肥後醫育史』鎮西醫海時報社、1929

小沢健志編『幕末写真の時代』筑摩書房、1994

荒木精之編著『写真の先駆者富重利平作品集』1977

『熊本城 模型製作の記録』熊本市、1981

『熊本城文献調査報告書』熊本市教育委員会、1982

『写真集熊本100年』熊本日日新聞、1985

『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市、1990

富田紘一『古写真に探る熊本城と城下町』1993、「増補改訂版」1999

鈴木喬・北野隆・富田紘一『熊本城』歴史群像名城シリーズ②、学習研究社、1994

『富重写真所資料調査報告書』熊本県文化財調査報告183集、熊本県教育委員会、1999

富田紘一「熊本城と城下町の変遷を古写真に探る」『シンポジウム画像資料の考古学』

國學院大學學術フロンティア実行委員会、2000

鈴木喬監修『明治で見る熊本城の100年』郷土出版社、2000

- 富田紘一「写真師富重利平の名作」『古写真で見る失われた城』世界文化社、2000
- 富田紘一『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会、2008
- 富田紘一監修『定本 熊本城』郷土出版社、2008
- 姫野順一ほか『マンスフェルトが見た長崎・熊本』長崎大学附属図書館企画・編集、長崎文献社、2012
- 『熊本城跡遺跡群古城上段』熊本県文化財調査報告 269 集、熊本県教育委員会、2012
- 吉丸良治編著『花畑屋敷四百年と参勤交代』熊日出版、2018
- 『特別史跡熊本城跡総括報告書 歴史資料編』熊本市、2019
- 島充『熊本城超絶再現記』新紀元社、2019
- 『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編』熊本市、2020

3. 熊本城跡におけるこれまでの整備方針・構想・計画等について—千葉城地区を中心に—

美濃口 紀子

はじめに（本稿の主旨）

熊本城跡ではこれまでに様々な整備を実施してきた。このうち平成 27 年度までに完了した整備工事等については『特別史跡熊本城跡総括報告書 整備事業編』^{註1}に詳しく掲載している。その刊行直後、平成 28 年 4 月に熊本城は熊本地震で被災した。そのため平成 28 年 12 月に「熊本城復旧基本方針」、平成 30 年 3 月に『熊本城復旧基本計画』^{註2}を策定し約 20 年にわたる復旧工事に着手、現在 3 年目である。

一方では平成 30 年 3 月に『特別史跡熊本城跡保存活用計画』^{註3}を策定した。これは昭和 57 年度の『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』^{註4}を全面改訂したもので、「特別史跡の指定範囲を旧城域まで拡大することに努める」（第 4 章 保存管理、第 9 節 追加指定）などの方針を示している。こうした方針に基づき、熊本地震後の平成 30 年 10 月に桜馬場地区と高麗門跡・御成道跡の追加指定（約 1,902 m²）、さらに平成 31 年 1 月に『熊本城跡千葉城地区（J T跡地、NHK跡地）保存活用基本構想』^{註5}を策定し、令和元年 10 月に J T跡地（約 5,646 m²）、NHK跡地（約 11,785 m²）も追加指定し、現在の指定地面積は 577,891 m²となっている。こうした指定範囲の拡大には飛び地も含んでおり、一般市民に対して特別史跡の範囲や内容を周知するためにも城内各所における標柱・解説板設置などの整備が急務となっている。

このように地震発生後の直近 4 年間だけでも、特別史跡熊本城跡を取り巻く状況は大きく一変した。これから長く続く城内各所での復旧工事は「地震前の状態に戻す」のが原則であるが、実際には復旧工事の施工に際して、その周辺も含めて部分的な史跡整備を伴うことが多い。その施工方法（色・デザイン等を含む）を具体的に協議する度に、保存活用計画に記載された史跡内のゾーニングや地区ごとの役割に基づき、望ましい史跡整備のあり方や本質的価値の保存といった重要な課題について議論することになる。

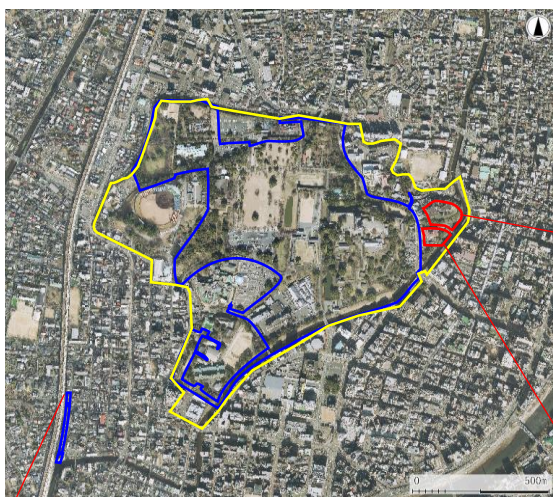


図1 特別史跡熊本城跡の範囲（青+赤）



図3 千葉城地区：NHK跡地（南から）平成30年11月



図2 高麗門地区整備状況（東・西から）令和2年3月



図4 千葉城地区：JT跡地（東から）平成30年11月

熊本城においては過去にも度々、地区ごとの構想・計画が策定され、様々な提言がなされてきた。これらは策定した時期が古いために、現代の諸事情（例えば熊本地震による被災・復旧工事・立入規制、城周辺の関連施設や公共交通の状況変化など）とは相容れない内容も一部含んではいるが、中には現在の我々と全く同じ問題に悩みながら解決策を模索・提示した事例もみられる。「特別史跡熊本城跡」を今日までどのように捉えて保存してきたのか、あるいは整備・活用してきたのか、その後何が実現し、何が実現していないのか、それぞれの原因や問題点は何だったのかなど、過去の記録から現状に至る経緯を辿る作業は、今後の望ましい史跡整備や長期的な視野に立って熊本城を未来へ引き継いで行くためにも、必要不可欠なものとする。

本稿ではまず、これまでに策定された熊本城の整備方針・構想・計画などを年次順にまとめる（建築工事など個別の基本設計・実施設計等は除く）。これら過去に定めた方針・構想・計画等は、当然ながら「特別史跡熊本城跡」の管理団体である熊本市（及び担当課）が策定したものが最も多く、このうち近年の刊行物についてはインターネット上でも全文をPDFデータで公開している。一方で古い時期の冊子は現在では入手困難であるが、前述の『整備事業編』「第2章 整備事業の概要」に過去の方針・構想・計画や委員会組織等についてまとめており、インターネット上でも公開している（但し文字情報のみの掲載で図版等の転載はない）。本稿では、熊本城総合事務所・熊本城調査研究センターにとって当面の課題となっている「NHK跡地（千葉城地区）」を主として、過去に策定された整備方針・構想・計画などをあらためて振り返り、留意すべき図版等は一部転載して紹介しながら、今後の千葉城地区の史跡整備の参考としたい。

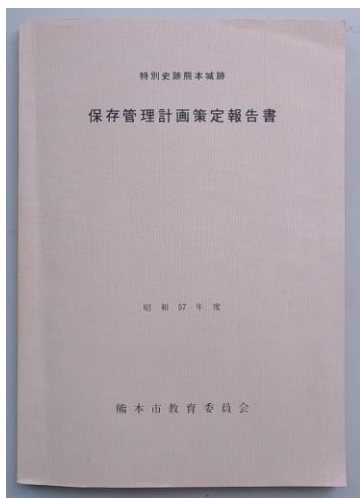


図5 熊本城保存管理計画^{註6}

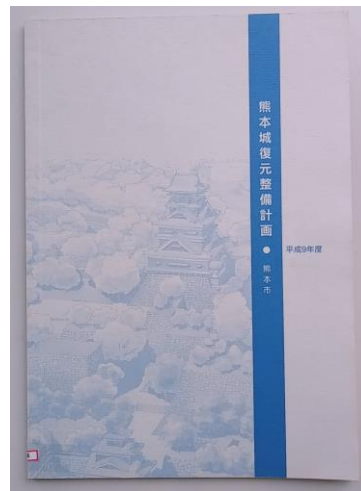


図6 熊本城復元整備計画^{註7}

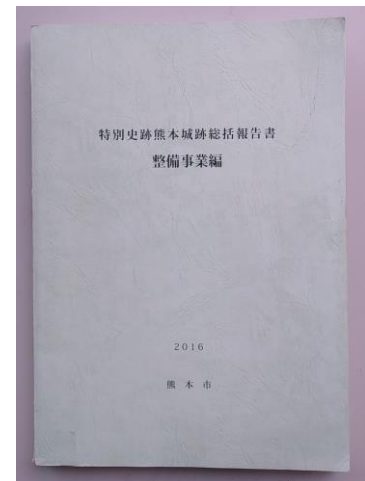


図7 総括報告書整備事業編^{註8}

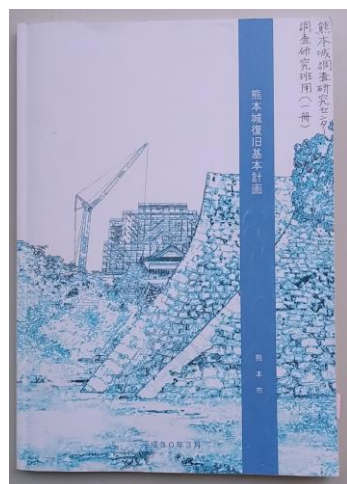


図8 熊本城復旧基本計画^{註9}



図9 特別史跡熊本城跡保存活用計画^{註10}

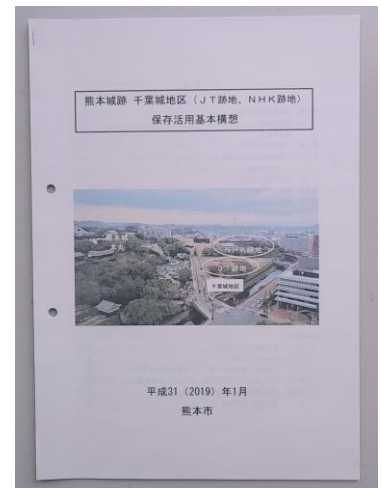


図10 熊本城跡千葉城地区 (JT跡地、NHK跡地) 保存活用基本構想^{註11}

1 戦後にまとめられた熊本城の整備方針・構想・計画など

戦後、熊本城は昭和 24 年から 5 ヶ年計画で公園化された。同 25 年に文化財保護法が制定されて熊本城跡は史跡となり、同 26 年に管理者が熊本市へ移管し（財団法人熊本城址保存会の管理者指定解除）、同 28 年から 5 ヶ年計画で重要文化財の保存修理工事を実施、同 30 年の特別史跡指定を経て熊本城は本格的に史跡として整備される時代を迎える。この時期、一般に最も注目されるのは昭和 35 年（1960）の天守再建だが、これも含めた 7 ヶ年の整備事業として策定された「熊本城公園計画」が、整備計画の初出である。戦後にまとめられた熊本城の整備方針・構想・計画などについて、年次順に一覧で示す（表 1）。

表 1 戦後にまとめられた熊本城の主な整備方針・構想・計画等（工事の基本設計・実施設計等は除く）

	名称	年・月	策定者
1	熊本市熊本城緑地設計説明書	昭和 34 年 9 月	
2	熊本城公園計画説明書	昭和 35 年 3 月	
3	熊本城公園計画（7 ヶ年の整備事業）	昭和 42 年 3 月	熊本大学工学部黒田正己教授
4	熊本城整備に関する報告書	昭和 49 年 10 月	熊本城整備研究会
5	熊本城整備に関する報告書－Ⅱ（三の丸地域の整備）	昭和 54 年 11 月	熊本城整備研究会
6	熊本城三の丸整備今後の研究について（中間報告）	昭和 57 年 3 月	
7	特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書	昭和 57 年度	熊本市教育委員会
8	熊本城三の丸整備に関する中間答申書	昭和 60 年 3 月	
9	フィールド・ミュージアム熊本城	平成元年度	（財）熊本開発研究センター
10	歴史廻廊都市くまもとーフィールドミュージアム熊本城下町の提案ー（熊本城周辺シンボルネットワーク、シンボルスポット整備計画）	平成元年度	熊本市都市計画課
11	熊本城の総合整備計画について	平成 4 年 7 月	熊本城総合整備計画委員会
12	熊本城復元整備計画	平成 9 年度	熊本市企画調整課
13	熊本城跡史跡拡大計画	平成 15 年度	熊本市教育委員会
14	熊本城利活用プランについて 答申	平成 15 年 12 月	熊本城利活用検討委員会
15	熊本城利活用プラン	平成 16 年 2 月	
16	桜馬場整備計画	平成 20 年	熊本市
17	熊本城復旧基本方針	平成 28 年 12 月	熊本市
18	熊本城復旧基本計画	平成 30 年 3 月	熊本市
19	特別史跡熊本城跡保存活用計画	平成 30 年 3 月	熊本市
20	熊本城跡千葉城地区（JT 跡地、NHK 跡地）保存活用基本構想	平成 31 年 1 月	熊本市

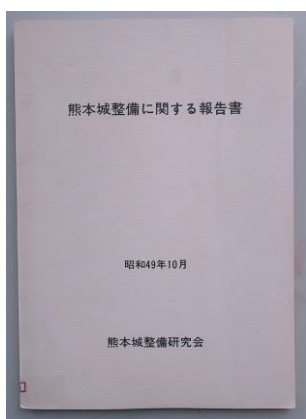


図 11 整備に関する報告書^{註 12}



図 12 フィールドミュージアム^{註 13}



図 13 歴史廻廊くまもと^{註 14}

なお上記一覧のうち現行（最新）の計画は、まず保存活用に関するものが『特別史跡熊本城跡保存活用計画』（H30.3）^{註 15}で、「上位計画」にあたる。一方で整備計画については、熊本市や民間で多数策定されていたものを、『熊本城復元整備計画』（H9）^{註 16}によって 1 つに集約した、という形になっている（図 14）。

これまでの熊本城復元整備計画の経緯

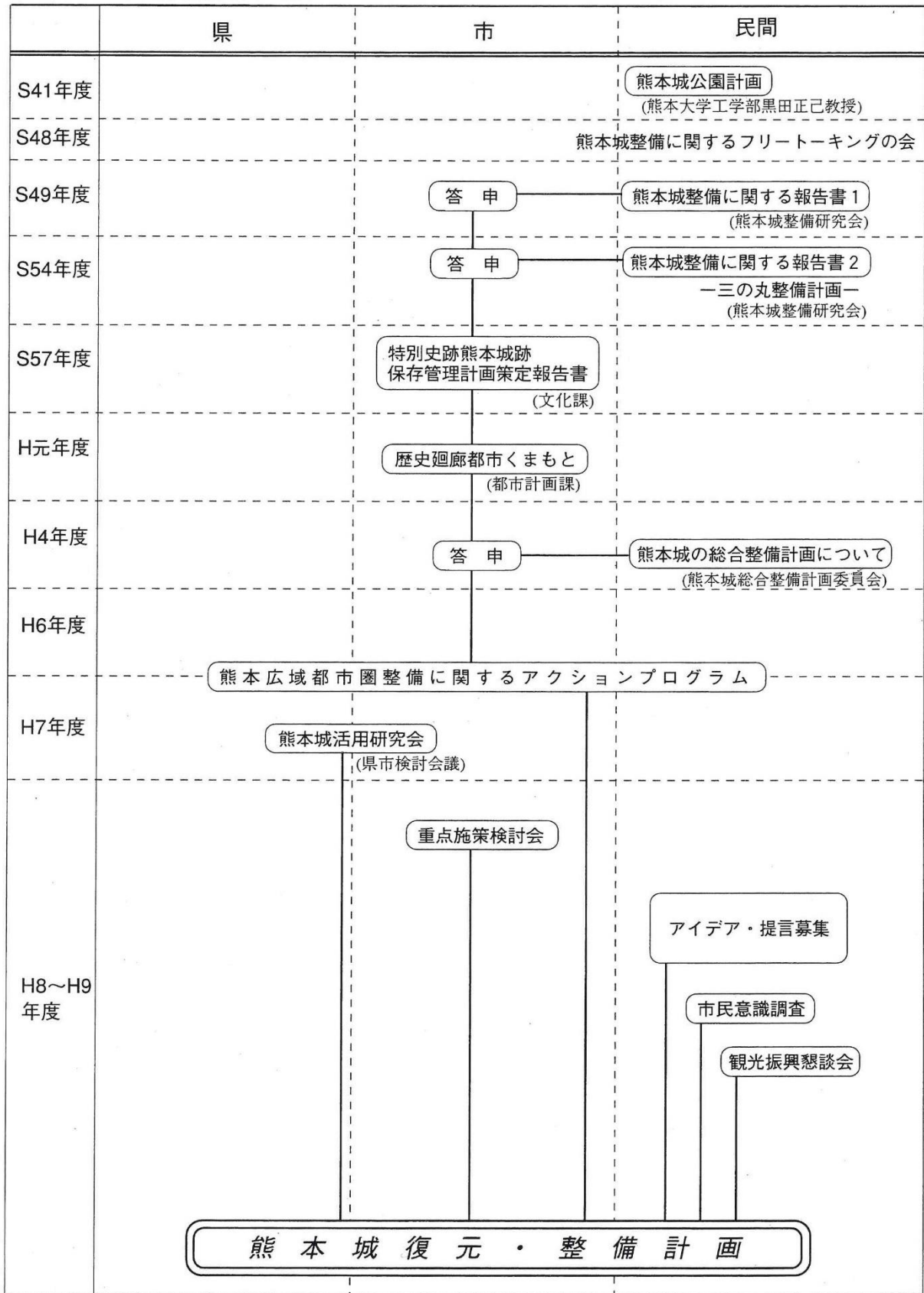


図 14 「これまでの熊本城復元整備計画の経緯」『熊本城復元整備計画』(H9) 註¹⁷より

* 但し「熊本城の復元整備」については、その後「平成 28 年熊本地震」が発生したため、復旧期間中の約 20 年間（2038 年度以降まで）は復元整備事業を休止して、『熊本城復旧基本計画』に基づいて復旧工事を実施中である。

2 上位計画の新旧比較 —特別史跡熊本城跡の『保存管理計画策定報告書』と『保存活用計画』—

熊本城の各種計画の中でかつて「上位計画」と位置付けられてきたのは、昭和 58 年の『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』^{註18}であった。その後、平成 30 年 3 月以降はこれを全面改訂し、『特別史跡熊本城跡保存活用計画』^{註19}に更新され、現在に至る。両者の目次一覧を記す（表 2）。

表 2 『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』『特別史跡熊本城跡保存活用計画』目次一覧

<p>①特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書 熊本市教育委員会（昭和 58 年 3 月）</p> <p style="text-align: center;">目 次</p> <p>巻頭図版</p> <p>序文 熊本市教育長</p> <p>例言</p> <p>I 熊本城の沿革 7</p> <p>II 熊本城の城域についての検討 15</p> <p>III 特別史跡の指定および解除の経緯 23</p> <p>IV 特別史跡熊本城跡の管理団体の指定 47</p> <p>V 建造物の指定と管理団体の指定 48</p> <p>VI 熊本城の環境整備 53</p> <p>1. 環境整備の基本方針 53</p> <p>2. 地域区分 53</p> <p>3. 環境整備のあり方 54</p> <p>4. 特別史跡内建造物の保存管理の問題点 55</p> <p>5. 将来の問題 56</p> <p>6. 土地の公有化 57</p> <p>7. 今後の追加指定と整備の方向 61</p> <p>8. 特別史跡熊本城跡の整備 61</p>	<p>第 3 章 特別史跡熊本城跡の概要</p> <p>1 特別史跡熊本城跡の概要 12</p> <p>2 特別史跡熊本城跡の指定の経緯と理由 24</p> <p>3 特別史跡熊本城跡の現況 41</p> <p>4 特別史跡熊本城跡の本質的価値 52</p> <p>【各論】</p> <p>第 4 章 保存管理</p> <p>1 保存管理の基本方針 56</p> <p>2 保存管理の方法 58</p> <p>3 各地区の保存管理方針 94</p> <p>4 構成要素の地区分布及び構成要素ごとの保存管理の方針 98</p> <p>5 建造物の保存管理 104</p> <p>6 緑の保存管理 111</p> <p>7 調査研究と担い手育成 115</p> <p>8 現状変更等の取扱い 116</p> <p>9 追加指定 125</p> <p>10 公有化 127</p> <p>11 防災計画 131</p>
<p>②特別史跡熊本城跡保存活用計画 熊本市（平成 30 年 3 月）</p> <p style="text-align: center;">目 次</p> <p>巻頭図版</p> <p>序文 熊本市長</p> <p>例言</p> <p>【総論】</p> <p>第 1 章 保存活用計画の沿革と目的</p> <p>1 計画改訂の沿革 1</p> <p>2 計画改訂の目的 1</p> <p>3 計画改訂の体制と経過 2</p> <p>4 関係法令・計画等 6</p> <p>5 計画期間及び見直しと進行管理 7</p> <p>第 2 章 熊本市の概要</p> <p>1 地理的特性 9</p> <p>2 社会的特性 9</p> <p>3 歴史的特性 10</p>	<p>第 5 章 活用・整備</p> <p>1 活用 135</p> <p>2 整備 139</p> <p>第 6 章 運営・体制の整備</p> <p>1 運営・体制の現状と課題 151</p> <p>2 基本方針 152</p> <p>追章 「平成 28 年熊本地震」による被害の概要 153</p> <p>巻末資料 1 熊本城の管理に関する取扱要領</p> <p>2 特別史跡熊本城跡の破損と修理履歴</p> <p>3 熊本城消防設備リスト</p> <p>4 熊本城消防計画</p> <p>5 整備等を行ってきた組織及び熊本城に関する委員会、答申・報告書等</p>

新旧2つの計画のうち特に「地域区分」「保存管理」「追加指定と整備」等の項目について文章を一部抜粋し比較したのが表3である（表内の下線は、両者の違いを見出して比較するため筆者が引いたもの）。

表3 『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』『特別史跡熊本城跡保存活用計画』の比較

（関連する記載がみられる現行計画『熊本城復旧基本計画』『熊本城復元整備計画』も枠内に一部抜粋・併記）

	『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』	『特別史跡熊本城跡保存活用計画』ほか（現行）
① 地域区分	<p>P53 地域区分 城域を次の2種類に区分して、必要な規制と整備を行なう。 「第1種地区」 特別史跡としての熊本城跡の遺構保存を最優先する地区で、文化財保存に支障を及ぼす行為を強く規制し、文化財保存になじまない既存施設は撤去する地区である。この地区としては指定地域を中心とする本丸、二の丸及び古城地域が該当する。 「第2種地区」 既存施設のうち特別史跡に関し違和感のないものについてのみ存続が許される地区である。この地区としては城域のうち第1種地区を除く残りの地域で、主として三の丸、千葉城地域が該当する。</p>	<p>P58 保存管理の方法 本計画の対象地域は約138haにも渡り、場所によって熊本城跡としての意味合いが異なる点も多数見受けられることから、下記のとおり6つの地区に区分した上で保存管理の方法を決定することとした。昭和57年版では、旧城域を2つの区分に分けて策定を行なっているが、細かく区分することで特色を活かした保存管理を行なっていく。 地区ごとに保存管理方針を定める上で、各地区内におけるさまざまな要素を整理し、価値付けを行なう必要がある。 「本丸地区」「二の丸地区」「三の丸地区」「古城地区」「千葉城地区」「新町地区」 今回、以下のとおり地区内の要素を整理する。 ①本質的価値を構成する諸要素、②価値を高める諸要素、③歴史的経緯を示す諸要素、④現代の利用に関する諸要素</p>
② 保存管理 石垣	<p>P56 特別史跡内建造物の保存管理の問題点 (2) 石垣 石垣の近くに植えられた樹木の根が石垣破損の原因となるおそれのある箇所が多数見られるのは憂慮すべきことであり、石垣の保護対策を早急に立てる必要がある。 明治以降の歴史的経過の中で南大手門のように撤去された石垣、埋門、美術館南側の櫓形等のように、<u>荒廃したり崩壊した石垣</u>については、城域内の境界を明確にするためにも、むしろ積極的に復原することを考慮すべきであろう。 なお、城域の境界を定める土居についても同様であり、ことに旧国道3号線にそった稲荷神社裏手の土居の修復は市内からの景観上、重要である。</p>	<p>P143 整備の方法 (1) 主として保存のための整備について ①石垣 将来の石垣の毀損原因となる樹木は、早い段階での除去に努める。 (2) 主として活用のための整備について ①石垣 熊本城の本来の姿を理解するためには、近代になって失われた石垣の復元整備が有効である。 (2) 主として活用のための整備について ②歴史的建造物 櫓や堀等の歴史的建造物の復元整備は、遺構確認調査や資料の研究及び重要文化財の保存修理によって得られた調査結果を基に価値付けを行ない、史実に基づいて実施する。</p>
③ 保存管理 堀	<p>P56 特別史跡内建造物の保存管理の問題点 (2) 堀 石垣と共に、積極的に復原して保存すべきものに堀がある。ことに昭和28年の水害の排土で埋められた、西出丸の西側及び北側の空堀の浚渫をはじめ、備前堀、古城堀も浚渫して旧態に復すべきであろう。</p>	<p>P62 第2節 保存管理の方法 2 地区ごとの整理 (1) 本丸地区 【堀】 西出丸の北西側の空堀は昭和28年(1953)の熊本大水害の土砂処分場として利用された。また、平成5年(1993)に開催された火の国フェスタの際の整備により空堀から菓研堀への排水溝が埋没しその排水機能が低下しており、常に水が溜まり旧状を失っている。このため、今後調査を行ない、排水施設の有無や構造等の確認及び復旧が必要である。</p>
④ 保存管理 道路・交通計画	<p>P55 環境整備のあり方 (ハ) 強度のスポーツ、通過交通、暴走族の乗入れ等不適切な利用の排除 自動車、オートバイなどの通過交通は城域の静穏を乱し、快適な散策を妨げる。車道は緊急時や維持管理用に必要であるが、そこを通れば遠回りとなるようなルートに付け替えることにより通過交通の乗入れを排除する工夫が望ましい。 P55 特別史跡内建造物の保存管理の問題点 (5) 道路 現在北大手門跡から行幸坂に通じる園路は自動車による通過交通路として利用されているが、城跡内の整備と、市内交通網の再検討によって、このような通過交通を遮断すべきであろう。</p>	<p>P66 本丸地区 (IV) 現代の利用に関する諸要素 本丸と西出丸を分断する形で整備された道路は、生活道路として利用され、一般車両の通行も多い。史跡の保存の観点から、交通計画の再編の中で議論すべき点もある。</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px;"> <p>『熊本城復旧基本計画』P125 第5章 計画の実現に向けて 1 実現に向けた課題と対応 (3) 復旧工事に係る課題 ④仮設建造物の撤去及び行幸坂等の復旧 従前の市民生活に影響を及ぼしている行幸坂等の主要な園路については、歩行や一般車両による通行、緊急車両が常時通行できない問題をはじめ、桜の開花時期や二の丸広場でのイベント時などに周辺道路が混雑するなどの問題が生じていることから、早期の復旧や開放に向けた方針等について被害状況や安全性の精査とともに検討を行なっていきます。</p> </div>
⑤ 保存管理 野球場	<p>P55 環境整備のあり方 (ハ) 強度のスポーツ、通過交通、暴走族の乗入れ等不適切な利用の排除 軽いレクリエーションの利用は差支えないが、野球その他の強度のスポーツは、それなりに整備された運動場が必要であり、それには大規模な観覧席をとまないがちである。そのような施設は城域内にはふさわしくない。</p>	<p>P77 (イ) 三の丸地区を構成する諸要素 (III) 現代の利用に関する諸要素 ク スポーツ施設 藤崎台県営野球場 昭和35年(1960)の熊本国体時に新設された県営の野球場で、熊本県教育委員会体育保健課の管理である(指定管理者制度導入)。平成8年(1996)にメインスタンドの改修が実施された。平安時代から西南戦争で焼失するまでこの地にあった藤崎八幡宮跡(現在は井川淵町に移転)であり、バックスタンド裏には国指定天然記念物のクスノキ群や西側にはかつての藤崎宮の参道に伴う石垣等の遺構が現存している。</p>

<p>⑥ 保存管理 復元建造物</p>	<p>P56 特別史跡内建造物の保存管理の問題点 (4) 近代の建築物 熊本城と関係のない近代の建築物は、城跡管理上やむを得ない建物を除いて、今後新築されるべきではない。既に建っている建物も、県立美術館を唯一の例外として、<u>今後適当な時機にすべて撤去されるべきものとする。</u> 旧熊本城の建物の一部を復原再建する場合にも、原則として、十分な資料に基づいた科学的復原に限ることとして、慎重を期す必要がある。</p>	<p>『熊本城復元整備計画』 P32 4 復元計画 当時の絵図、写真、古文書等の史料に基づき、構造、寸法、そして技法により、可能な限り当時と同じ建造物に復元し、歴史遺産としての価値を更に高める。</p> <p>P108 復元建造物 (『保存管理計画』策定以降の復元建造物) ・数寄屋丸二階御広間 (1989) ・西大手櫓門 (2003) ・南大手櫓門 (2002) ・戌亥櫓 (2003) ・未申櫓 (2003) ・元太鼓櫓 (2003) ・西出丸塀 (2003) ・奉行丸塀 (2003) ・飯田丸五階櫓 (2005) ・本丸御殿大広間 (2007) ・馬具櫓及び続櫓 (2014)</p>
<p>⑦ 追加指定の計画</p>	<p>P61 今後の追加指定と整備の方向 (1) 古城 (熊本県立第一高等学校) 地域全域 熊本城の歴史上最も重要な地域の一つであり、現在指定されている古城堀、坪井川沿いの石垣の補修、ことに坪井川の船着場の復原をはじめとし、古城堀、古城の中堀を完全に浚渫復元する。 (2) 国立熊本病院、総合庁舎、熊本県営プール地域 これら施設の移転にともない、石垣、土居、道路等地形を復原、補修のうえ公園化する。 (3) 現在の科学及血清法療法研究所敷地を中心とする、いわゆる三の丸北部地域 新堀門から森本櫓を経て杉馬場上に至る熊本城北西の境界を形成する崖上の石垣や土居は、市内よりの景観と、崖下の住民に対する防災を充分配慮しながら、復原、修景される必要がある。化血研移転をまって、同地にあった二ノ丸屋形跡の保存に留意しながら公園化する。なお崖下にある杉塘の一部を復原する。 (4) 藤崎台 (三の丸西地域) 熊本城発祥の地ともいべき藤崎台敷地は、熊本城の歴史上重要な地域であり、現在の野球場移転の後には、その施設を撤去し、旧藤崎宮神域を復原する。また藤崎台西側の崖下にあった堀は、城跡の範囲を明確にする上から復原されるべきである。 (5) 千葉城地域 (三の丸東地域) 千葉城跡は熊本城の歴史の中でも重要な位置を占めるにもかかわらず、不要施設の移転を促進し、熊本城と市街地の緩衝地帯として復元的に公園化が計られるべきである。</p>	<p>P126 2 基本方針と今後の計画 これまでの追加指定に対する考え方等を踏まえ、追加指定の基本方針を下記のとおりとする。 (1) 基本方針 ①特別史跡に指定された地域においては、所有者等に現状変更等の制限を課すものでもあるため、追加指定を進めるにあたっては、現状変更等の取扱基準等について十分周知を図った上で、所有者等の意向を踏まえるとともに、他の公益との調整を図るなど十分な協議・調整を行なった上で、下記に留意しながら追加指定を検討する。 ア 既に市街地や大規模施設等として開発が進んでいる区域においては、史跡の本質的価値に関わる重要な遺構が確認された場合に追加指定の検討対象とする。 イ これまでに指定が解除された箇所等城郭としての地形や遺構が残っていない箇所については、史跡としての一体的な保存と活用を行なう上で特に重要な場合のみ、追加指定を検討するものとする。 ②公有地を中心に追加指定を検討していく。 ③民有地において、公有化が前提となる場合には、次節の「公有化の方針」との整合性を図られる場合に限り、追加指定を検討する。 (2) 今後の計画 「平成 28 年 (2016 年) 熊本地震」による被災状況及び震災対応等による今後の計画への影響や本市の財政状況等を踏まえ、下記を検討対象とするもの。なお、本保存活用計画の見直しの際には、追加指定の今後の計画についても見直しを図る。 ①公有地・・合同庁舎跡、三の丸・古城地区の市有地等所有者である財務省をはじめ各関係者と協議し、追加指定を検討する。 ②民有地・・高麗門跡 (新町地区)、旧 JT 熊本支店跡地・旧 NHK 熊本放送局跡地 (千葉城地区) 「JR 鹿児島本線等熊本駅付近連続立体交差に伴う高架下利用協定」を締結している高麗門跡については、所有者である JR 九州をはじめ各関係者と協議し、追加指定を検討する。 また、千葉城地区の旧 JT 熊本支店跡地及び旧 NHK 熊本放送局跡地については、中世の千葉城にも由来する旧地形も残り、熊本城と中心市街地との結節点や城下町側からのエントランスとして、史跡としての一体的な保存と活用を行なう上で特に重要な場所であるため、今後、それぞれの所有者、各関係者等と協議し、追加指定を検討する。</p>

なお『特別史跡熊本城跡保存活用計画』(H30.3)の策定からまだ2年しか経過していないが、その記載内容を現状(令和2年3月末現在)と照らしてみると「⑦追加指定の計画」については前述したように平成30年10月に「桜の馬場地区(合同庁舎跡地・城彩苑)」と「高麗門跡・御成道跡」、平成31年10月に「千葉城地区(JT跡地・NHK跡地)」が追加指定されており、それぞれ予定通りの保存が実現している。

一方で『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』(S57) P55 (5) 道路の「現在北大手門跡から行幸坂に通じる園路は自動車による通過交通路として利用されているが(中略)通過交通を遮断すべき」の部分は、現行では記載が弱くなったが、平成28年熊本地震の被災で本丸の主要なエリアが立入規制区域となり、さらに復旧工事着手後も「工事用スロープ」設置や安全確保等のため、加藤神社前より南側(行幸坂を含む)の交通路については、「一般車両の通行止め」が図らずも実現できている状況となっている。

ちなみに行幸坂の通過交通の問題については、上記の計画以外にも過去に様々な提案がなされてきた。

例えば『熊本城整備に関する報告書』(S49) 註²⁰においては「廃止すべき車道」としており、現行の『熊本城復元整備計画』(H9) 註²¹においても「歩行者専用道化」「電動カートの運行」などの記載が見られる。これらの計画では具体的な「交通計画」を図示したものもあるので、以下にその事例を紹介する。

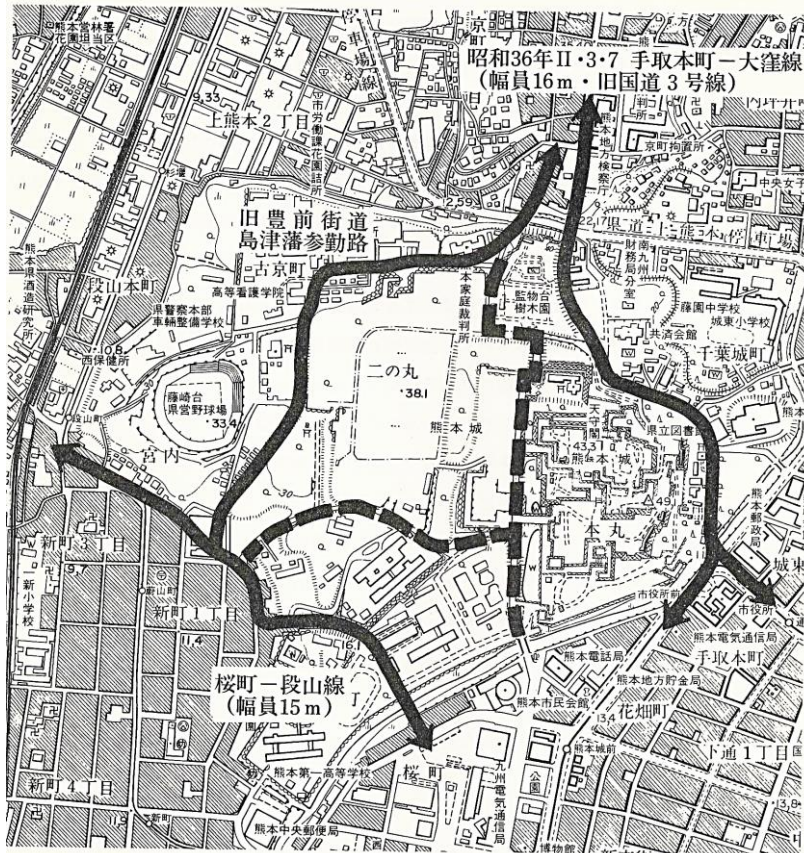


図15 「交通計画」(『熊本城整備に関する報告書』註²²)



図16 「交通計画」(『熊本城復元整備計画(平成9年度)』註²³)

3 これまでに打ち出された具体的な整備案について—千葉城地区を中心に—

本章では、現行の『特別史跡熊本城跡保存活用計画』^{註24}で区分されている6地区（本丸・二の丸・三の丸・古城・千葉城・新町）のうち、当面の史跡整備の課題でもある「NHK跡地」を含む「千葉城地区」について取り上げる。これまでに打ち出された様々な方針・構想・計画の中で、どのように情報が整理され、どのような整備案が提示されていたかという点に注目しながら年次順に紹介する。

1) 『熊本城整備に関する報告書』(昭和49年10月)^{註25}の整備案

P41 2.5.3 各曲輪の具体的対策 (5) 千葉城地域

i) 玉川の整備

玉川は旧国道3号線の拡幅で、川幅が狭められ、現在では道路側溝のような状態になっている。旧状に戻すべきである。

ii) 旧坪井川筋の保存

坪井川の改修によって、旧坪井川はその機能を失い、かつては重要な内堀であったことも、市民から忘れられようとしている。この川が残されてこそ、千葉城北側に石垣を築かず、土居にしていたわけがはっきりする。川筋にある不法建築には早急に立ち退きを求め、旧態に復す必要がある。とくに、この東北部には折梅檀柵形があったところで、現在はその所在も不明になっている。旧城郭の外縁線が実感できるように、旧坪井川と、川筋の斜面の保存をはかるとともに、北の守りを固めていた柵形の調査も行なうことが必要である。

P109 千葉城一帯

市役所前から京町へ抜ける旧国道3号線と、旧坪井川に挟まれる部分、すなわち千葉城一帯は、多くの近代建築によって東方から見る熊本城をほぼ完全にかくしてしまっている。

この地区は全体が細長く、城域、とくに本丸部分の東と北東部に接するために城と眺望に関連して重要なゾーンである。このため、この地区は建造物を持たない一帯として、若干の造園を伴う公園とするのが適当である。

旧3号線との間に十分な干渉地帯をとって園路を設け、園路沿いに木蔭をつくる樹木を植えるほかは、低木、草木、芝生、藤棚などを配するにとどめて、眺望を妨げないための配慮が必要である。

一部に花の咲く木、においのある木を植えるのも良く、付近の官公庁や会社の昼休にでも自由にくつろげて、季節によって異なる公園の色やかおりを楽しむ公園であってよい。

さしあたっては、この地区内にある諸施設の協力を得て、全部の敷地の塀や境界をとり除き、敷地内の公園化を進めて市民に開放し、公園の中に諸施設の建物が散在する形とすることが考えられる。その後は順次に施設の移転を伴って全体の公園化を進めることができる。

この地区の東北部の旧坪井川沿いの崖地は、旧城郭内の境界線である。昔は折梅檀の柵形によってのみ城内外の連絡が可能であったところで、昭和37年までは厩橋から錦橋まで、この城郭境界線沿いに、特別史跡区域として指定されていたが、同年NHK九州本部が設けられるさいに指定解除されてしまっている。この意味から、崖の斜面は適当な方法で保護し、昔内堀であった旧坪井川を含めて保存されるべきである。

この崖下の一帯は城域外ではあるが、明治末期から主として学校敷地として利用され、幸いにしてその他の城域周辺に比べて現在もそれほど高密度化していない。城域周辺市街地の高密度化（高さ・建蔽率・容積率等）防止のための建築規制にさいして、とくに考慮されることが望ましい地区である。

2) 『フィールド・ミュージアム熊本城—明日の熊本城域を考える—』^{註26}の整備案

P199 第3節 活用と整備

7) 千葉城は隈本城が古城地区に作られる以前の跡地である。従って鹿子木寂心、城親賢ら加藤清正以前の肥後の豪族を物語る地点として顕彰すべきところといえる。下って細川忠利時代に入っては、食客として肥後に来た宮本武蔵の住居跡でもある。

宮本武蔵については、五輪書を著した霊巖洞が有名で名所化している。しかし生活した千葉城については標木が1本あるだけである。

武蔵が使ったと伝えられている井戸もNHK会館の工事で脇へやられ、現在は見る陰もない。この地区は植木市の創始者と伝えられる城親賢を県民によく知らせるためにももっと本格的な整備が必要である。親賢・武蔵記念館などの施設もあっていいのではないか。

3) 『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』^{註27}の整備案

P61 7 今後の追加指定と整備の方向性 (5) 千葉城地域 (三の丸東地域)

千葉城跡は熊本城の歴史の中でも重要な位置を占めるにもかかわらず、公共的な施設による敷地の蚕食が最も進んだ地域である。旧坪井川の斜面を整備して城域の外縁を明確にすると共に、不要施設の移転を促進し、熊本城と市街地の緩衝地帯として復原的に公園化が計られるべきである。

4) 『歴史廻廊都市くまもとーフィールドミュージアム熊本城下町の提案』^{註28}の整備案

P100 4-3 実現にむけての提案(3) バファゾーンの設定

熊本城は主要部の約43haが特別史跡として指定されている。史跡指定地は今後とも恒久的な保存が図られるとともに、現状の改変も制限され、景観はほとんど凍結されているといえよう。しかしながら、指定区域は城郭遺構の範囲の最小限にとどまっているために、指定範囲と接する区域を主とした区域は、景観上及び遺構の保存上特に重要であるにもかかわらず何の規制も行われていない状況である。このため一定の区域は何らかの規制がなされるべきである。つまりこの帯状の区域は、バファゾーン(Buffer zone=緩衝帯)とし区域内の建築物は高さや色彩の制限を行なう必要がある。バファゾーンの幅は可能な限り広く設定することが望ましいが、現況や土地利用計画等さまざまな角度から決定すべきである。

なおバファゾーンの効果をさらに高めるために、城内域に点在する大規模施設は将来的に移転をすべきであろう。

P104 4-4 整備例(1) 地区の整備イメージ 整備例①:城内への東からのアプローチ整備(整備計画)

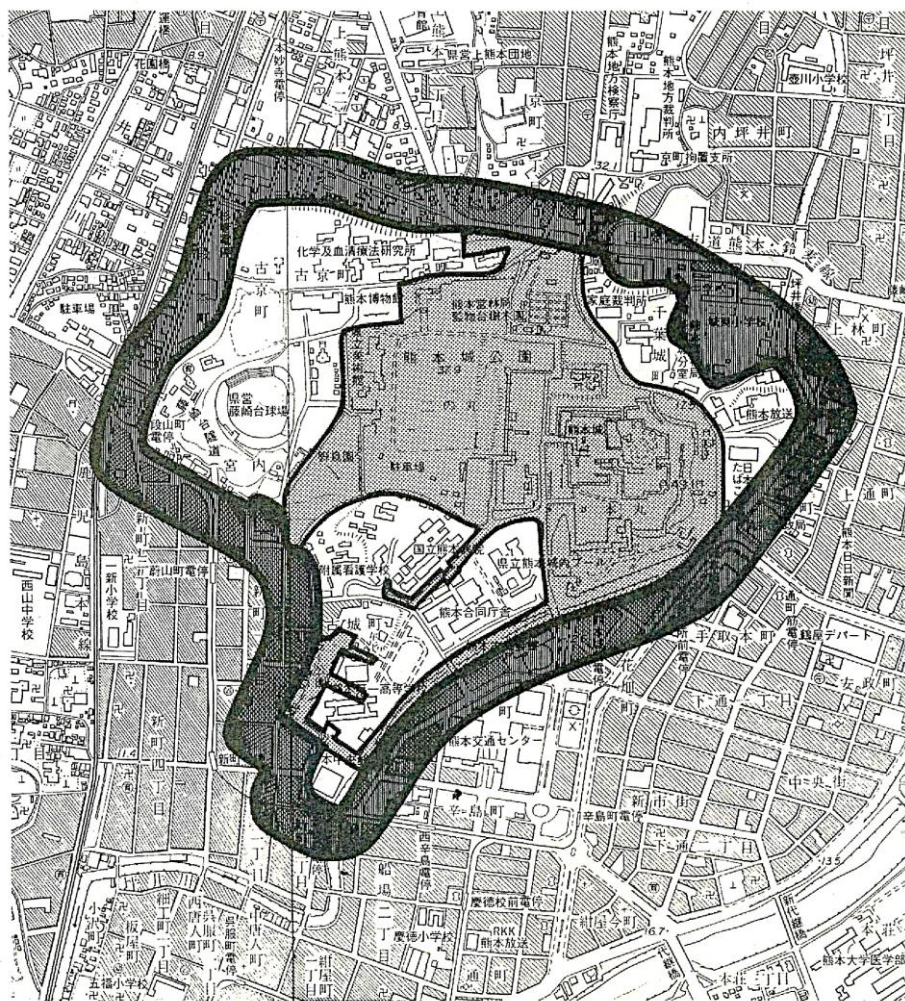
現在城内への東からのアプローチは厩橋となっているが、本来は藪の内橋であった。現在の城内管理形態からも上通りからのアプローチが弱い。よって藪の内橋を復原し、東からのアプローチを整えると同時に周囲をバファゾーンとして公園化する。

このことにより、坪井川より城内側は歴史公園化され、本来の城内・城下町域が明確にできる。

さらに、景観的にも大きな「引き」を生み出すことになり、20m級の高石垣のうえに、重要文化財櫓群を望む絶好の望城地となろう。

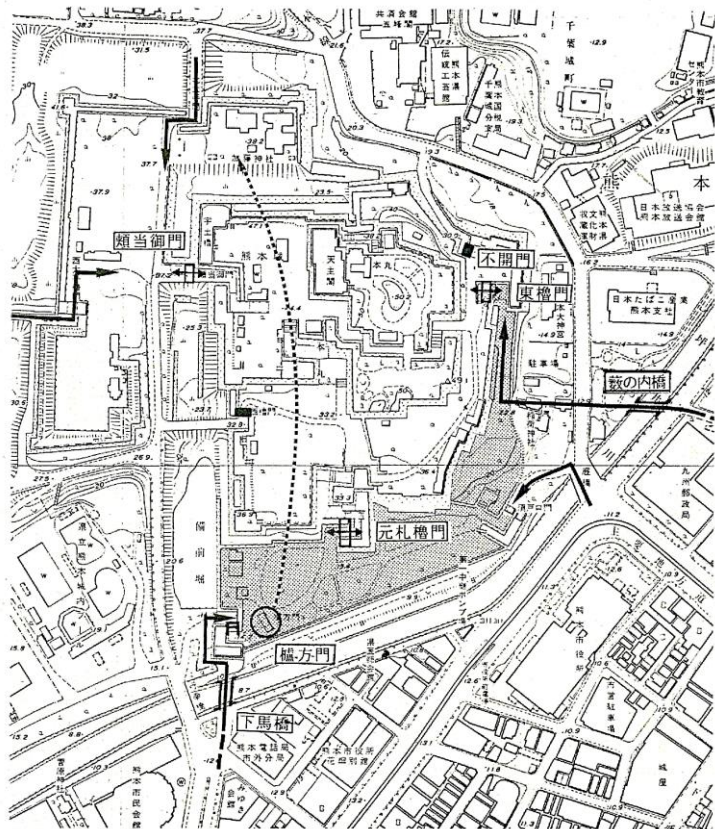
さらに、東御門を復原し、料金徴収所とすることにより、竹の丸を開放ゾーンとする。

なお、この計画は施設の移転を伴うので代替地、代替施設の確保や交通体系の見直し等長期展望に基づいた段階的整備が必要となる。



特別史跡指定地域
バファゾーンの幅を100mと仮定した場合

図17 『歴史廻廊都市くまもとーフィールドミュージアム熊本城下町の提案』^{註29}の整備案



- 閉ざされた門
- ⊕ 出入可能な門（料金所をもつ）
- ▨ 無料化する区域
- ← 主なアプローチ
- 橋の復原
- ⌌ 冠木門の復原
- ⋯ 門の移築復原

図18 『歴史廻廊都市くまもとーフィールドミュージアム熊本城下町の提案』註29の整備案

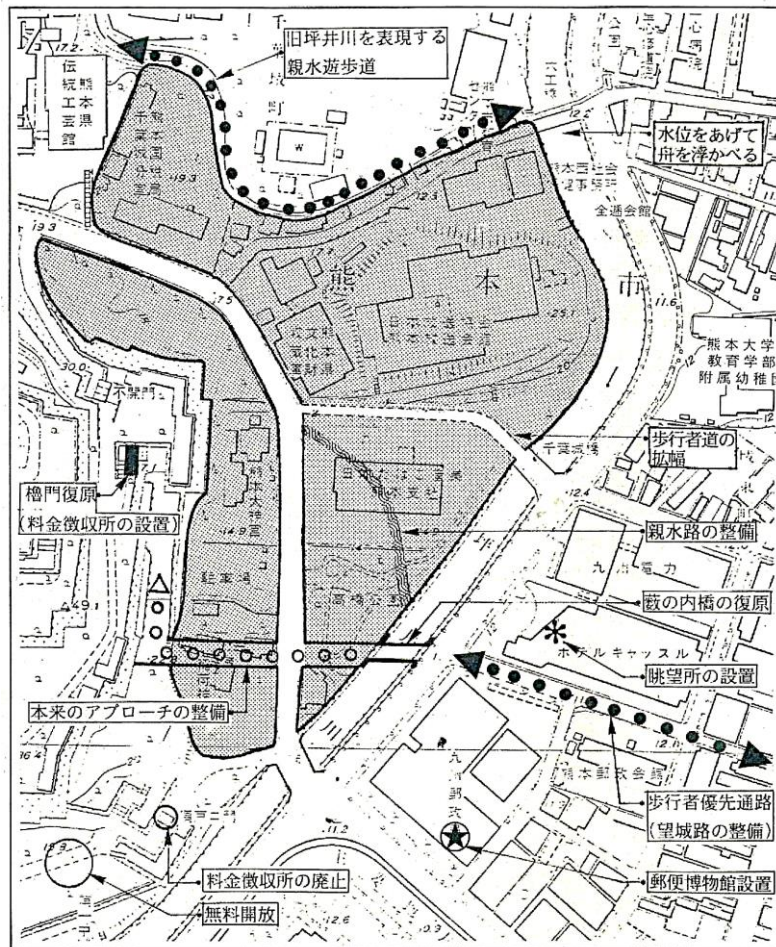
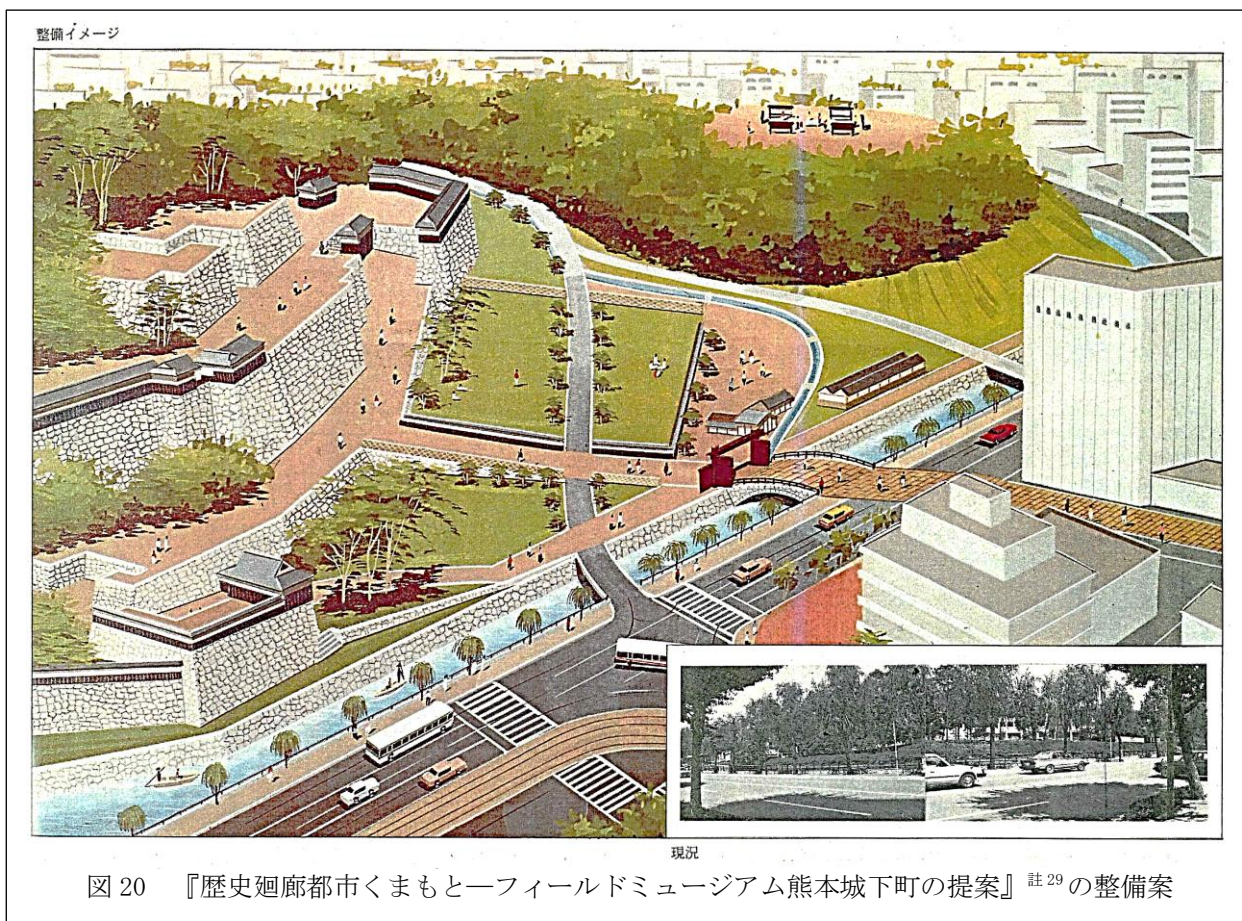


図19 『歴史廻廊都市くまもとーフィールドミュージアム熊本城下町の提案』註29の整備案



5) 「熊本城復元整備計画（平成9年度）」^{註30}の整備案

P52 7. 各ゾーンの整備計画 (5) 千葉城ゾーン

ー1 現状・課題

①特徴

出田三郎秀信によって、城域で最も古い中世の城、千葉城が築かれた所。また藩政時代には宮本武蔵の旧居があった。江戸末期には原道館が建設され、明治以降、旧軍時代には偕行社が置かれ、戦後NHKが開業し現在に至っている。

旧国道3号がこの地を分断したこともあり、諸施設の建設が最もおこなわれた所である。

②現状

現在、家庭裁判所、KKRホテル熊本、県伝統工芸館、県立美術館分館、NHK、日本たばこ産業や一部民家があるなど往時の面影はない。

③史跡・遺構の保存状態

地域の「周縁部」を形どる水路は、旧藩時代の坪井川の跡を示すものである。

④特別史跡指定の状況

旧国道3号が史跡内にある。他は未指定である。

⑤課題

上通等の中心商店街に近い位置を生かした、もてなし・交流等のサービスの充実が望まれる。

ー2 現状・課題

①基本方針ー文化交流ゾーンー

上通等の中心商店街に近い位置を生かし、且つ美術館分館や伝統工芸館等の既存の施設を生かして、文化・交流の場、サービスゾーンとして整備する。

②短期整備

県立美術館分館、県伝統工芸館等は、歴史公園内の文化・交流施設として積極的に活用していく。

高橋公園を再整備する。

③中・長期整備

上通などの市街地に近いため、市街地と城域との連続性を強めるための整備を促進する。

旧坪井川の河川敷を散策路として整備する。

藪の内橋を復元する。

出田三郎秀信、宮本武蔵、林桜園のゆかりの地として整備する。



図 21 「千葉城ゾーンの整備計画」(「熊本城復元整備計画 (平成 9 年度)」^{註 30}P53 より転載)

6) 「特別史跡熊本城跡保存活用計画 (平成 30 年 3 月)」^{註 31}による保存管理方針

P96 第 3 節 各地区の保存管理方針 5 千葉城地区

(1) 地区の概要

千葉城地区は、本丸地区の北東に位置し、旧城域の東に展開する地区である。中世期にも城(千葉城跡)が築かれ、幕末まで武家屋敷が存続するなど、熊本城跡において歴史的にも重要な位置を占めている。

旧城域の中でも、公共施設や民間施設が多く建設されてきた地区で、現在では、家庭裁判所をはじめとする国・県・市の既刊及びホテルやマンション・民家が混在しているが、熊本城跡の北東部の城域を区分する旧坪井川の流路や崖等の旧地形がよく残る地区である。

また、近況において、旧 JT 熊本支店の解体や旧 NHK 熊本放送局の機能移転がなされており、今後、隣接する本丸地区と一体となった史跡の適切な保存と地域の魅力向上に資する活用が期待される地区である。

(2) 基本方針

1. 旧城域を形づくる地形の保存に努めるとともに、隣接する本丸地区と一体となった景観の形成に努める。

P98 第 4 節 構成要素の地区分布及び構成要素ごとの保存管理の方針 千葉城地区

- ・特別史跡熊本城跡の本質的価値を構成する要素・・・旧地形、武家屋敷の地割りを構成する石垣、城下(坪井)と区分する旧坪井川、屋敷割に伴う排水溝、武家屋敷に付随する井戸3基、玉川護岸石垣
- ・特別史跡熊本城跡としての価値を高める諸要素・・・歴史資料(絵図・文献資料・発掘調査等で出土した遺物・伝世品等)
- ・特別史跡熊本城跡の歴史的経緯を示す諸要素・・・築城以前の地下遺跡等(千葉城横穴群)、西南戦争及び鎮台・軍の地下遺構等(工兵営跡ほか)

P142 第 2 節 整備 3 地区ごとの整備方針 (5) 千葉城地区「文化交流ゾーン」

本丸地区と隣接した空間を活かし、史跡・公園整備等を行なって旧城域としての史跡の一体的な保存を図る。あわせて、城下町側からのアクセスを意識したエントランスとして位置づけ、既存の文化施設等も活用して市民等が歴史文化・芸術に親しむことができるなど地域の魅力向上に資する地区として整備する。

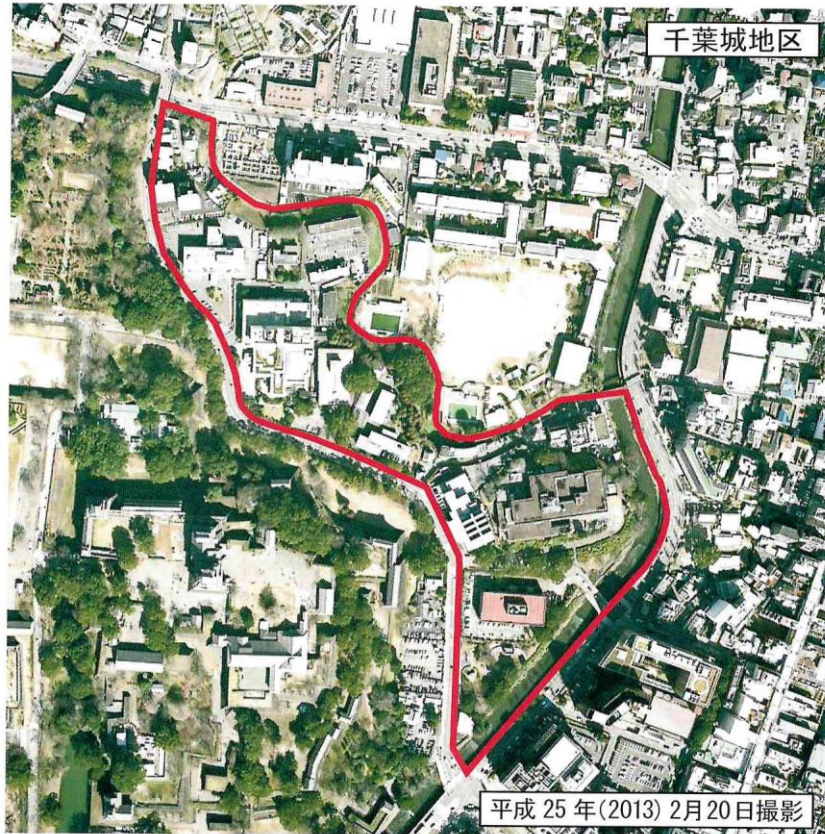


図 22 「千葉城地区航空写真」(「特別史跡熊本城跡保存活用計画 (平成 30 年 3 月)」^{註 31}P87 より転載)

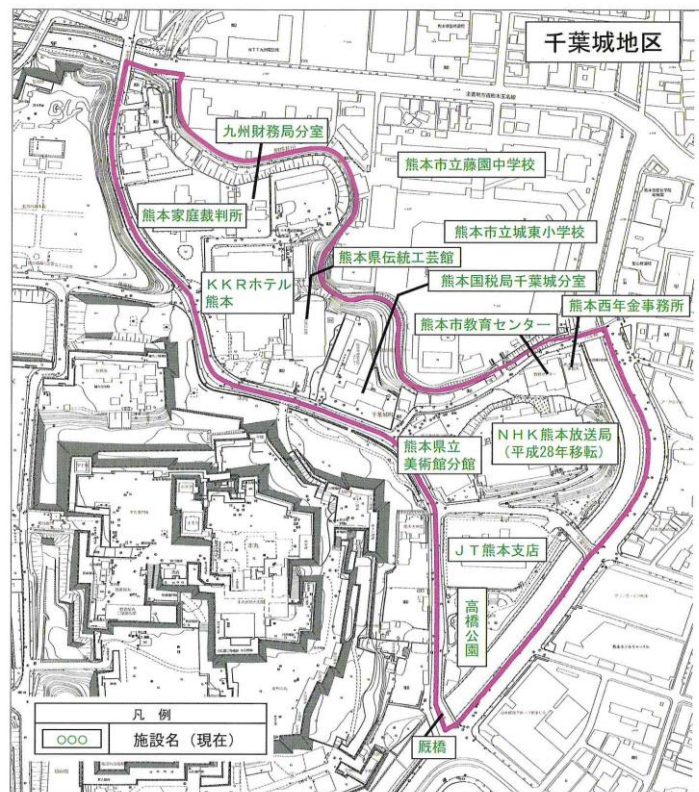


図 23 「千葉城地区建造物位置図」(「特別史跡熊本城跡保存活用計画 (平成 30 年 3 月)」^{註 31}P91 より転載)

7) 「熊本城跡千葉城地区（J T跡地、NHK跡地）保存活用基本構想」^{註32}による保存活用の基本方針

P9 第4章 保存活用の基本方針 2 JT跡地の基本方針

【土地】特別史跡に追加指定し、国補助なども活用して土地を取得する。

【整備】当面は復旧事業に使用し、その後史跡整備を行う。

P10 復旧後の史跡整備案の一例（*復旧使用中に検討する） 広場・史跡公園等としての活用

①熊本城（千葉城側）復旧記念広場

・重要文化財建造物と石垣などの震災被害とその後の復旧を後世に伝える

②歴史広場

・熊本城の理解と愛着を深める広場（中世千葉城から近代、西南戦争から近現代までの変遷を紹介し、発掘調査成果に基づき井戸・水路などを遺構表示）

③本丸と城下町をつなぐ散策拠点

・中心市街地（上通り・通町筋）と熊本城をつなぐ連携活用の拠点

④高橋公園と一体となった憩いの場

・熊本城を眺める緑豊かな憩いの空間（市民が日常的に休憩できる開放的な広場）

・市民や観光客と中心商店街等の交流イベント開催の場（非日常の活用）

P11 第4章 保存活用の基本方針 3 NHK跡地の基本方針

【土地】特別史跡に追加指定し、国補助なども活用して土地を取得する。

【整備】文化財価値の保存、千葉城地区の歴史を表示、熊本城の理解促進、景観保全と緑地の整備、歴史・文化を伝える整備、熊本城復旧復興の拠点、熊本城調査研究の拠点など

P12 主体となる史跡整備（歴史的・文化財的価値の保存活用の方法）

遺構 敷地内の地下遺構は確実に保存し、これまでの調査成果を表示する。（遺構の位置特定ができていないため遺構表示は困難）。千葉城の位置、熊本城の東側景観、歴史的位置付けなどを展示解説。

地形 現存する地形を保全し、絵図・古写真により土地変遷を展示解説。

景観 名物である南斜面のつつじを残し、平坦面には植樹を行う。

P15 第5章 今後の進め方 4 想定スケジュール

2019年～	追加指定の意見具申提出・答申・告示、NHK跡地整備計画立案
2020年～	J T跡地取得、NHK跡地既存建物解体
2021年～	NHK跡地取得、NHK跡地整備工事基本設計・実施設計・着工
2024年～	NHK跡地供用開始



図24 「対象区域（J T跡地・NHK跡地）と一体的な史跡整備イメージ」（「熊本城跡千葉城地区（J T跡地、NHK跡地）保存活用基本構想」^{註32}P11より転載）

4 史跡保存・整備・活用の振り返り ―千葉城地区でその後実現できたもの・できていないもの―

前章で紹介した構想・方針・計画等のうち、策定後から現在までに千葉城地区で実現できた内容をまとめた（表 4）。やはり実現までには大変長い時間がかかっており、民間施設（J T・NHK）の特別史跡外への機能移転・建物解体・追加指定・土地取得等は、提案から 40 年を経て近年ようやく実現した。しかし J T・NHK 両跡地の追加指定も、千葉城地区全体から見ると、ごく一部の面積に過ぎない。

言い換えれば、表 4 以外の具体的な提案に対しては「実現できていないもの」の方が多い。その原因は、既に土地所有者にて利用がなされているため多岐にわたるが、例えば冒頭で述べたように、策定した時期が古いために現代の諸事情（熊本地震による被災・復旧工事、周辺の関連施設の状況変化、公共交通の状況変化など）とは相容れない内容になってしまった、なども推察される。

表 4 千葉城地区でその後実現できた内容

	提案していた計画名	具体的な提案内容	達成時期・内容（R2 年度予定含む）
①	『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』	不要施設の移転を促進し・・・	H27 JT 機能移転、H28 建物解体 H29 NHK 機能移転、R2 建物解体予定
②	「熊本城跡千葉城地区（JT 跡地、NHK 跡地）保存活用基本構想」	JT 跡地の基本方針 【土地】特別史跡に追加指定し、国補助なども活用して土地を取得する。	H31.10 JT 跡地の追加指定 R2.3 JT 跡地の土地取得
③	「熊本城跡千葉城地区（JT 跡地、NHK 跡地）保存活用基本構想」	NHK 跡地の基本方針 【土地】特別史跡に追加指定し、国補助なども活用して土地を取得する。	H31.10 NHK 跡地の追加指定 R3.3 NHK 跡地の土地取得予定

5 まとめ ―今後の史跡整備に向けて―

特別史跡熊本城跡においては、現行計画（最新版）3 件、すなわち上位計画である①『特別史跡熊本城跡保存活用計画』（H30）、さらに②『熊本城復旧基本計画』（H30）、③『熊本城復元整備計画』（H9）に基づいて今後も保存・活用・整備を進めていくことには変わりはない。しかし今後の史跡整備を考える上では、過去に議論・提案された整備案が多数存在した経緯についても、やはり知っておく必要があるだろう。上記 3 つの計画に集約される形でその役割を終えた過去の整備案の中には、その予算規模や周囲へ与える影響が大きいために、結局実現に至らなかった案も含まれている^{註 33}。しかし現代の視点で捉え直せば^{註 34}、過去の整備案の中にも様々なヒントが含まれている。

また前述したように平成 28 年熊本地震の影響で、過去の整備案の一部が図らずも実現できている状況もある。例えば千葉城地区における J T 建物・NHK 建物の解体や J T 跡地・NHK 跡地の追加指定、その他にも行幸坂における「一般車両の通行止め」などが挙げられる。先人の提案を「過去のアイデア」として一笑に伏すことなく、斬新な交通計画等も含めて今一度柔軟に受け止め、情報共有し、今後の復旧工事・史跡整備の参考としたい。

註・引用文献

- 1) 熊本市 2016 『特別史跡熊本城跡総括報告書 整備事業編』
- 2) 熊本市 2018 『熊本城復旧基本計画』
- 3) 熊本市 2018 『特別史跡熊本城跡保存活用計画』
- 4) 熊本市教育委員会 1983 『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』
- 5) 熊本市 2019 『熊本城跡千葉城地区（J T 跡地、NHK 跡地）保存活用基本構想』

- 6) 前掲註 4 に同じ。
- 7) 熊本市企画調整課 1997 『熊本城復元整備計画』
- 8) 熊本市 2016 『特別史跡熊本城跡総括報告書 整備事業編』
- 9) 前掲註 2 に同じ
- 10) 前掲註 3 に同じ。
- 11) 前掲註 5 に同じ。
- 12) 熊本城整備に関する報告書 昭和 49 年 10 月 熊本城整備研究会
- 13) 石井清喜・松本寿三男・矢野和之・富士川一裕・澤治彦 1989 年 6 月 『フィールド・ミュージアム熊本城—明日の熊本城域を考える—』 あすの熊本城を考えるフォーラム、熊本開発研究センター研究年報（第 1 号）別冊
- 14) 熊本市（都市局計画部都市計画課）1989 年 3 月 『歴史廻廊都市くまもと—フィールドミュージアム熊本城下町の提案』（熊本城周辺シンボルネットワーク、シンボルスポット整備計画）
- 15) 前掲註 3 に同じ。
- 16) 前掲註 7 に同じ。
- 17) 前掲註 7 に同じ。
- 18) 前掲註 4 に同じ。
- 19) 前掲註 3 に同じ。
- 20) 前掲註 12 に同じ。
- 21) 前掲註 7 に同じ。
- 22) 前掲註 12 に同じ。
- 23) 前掲註 12 に同じ。
- 24) 前掲註 3 に同じ。
- 25) 前掲註 12 に同じ。
- 26) 前掲註 13 に同じ。
- 27) 前掲註 4 に同じ。
- 28) 前掲註 14 に同じ。
- 29) 前掲註 14 に同じ。
- 30) 前掲註 7 に同じ。
- 31) 前掲註 3 に同じ。
- 32) 前掲註 5 に同じ。
- 33) 例えば、過去に複数の計画で提案された「藪の内橋の再建」が挙げられる。これは「熊本城南面大観図」（永青文庫所蔵）すなわち南面からの鳥瞰図に描かれている藪の内橋（石橋）の再建案である。坪井川に架かる橋は「熊本城南面大観図」画面左から右（下流から上流）へ向かって下馬橋・厩橋・藪の内橋が順に描かれている。なお藪の内橋の位置は、現在の高橋公園付近にあたる。
- 34) 例えば前述の「藪の内橋の再建」で言えば、当時は実物大の建造物を「再建」「復元」する整備案だったと思われるが、これを「解説板」を使った説明へ変更、あるいは「VR」を使った映像体験など最新の手法を導入することで、今後実現できる可能性もある。

熊本城調査研究センター年報 6

令和元年度

2020年8月

発行 熊本市熊本城調査研究センター

〒860-0806

熊本市中央区花畑町 9-6

TEL (096) 355 - 2327